

342
229



始



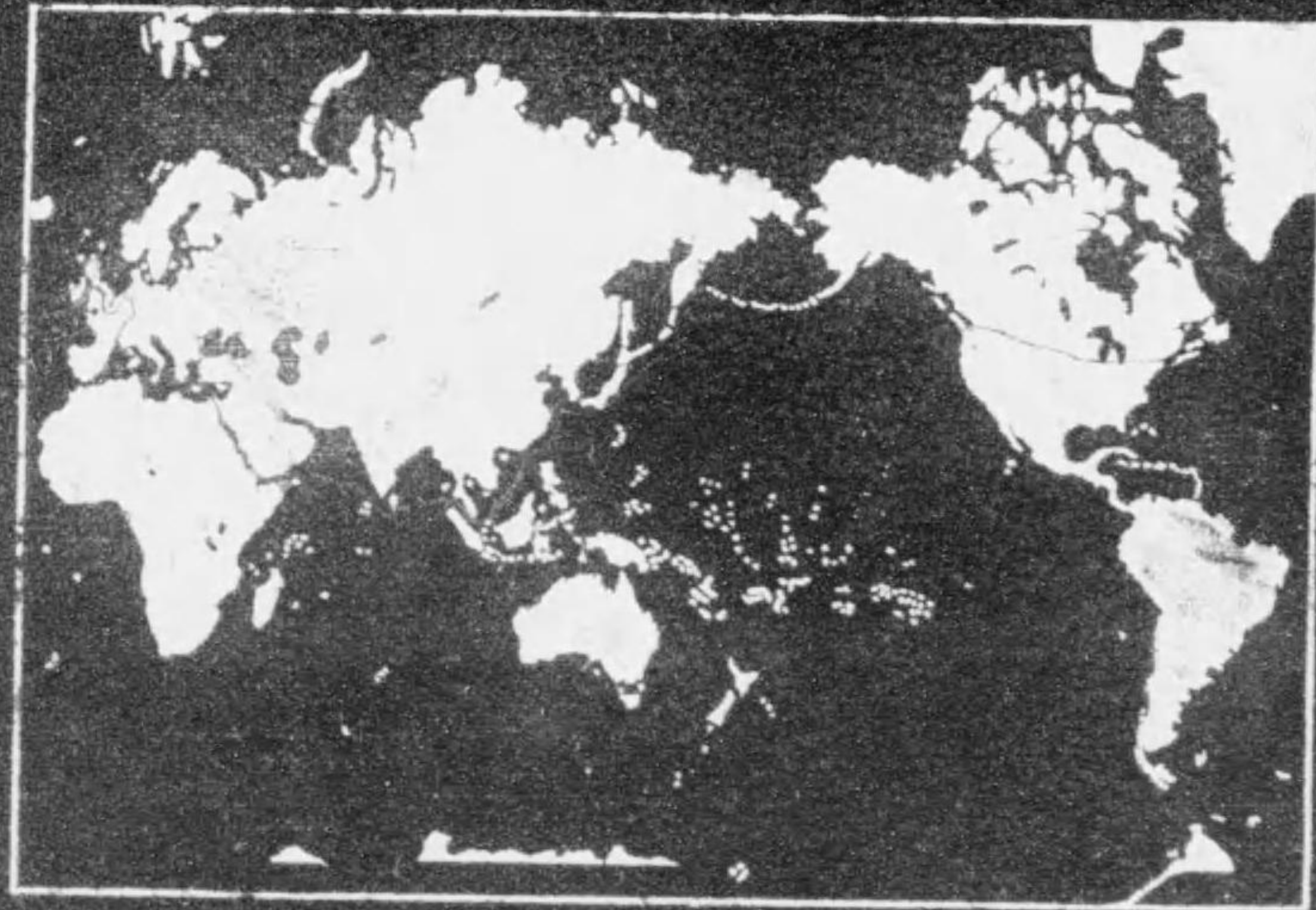
露光量違いの為重複撮影



露光量違いの為重複撮影

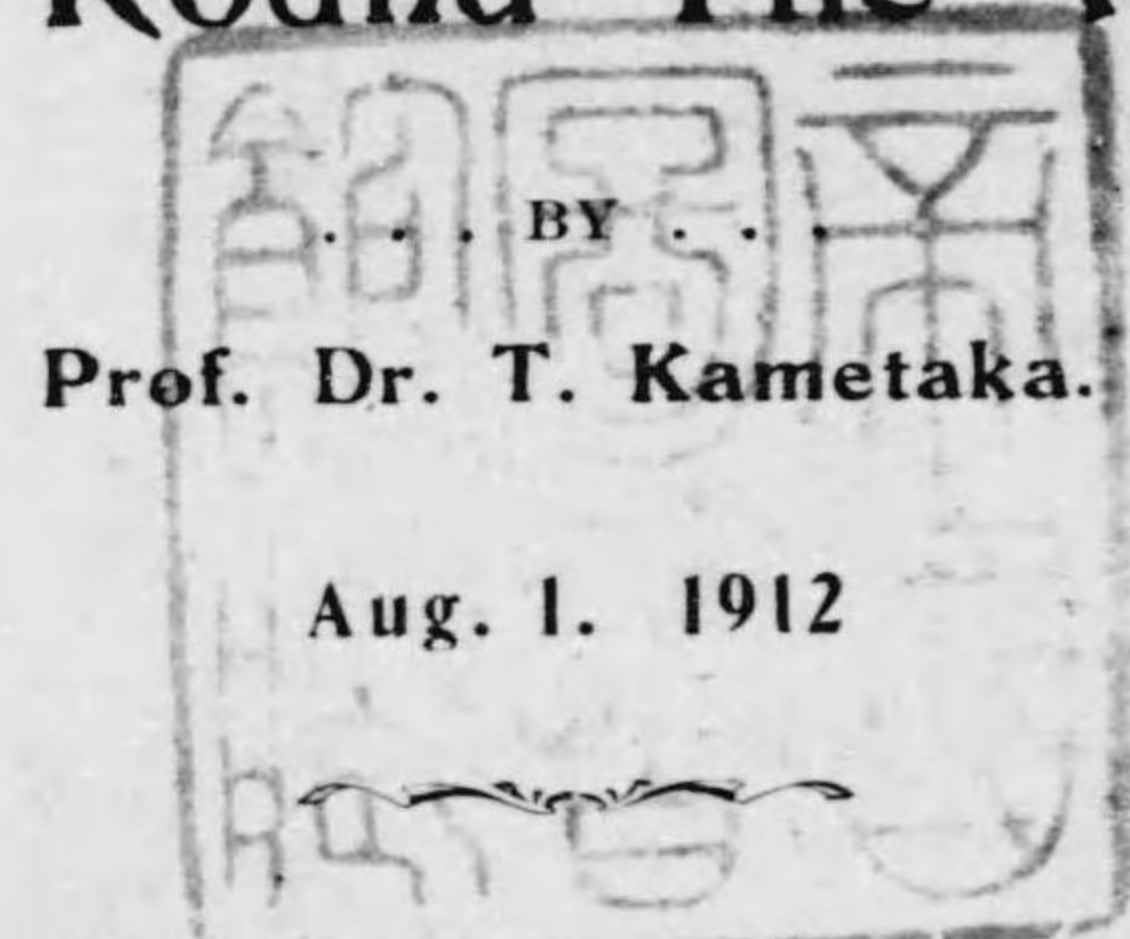
理科視察
世界一週記

理學博士
龜高徳平著



342-229

A Science-Teacher's
Trip Round The World



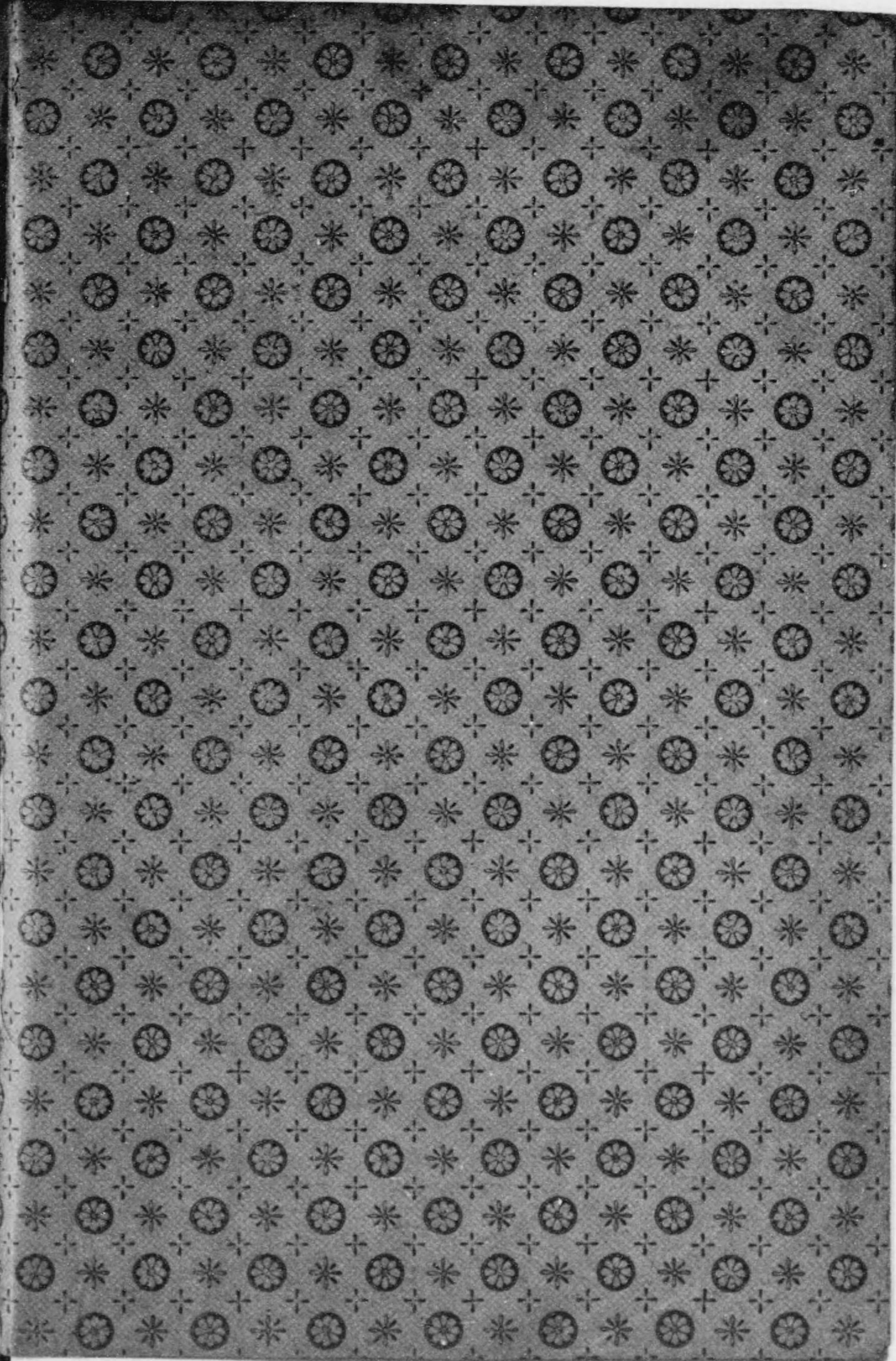
理 科 視 察
世 界 一 週 記

理 學 博 士

龜 高 德 平 著



丸 善 株 式 會 社



緒言

近年我邦人にして海外に遊ぶもの多く従て其見聞録の世に公にせられたるものは決して少くない、然し理學に關する見聞録は餘り多く聞かないのである、之れ理學者は一般に筆を執るの煩を厭ふに由る事と思ふ、予の如きも其一人である。

然るに此著ある所以のものは予も亦國費を以て歐米先進國を視察し得たのであるから此等の諸國に於て初等及び中等の諸學校にて理科を教授するには如何なる方法を探りつゝあるか、社會一般に理學思想の普及せるは何に由るか、如何にして今日の理科学研究の旺盛を來たし

たるか、又如何にして工業の發達、富國強兵の實を擧げたるか等に就き予の見聞せし所、感ぜし所を公にし多少たりとも邦人の参考に資するは寧ろ予の義務と信じたからである。

然し予の外遊の主なる目的は學理の研究にあつたので日々實驗室に籠城したる事とて廣く泰西の文物を視察することは出来なかつたのである、唯學校の休暇又は甲地より乙地に轉學の途中を利用して諸種の學校を視察し傍ら名所古蹟をも一覽したのであるから視察は甚だ不十分である、且つ留學國を更ゆること三度に及んだから一國に滞在すること僅々一ケ年なれば各國に於ける觀察は皮相に止まり正鵠を失ふことも少なからずと思

ふ、唯各國の滞在時日同一なりしが故に稍公平なる比較判斷をなし得たりと信ずるのである、

理科に關することのみにては乾燥無味に失するが故に地理、風俗、宗教、遊戯等に關することをも加味し、且つ失敗談等をも有の儘に告白し一は此書の興味を増し一は予の一生に於ける此の大なる出來事の眞率なる紀念となさんと志したのである、

つまり此書は予が外遊の副産物、然も粗製の副産物である、瓦斯製造の副産物たるタールから艷麗なる色素や、靈妙なる藥劑を産出したる如き美果はなくとも此書が幾分にては効果を呈することあれば望外の幸である。

本書の過半は予の口授を長崎縣師範學校出身川村留八

氏が筆記せしものを校訂して成つた、茲に記して同氏の
 勞を謝す。
 終りに不肖なる予に外國留學の機會を與へられたる當
 局諸公、先輩諸先生に深き謝意を表し、又外遊中親切な便
 宜を寄せられたる諸氏にも厚く感謝いたします。

明治四十五年七月下旬

著者識す

理科視察 世界一週記目次

緒言

第一章 印度洋經由往航日記……………一—五〇

第二章 瑞西チューリッヒ市滞在……………五一—二二〇

 第一、獨乙語研究及び外國生活……………五一—六六

 第二、學校參觀……………六八—八〇

 第三、夏期休業に於ける獨、奧、伊三國の巡遊……………八〇—一〇三

 第四、瑞西に於ける山登り……………一〇四—一〇九

 第五、瑞西より獨逸に轉學の途中獨逸西部の旅行……………一一〇—一二〇

第三章 獨逸國伯林市滞在……………一二〇—一八一

 第一、伯林大學入學……………一二〇—一二五

二

第二、語學練習(附、英獨關係)……………二五—三二

第三、通俗教育及教員養成……………三二—三四

第四、學校參觀……………三四—三九

第五、ミュンヘン市へ修學旅行……………三九—四八

第六、北部獨逸、瑞典及び丁抹の旅行……………四八—六四

第七、獨逸より英國に轉學の際和蘭、白耳義、佛蘭西三國の視察……………六四—八一

第四章 英國リーツ市滞在……………八一—三三

第一、リーツ大學……………八一—八四

第二、第七回萬國應用化學會へ列席の爲め倫敦へ出張……………八四—九〇

第三、英國内地旅行……………九〇—一〇五

第四、リーツに於ける夏休暇中の實驗……………一〇五—一〇八

第五、獨英に於ける實驗室の狀況比較……………一〇八—一一〇

第六、學校參觀……………一一〇—一一三

第五章 米國巡覽……………一一三—一八〇

第一、英國より渡米途中の海上生活……………一一三—一一三

第二、米國巡覽……………一一三—一八〇

 ニューヨーク學校參觀……………一四一—一四八

 フィラデルフィア……………一五〇—一五五

 ボストン……………一五五—一五八

 ナイヤガラ……………一五八—一六三

 シカゴ……………一六四—一七二

 シヤトル……………一七四—一八〇

第六章 歸朝航海……………一八〇—一八八

第七章 雜感……………一八八—一九一

第一、歐米の中等學校に於ける學科課程の一般……………一九一—三二一

第二、學校參觀の結果……………三二—三三

第三、學位に關する私見……………三三—三七

第四、歐米に於ける理科中等教員の養成及び檢定……………三七—三三

第五、子の旅行方法……………三三—三〇

第六、歐米學者の研究に熱心なること……………三〇—三二

第七、獨英の醫師、藥劑師……………三三—三六

第八、歐州に於ける運動遊戯……………三六—三四

第九、歐州に於ける禁酒運動……………三四—三五

第十、歐州に於ける郵便切手蒐集の流行……………三五—三六

第十一、外國人に對する心得……………三六—三六

〔附録〕化學軌近の進歩及其問題……………三六—三六
(エミル、フィッシャーの演説)

主なる挿圖目錄

肖像及び畧傳

ウイルステッター教授……………卷頭

エミル、フィッシャー教授……………同上

エー、ジー、パーキン先生……………同上

ダブリュー、エッチ、パーキン教授……………一九

サー、ダブリュー、エッチ、パーキン先生……………一九

フアント、ホッフ教授……………二四

ベスタロッヂー紀念像……………七

レセップ紀念像……………四

ゲーテとルレルとの並像……………一四七

英國に於ける著者及び下宿の二男兒……………三六

太平洋航海中甲板上の著者等……………二八

學校、實驗室等

チューリップヒ 工藝學校化學部建物(コロタイプ).....	卷頭
同上 實驗室(コロタイプ).....	同上
リーズ市ハイスクール物理學實驗室.....	同上
エデンバラ市チョーヂ、ワットン男子學校化學實驗室.....	同上
チューリップヒ市私設天文臺.....	九
中古煉金學者の實驗室.....	五
ブダベスト市の一實科中學校.....	九
伯林大學化學部建物.....	二三
リーズ大學.....	一八四
グラスゴー大學.....	一九
リーズ市ハイスクール運動館内の女子の體操.....	三一
エデンバラ市中學校の軍隊的訓練.....	二四
パーミンガム市の新大學.....	二六

ラグビー、スクール.....	二七
ラグビー、スクールの運動場.....	二八
コロンビヤ大學教員養成部附屬ハイスクールの料理實驗室.....	三九
同上 游泳館.....	四〇
ニューヨーク市立大學.....	四一
米國ハイスクールの手工教室.....	六
シカゴ大學物理學建物.....	六七
シカゴ市公立圖書館.....	七一
リーズ市ボーイス、モダン、スクールの運動場.....	四五
地 圖	
ナイアガラ瀑布水力利用の地圖.....	六〇
印度洋經由往航の海圖.....	卷末
歐洲諸國巡歴圖.....	同上

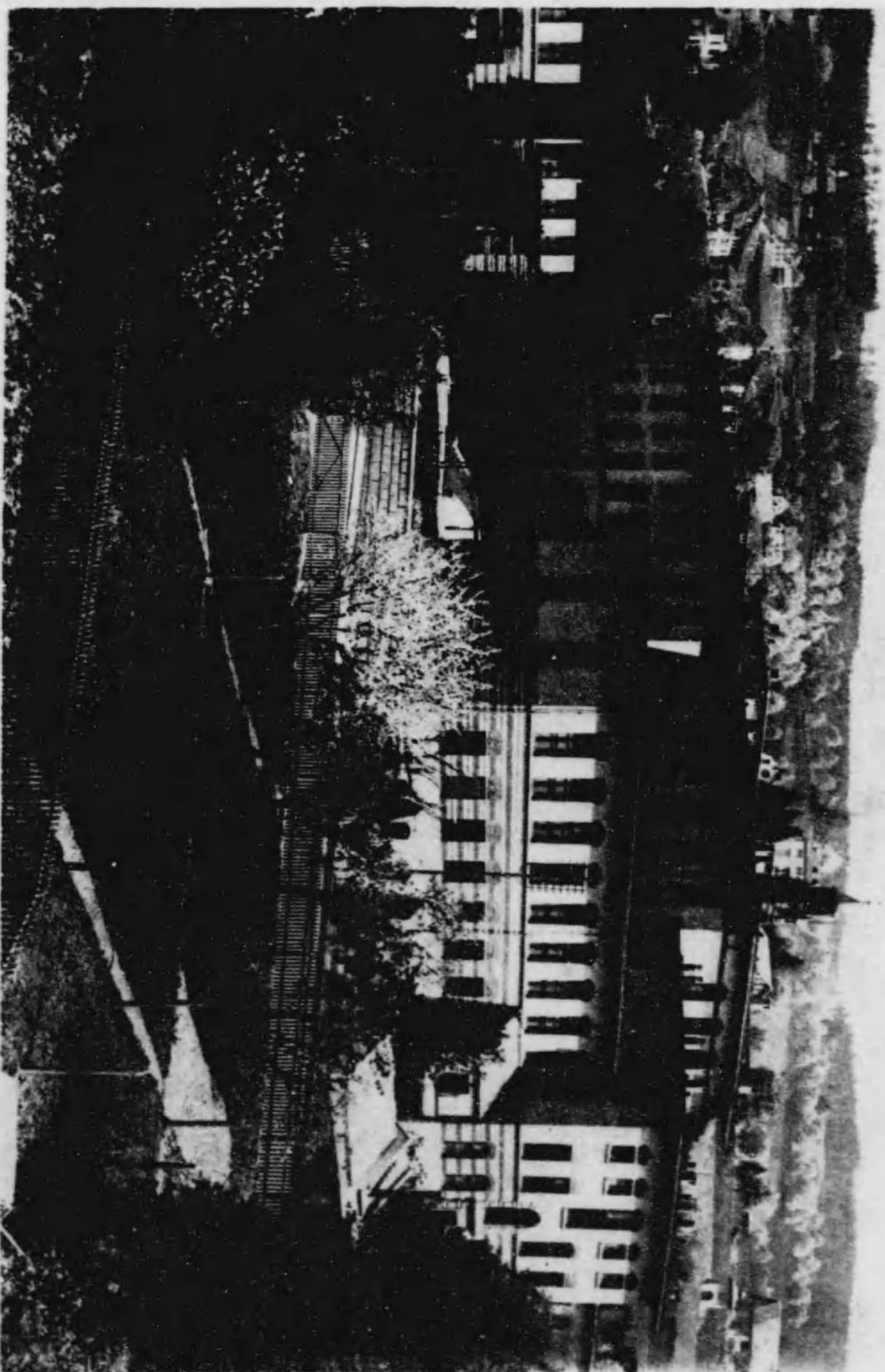
目次

米國橫斷歸路圖……………同上

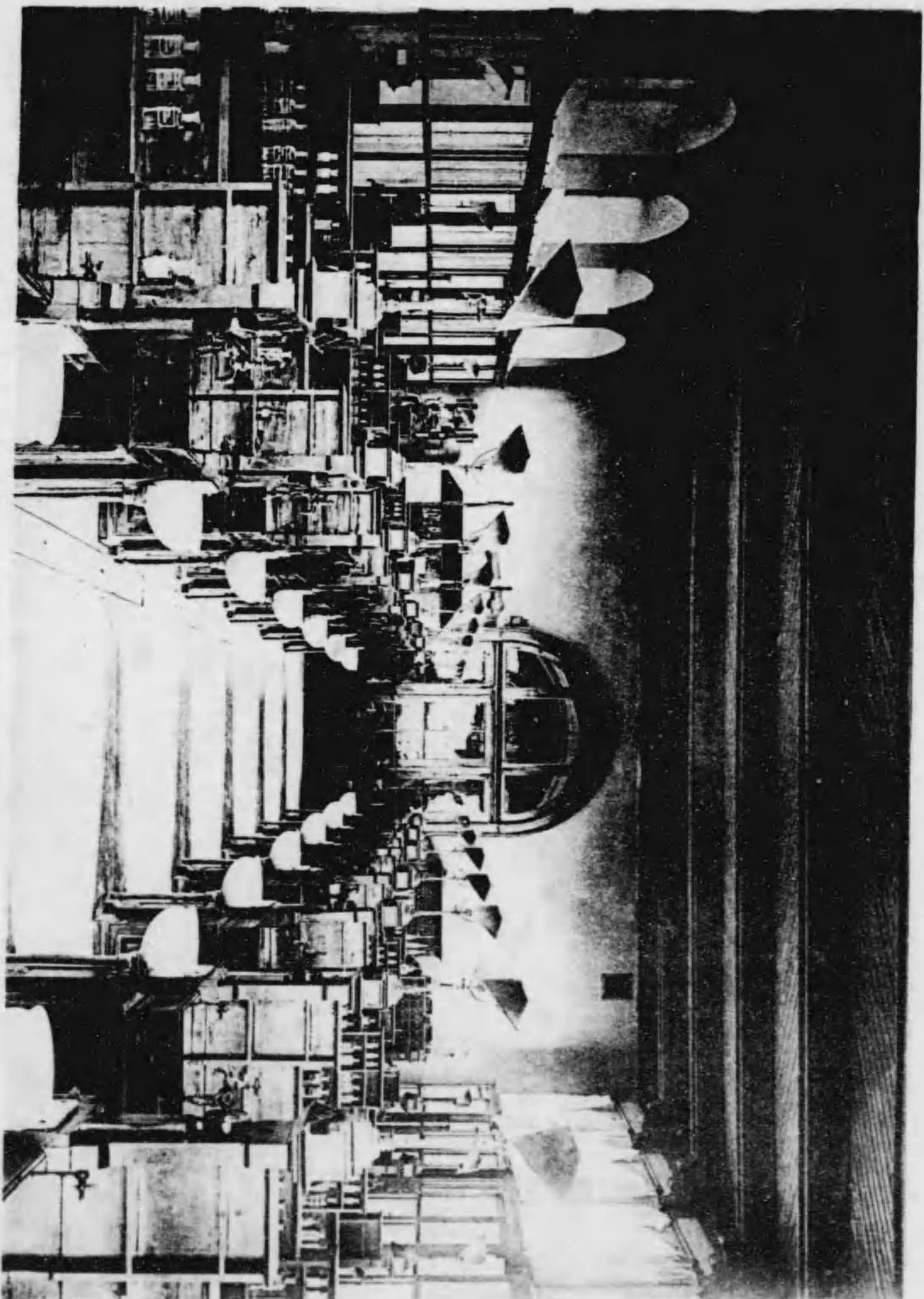
外に景色、風俗等の小圖六十餘個

八

理科
視察
世界一週記目次
終



在ユネーリッ市西國聯立工藝學校化學建築部(多々方ノ小山ハ人々佳景ヲ經ル)



(備設的範模) 室驗實學化校學藝工立邦聯國西瑞市ヒェリ一コチ在

ウィルステッター教授 Prof. R. Willstätter の略傳

予がチューリッヒに於て一ヶ年師事せし少壯有爲の化學者ウィルステッター先生は獨乙人にしてミュンヘン大學に學び次でドクトルとなり同大學にて助教授及び有機化學部の部長となり多くの青年と共に盛んに研究に従事し成績大に擧がりたればチューリッヒの工藝學校に於けるバンベルガー教授病むに及び其後任として聘せられ同校分析化學部（工業化學部に對持す）にありて無機及び有機化學の講義をなし且つ有機化學の實習及び研究の指導を行ひ自ら自己の大問題なるクロロフィル（葉綠素）の研究を繼續すること茲に年あり、此難問題も先生の敏腕に藉りて大に光明を得るに至つた、其他種々多様な問題を二十餘名の共同研究者に與へ之を指導誘掖して成功せしむる其エネルギの大なること予の未だ嘗て見ざる所である、されば歐洲大學の學生等私にフィッシャー先生の後任を以て疑し其門に集まるもの年々増加し先生の實驗室に席を得ること伯林大學よりも困難なる程である、予が其門に遊びしとき屢々招かれて厚遇せられ予等門下生亦嘗て先生を一茶亭に招き一夕を歡談に過したる事がある、其時彼地の學生等は先生のクロロフィルの大研究に對してノーベル賞を與へざるの不當を訴へ模造の賞牌及び賞金を先生に贈つた、此事は遠からずして事實となることは疑ひない、予が先生の許を去りし翌年先生は内助の効大にして又先生の講義をも傍聽せられて居た賢夫人を失はれ大に落膽せられしも今は元氣恢復益々研究に盡力せられて居る、予の後に我邦人にして先生の許に遊びし人数名に達す、先生年齒僅に四十を越ゆ、今後の大成期して待つべきである、最近聞く所に依れば先生は新設せられたる伯林のワイルヘルム皇帝協會の研究所に聘せらるゝ事に決定せりといふ。

生先ノタツテスルイウ授教校學藝工市ヒツリノユチ

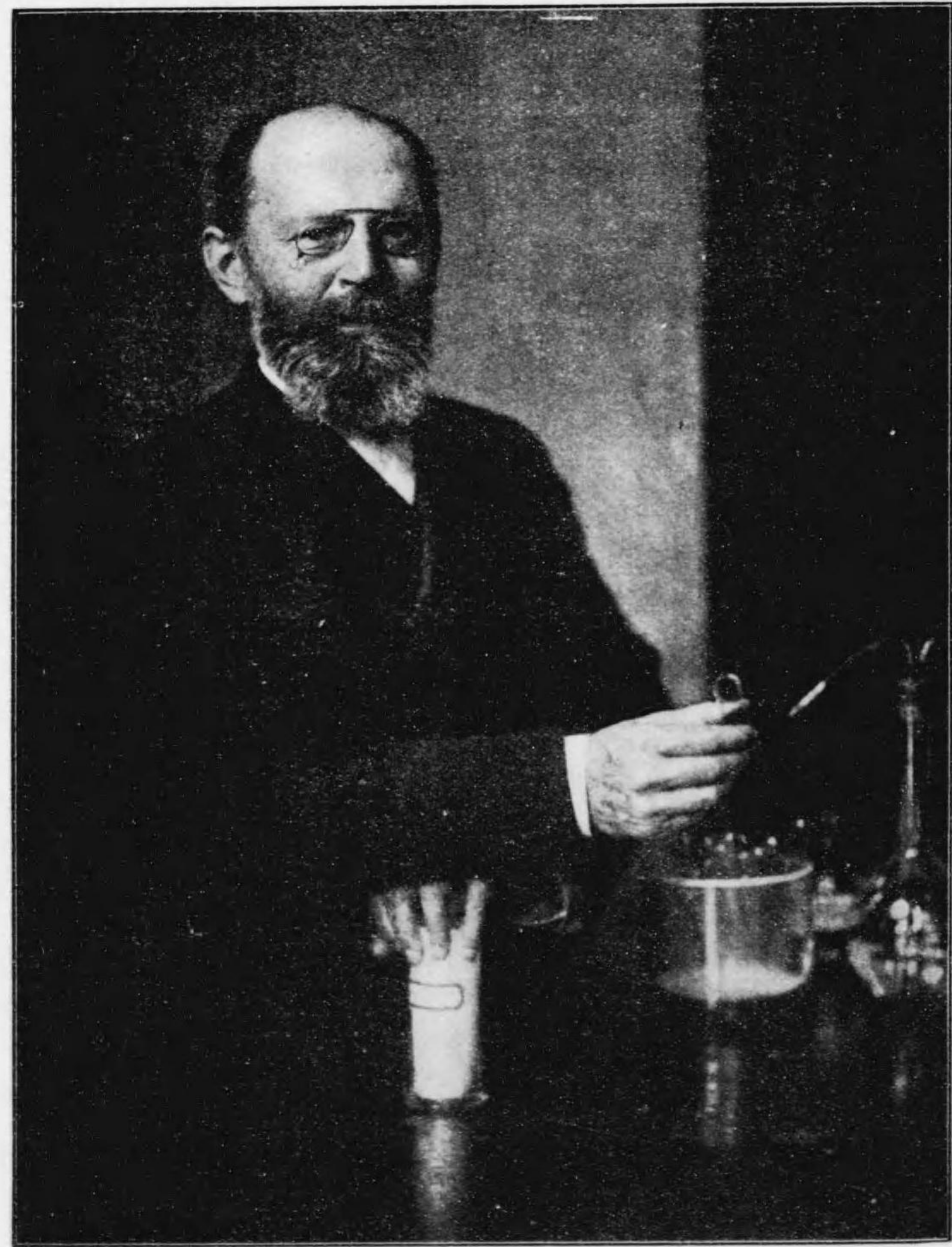


R. Hellström

エミル、フィツシャー Prof. Emil Fischer 先生略傳

予が伯林に於て一ヶ年間師と仰ぎし世界の大化學者フィツシャー先生の略傳を考ふるに先生は千八百五十二年獨逸國
オイスキルヘンに生れ千八百七十一年より七十四年までボン及びストラスブルグの大學に學び千八百七十八年ミュン
ヘン大學に於て助教となり、次で翌年員外教授となり分析化學部の部長を命ぜられ千八百八十二年化學教授として
エルランゲン大學に聘せられ千八百八十五年にはウニールツブルヒ大學に轉じ千八百九十二年ホフマン教授の後任と
して伯林大學に聘せられ先生の設計にて今日の壯大なる化學部建築物は創立せられたのである、而して此建築の詳
細なる説明書は建築技師と共著にて出版せられ後の設計者の參考となりて居る、先生の有機化學上の研究は枚舉に遑
あらず就中最も著しきは砂糖類の構造を確定し葡萄糖及び天然に産せざる多數の砂糖類を合成し、次に尿酸、ザンシ
ン、テオプロミン、カフェイン等の所謂プリン体を合成して相互の關係を明かにし、猶最近には蛋白質を分解して多
くのアミノ酸を製し又アミノ酸を連結して蛋白質に近似せる所謂ポリペプチドを製した、近年此等の研究論文を集
めて合本せられたが餘程厚き三冊の書となり、其論文の數幾百なるを知らず僅々三十餘年間に假令數多の手を用ひた
りとは言へ一個の頭腦にて斯く許多の産物あるは其勤勉にして勢力に満ちたること驚くべきである、予が行きしとき
は體力少しく衰退せし後なりしも猶先生の研究室には三四名のドクトルを助手として専ら先生の考案を實行せしめ外
に予等の如き外國學生及びドクトル候補者を指導して研究せしむる、所謂共同研究者十數人を有し、寸陰をも空費せ
ず盛んに勉勵せらるゝを目撃し大事業をなす人は一種異なる所があることを知つたのである、因に我邦人にして直接或
は間接に先生の指導を受けたるもの十數人に上り先生亦我邦の事情に通ぜられ我邦人には多くの同情を寄せらるゝ、予
輩は先生の益々健全にして此上にも學術の爲めに貢獻せられんことを切に祈るのである。

伯林大學教授、ルミエツイフ先生

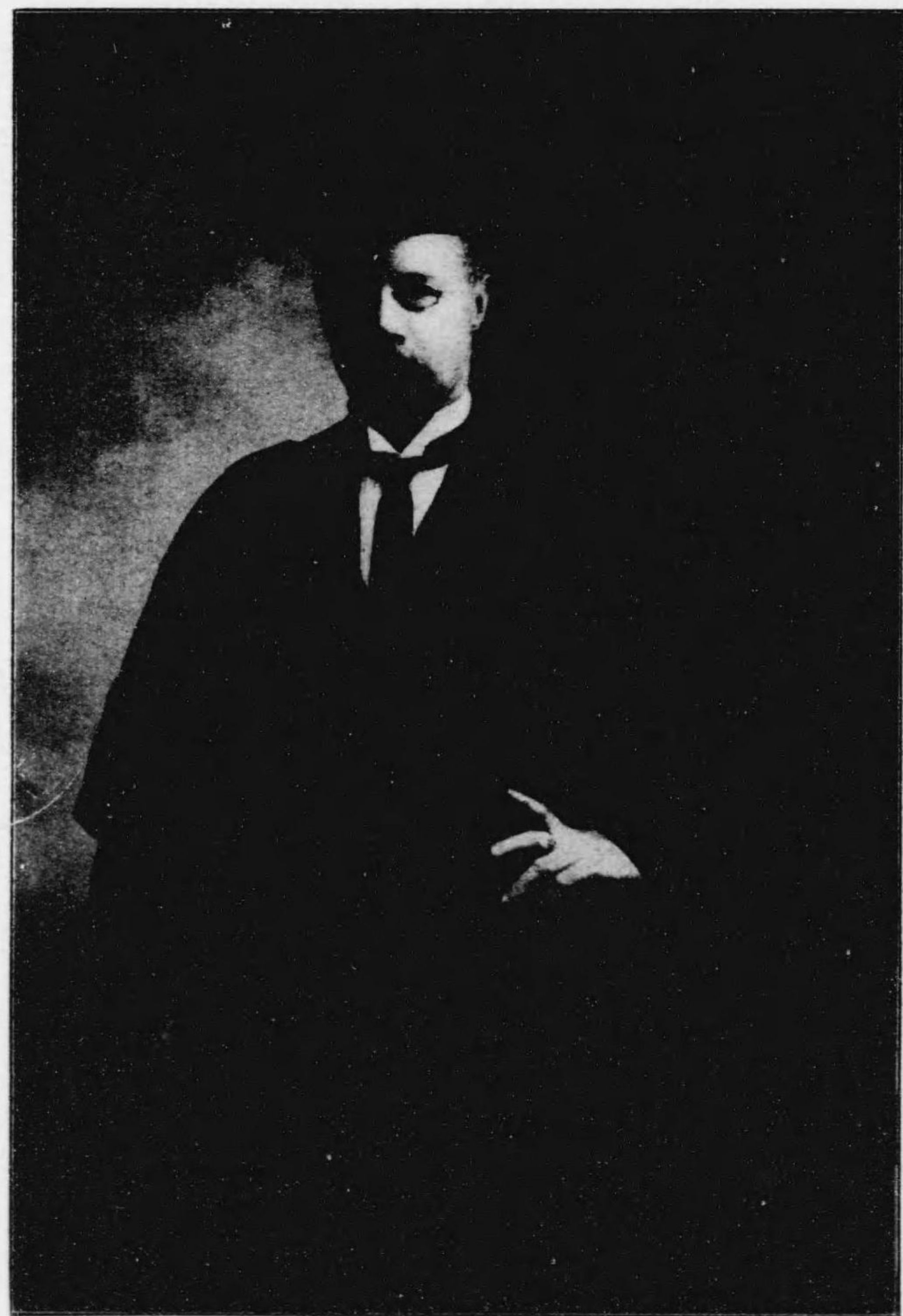


Emil Fischer

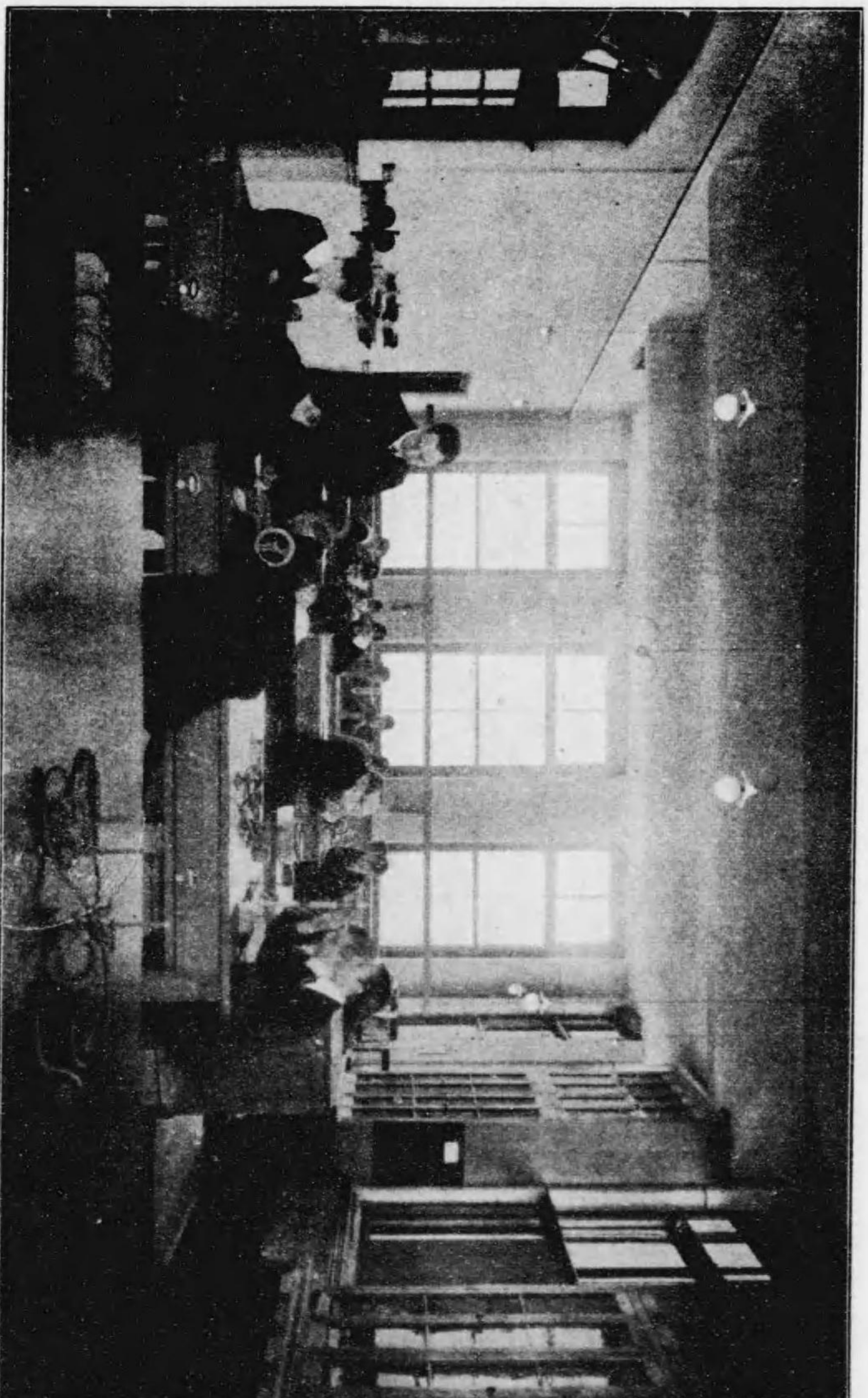
アーサー、ジョージ、パーキン Arthur George Perkin 先生畧傳

先生は最初の人造色素の発見者として有名なる故サー、ウイリアム、ヘンリー、パーキン Sir William Henry Perkin の二男にして現にマンチェスター大學教授たるパーキン先生の弟である。そこで先生等兄弟三人は皆有名なる化學者である。(先生の異母弟にメルウオー、パーキンあり)先生は一八六一年英國ミッドルセックス州サドベリーに生れ、倫敦サウスケンシントンの皇立理學校、グラスゴウ市アンダーソンズ、カレイヤ及びヨークシャー、カレイヤにて化學を研究し後多年獨立研究の効績により英國皇立學院の會員に擧げられ、その肩書を得られた。主として藍、カテキユ等の天然色素に就て深く研究せられ其方面のオーソリチーを見なされて居ることは最近にソープの應用化學字書の改版にも先生が天然色素の部を担当せられたので明かである。然し先生は現にリーズ大學染理科に講師及び研究化學者の名義で居られるので聊氣の毒な感じもする。予が初めてリーズ大學に先生を訪ひプロフェッサー、パーキンはと問ひしに小使は不審顔にてミスター、パーキンはと問ひ返へした。獨乙なれば名譽教授でも呼ぶべき人なれど英國にてはミスターにて何人も怪まざるは却て奥床しき所である。先生亦平然として研究を樂しみ學生と親しむこと朋友の如し、實に先生は温厚の君子にして英國セントラルマンの模範的人物と稱すべきである。先生子なく(マンチェスターのパーキン先生も同様なり)研究の外には横笛とゴルフを樂みさせられ、晴天なる休日には運動服をましく着たるゴルフ庭に行きて勇壯なる運動をせられるのである。其れ故に五十の坂を越へられたれど元氣青年を凌ぐ程である。

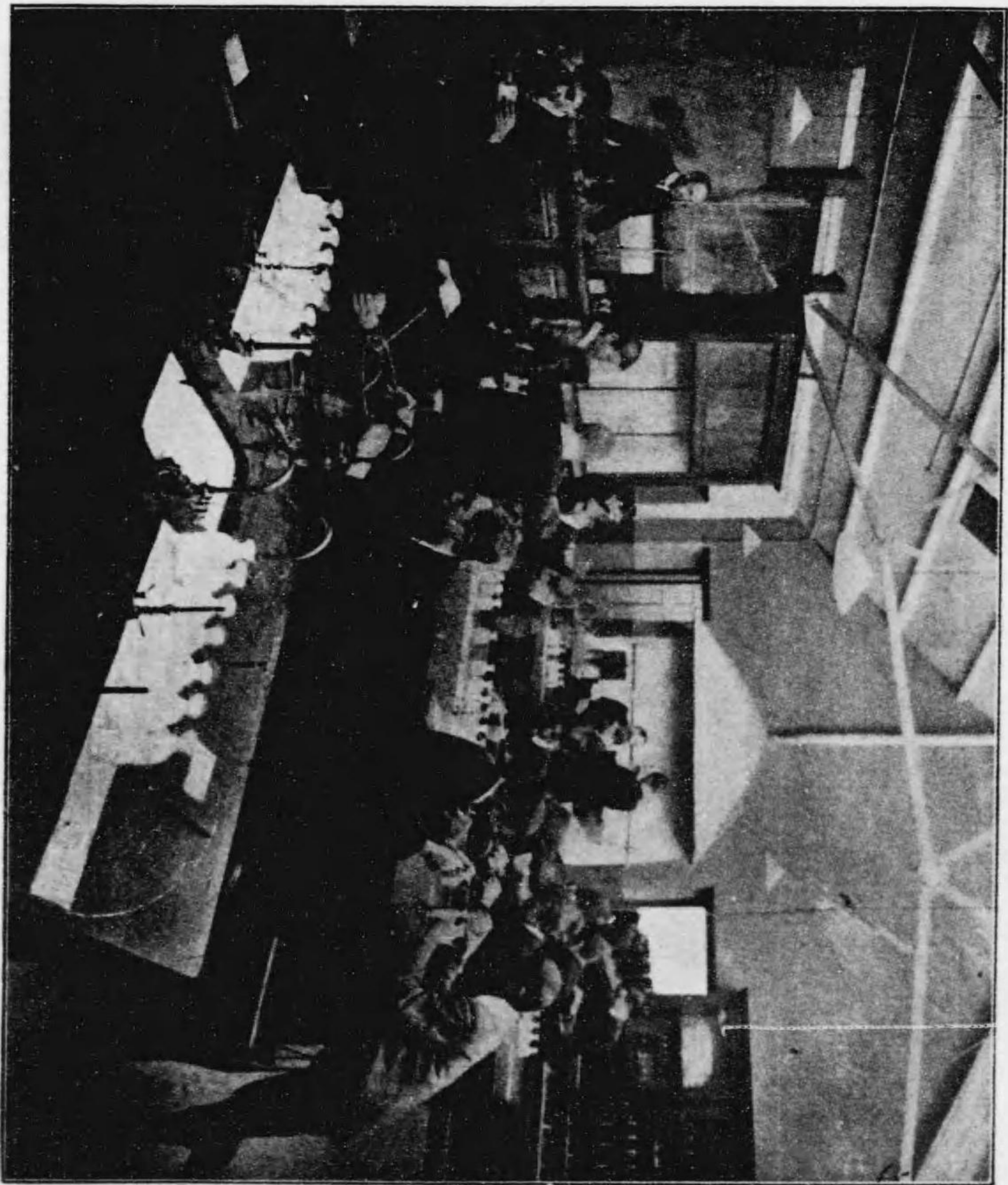
英 國 大 學 講 師 、 巴 拿 馬 先 生



A. F. Pugh



英 國 市 巴 伊 的 物 理 學 實 驗 室 於 十 五 六 歲 之 徒 生 物 理 測 定 定 額 之 圖



スコットランド、エディンバラ市ヤーマー、ワットソン男子學校に於て十五六歳の少年が
化學實驗をなす圖(左方の壇上に立てるは教師なり)

理科
視察 世界一週記

理學博士 龜 高德 平 著

第一章 印度洋經由往航日記

左の日記は予が往航中船中にて毎日認めたるものにして今より之を見れば或は詳細に
失し或は田舎者の東京見物記の感あれど之れ予が廣き世界を見たる最初の印象にして
却て當時を想像するに便なれば少しの削減の上茲に録することとせしむたり

予は明治三十九年八月十八日附を以て文部省より「化學研究ノ爲メ滿三ヶ
年間英獨二國へ留學ヲ命ズ」との辭令を受け爾來諸般の準備各種の送別會等
のために忙殺せられたり、愈々出發するは翌年一月中旬神戸發の日本郵船會社
汽船神奈川丸に乘じ印度洋經由當時日露戰爭後未だ間もなくシベリヤ鐵道
は方今の如く我邦人に利用せられざりし」と決定せしも予は家族を引纏め郷

里岡山縣下に歸省し予の不在中此所に家族を住ましめん計畫なりしかば學校の業務も操上げて早く一段落となし東京の知人に數年間の別を告げ十二月十六日新橋を出發して歸省し老父母を僻村の孤屋に訪ひ一家團樂の内に明治四十年の新年を迎へ豫定の通り一月十二日神戸港に出で神奈川丸にと乗船せり

Kōbe
ベーク

船は午前十一時に拔錨し鏡の如き瀬戸内海を進みて淡路島、小豆島、鹽飽島、其他千態万狀をなせる無数の島嶼の間を過ぎ、源平の古戰場たる讃岐の屋島、握飯の如き形をなせる飯山、弘法大師苦行の跡たる屏風ヶ岳、予の曾て遊べる金比羅山、及び高松、丸龜、多度津等皆指呼の間になり、又船の右舷を望めば予の郷里なる兒島半島の山脈、漁村等明かに視るを得たり、依て予はなつかしき故山の風景に最後のアジュー(別辭)を告げたり、

十三日午前九時船は門司港に着し予は初めて九州の地に上陸し同行の友人眞島氏と共に八幡製鐵所に至り場内を一覽し其大規模なるに驚き夕方本船に歸る、

Moji
ジモ

十四日午前七時起床、前日來の日記及びはがき數葉を認め郵便に托す、之れ我國にて投函する最後の郵便なり、正午出帆の筈なりしも半時間許後れて解纜せり、予等は甲板上に上りて我が母國に最後の別を告げたり、關門海峡を出で玄海灘に入らんとするとき船漸く動搖し始む予も亦心地宜しからず殆ど船酔せんとす、即ち船丹なる賣藥を服して静臥す、午後六時晚餐に出で常の如く食事す、後嘗て日本に滞在し今歸國の途にある印度の青年と談話す、彼は東京に來りて八ヶ月間我國の文明の狀況を視察し傍ら硝子製造を見習ひ今歸國し後の船便にて日本職工二三名を送らしめ硝子製造業を始めんとすといへり、彼れ又曰く英國政府は印度に於て大學教育は土人にも施せども利益ある製造工業は本國人にて獨占し土人の工業を起すを抑壓すと慨歎悲憤氣焰甚だ盛んなり、予は亡國の民の憐むべきを深く感じたり、間もなく船酔心地も全く愈へたれば他の船客と談笑し九時過ぎ寢に入る、

十五日午前六時半起床、甲板に出でて散歩す、時に昨夜の雨全く霽れ東天紅に山岳島嶼の眼を遮るものなく愉快極りなし、朝食後船中の時計を見れば八

時前十分なり、然るに予が門司にて正したる懐中時計を見れば正に八時三十分なり、之れ船の西行したるため昨日正午以來四十五分遅れたるなり、此日風少しもなく極めて静穩にして愉快なる航海なり、船は漸次西南に向ひて進行し正午に於ける船の位置は北緯三十一度五十三分東經百二十六度にして門司より西行すること二百九十一哩、上海への距離二百八十哩なり、即ち今門司、上海の約中央にあり、船は二十四時間に二百九十一哩を走りしゆへ一時間の平均速度は約十二哩なり。

予の乗船神奈川丸は長さ八十五間幅八間餘、六千餘噸の大汽船にして荷物の運搬を主なる目的とし乗客は一等、二等各二十名を容るゝに過ぎず、船長大野鉦太郎氏は郵船會社歐洲航路汽船十二艘の内本邦人の第二の船長なり、本船乗組員中の歐洲人は機關長、一等機關士、一等運轉士の三人に過ぎずして他は皆日本人なり、全乗組員は百餘名なりと云ふ、事務長の談に依れば本船一晝夜の石炭消費額は四、五十噸にして三百餘圓を價し、横濱アントウエルブ間の往復航海に要する費用は約二十萬圓にして収入は荷物約十五萬圓、乗客約五萬

圓にして收支相償ふに過ぎず、會社の利益は政府よりの保護金一航海に付き二十萬圓のみなりと。

我神奈川丸に乗込める乗客に就て一言せんに一等室には陸軍少佐引田氏、同大尉小野氏(此人は自費留學なり)、醫學士磐瀨氏、同高松氏(此人も自費留學、東京外國語學校教授田代氏の五人にして毎日「トランプ」を闘はす)、二等室にては予と眞島氏の外自費留學の大阪醫士ドクトル山田、太井の二氏あり、以上九人は「マルセーユ」にて上陸し獨乙或は瑞西に留學せんとする人々なり。

予等の寢室は六疊敷許の廣さにして上下二段に六個の「ベッド」ありて中央に二疊許の空所あるのみ、狹隘の程陸上生活にては想像すること能はざる所なり、此一室に眞島氏、太井氏及び予の外「ロンドン」行の英人三人起臥することとなれり、英人の内一人は數年間郵船會社にありて運轉士たりし人にして今度罷られて歸りつゝあり、外二人は新設の馬政局に「ハンガリー」産の小馬二三十頭を携へ來りて今歸路にあり、遠からずして再び馬を携へ來ると云へり、晝は甲板上を往來運動し夜は唯小説の如きものを讀めり、西洋人にして二等に

乗るものは皆中流以下の人なりといふ。他室にある二等客は清國人三人、晝夜となく喃喃多辨を弄して同室の日本人を悶ませり。前記の印度人、英語及び日本語を以て瀕りに愛嬌を振り蒔き寧ろ同船者に愛せらる。マニラに雜貨店を有せる日本商人一名、ジャバアに赴く商人二名、香港に旅店を有する商人の妻、「ロンドン」に赴く商人一名等にして此等商人は何れも海外に於て卒先商業を營み皆成効の途にある勇士なり。従て勇氣勃勃大膽不敵なり。我國商業の發展上此種の人の多きを望むや切なり。其外特別三等及び三等室には五十人餘りあり。清國留學生の歸國せるもの最も多きに居るが如し。皆天候の平穩なるを喜び殆ど船の進行せるや否やを感ぜざるが如く、夜は相集まりて遊戯談笑、時に高音の外に洩るゝことあり。此夜十時頃予は下甲板に下りて三等室の状況を視しに、特別三等は我二等室と同じく一室に六個の「ベッド」あり。恰も我國の師範學校寄宿舎の寢臺の如し。普通の三等室にては別に室なく一の大廣間に恰も相撲場の棧敷の如く區劃を設け之れに三人五人とごろ／＼横臥し放歌高談、喜しきこと恰も寄席にあるが如し。

Shanghai
イハンヤシ

十六日午前七時起出でて見れば既に楊子江より流出する濁流のため海水一面に黃濁となり、混々として流る。既にして奇形の支那ジャンク帆を擧げて走るあり。又支那人船夫の直立せるまゝ、左手に櫓を持ち右手に長き櫓綱を持ちて巧に漕ぐあり。十時頃左舷に支那大陸を望み右方に淺瀬を眺めつゝ、楊子江口に進入し吳淞なる一小市街に達す。外國郵船は多く此所に投錨し短艇にて上陸す。本船は遙かに進んで楊子江の支流なる黃浦江を上ること一時間餘にして郵船會社の舊埠頭 *Wayside Wharf* に至りて投錨す。此河水は濁ること甚しく兩岸に堤防あるなく漸次田園を侵蝕して河幅を増大にす。然も河岸と雖も水深く河底乳濁狀の砂にして六千餘噸の大汽船をも岸に密接して通行せしむ。予等の船「シャンハイ」の埠頭に横付けとなるや支那人の人夫、車夫、宿引等蟻の如く船中に上り來り荷物を持ち行かんとす。

午後二時頃予は眞島氏及び印度人と共に上陸し米租界(米國居留地)市街を散歩す。第一に眼に止るものは汚服を着したる支那人力車夫の至る所に多くして乗車を客に強ふること、馬車、自動車等の往來頻繁なること、道路の立派に

して中央車道の兩側には平坦砥の如き人造石を敷けること、家屋の多くは三四層の洋風高樓なること、街上所々に黒面美髯を有し頭上に赤布を巻ける雲を突く許りの印度巡查及び支那人としては稍活潑なる服装をなせる支那巡查の立てること等なり、予等の伴へる印度人はさすがに同國人の戀しきにや、黒人巡查と逢ふ毎に帽を脱して其側に寄り挨拶し或は道を問へり、予等は米租界より橋を渡りて英租界に入り公園 Public Garden に至る此公園は外國人の專有にして門に華人不可入の制札を立つ支那人の不面目甚といふべし、予等の至りしときは支那婦人にして西洋人の子守たるが乳母車を押して遊ぶもの十餘人あり又此地にある同文書院の學生四名に園内にて出遇ひ道を問ふ彼等も本邦人のなつかしきにやありけん懇切に案内して舊城内に予等を導けり、舊城内とは當地の支那固有の町にして城壁を以て廻らし壁上に小なる大砲ありて昔の面影を止め數個の門あり夜九時に至れば閉ぢて城の内外の交通を遮絶すといふ予等は北門より入りしに道路狹隘巾五六尺花剛石を以て疊みたるはよけれども凸凹平坦、支那固有の輿及び一輪車の外通する能は

ず而して行人絡繹肩相磨し其雜鬧の狀東京の淺草、大阪の千日前の比にあらず、恰も一の穢き大なる勸工場の如し、家屋は多く木造にして低く便所、泥溝至る所に溢流し不潔なること名狀すべからず、城内に一小池あり池内に池心亭なる伽藍狀の一建物あり橋を傳いて亭に至る途に乞食多く居りて錢を求む、亭は今茶館となり茶好きの支那人は此中に入りて數人卓を圍みて椅子により茶を飲みながら商用或は縁談を調ふといふ、然し其入口を見れば便所公然と顯はれ不潔なること人をして嘔吐せしむ、去て上海知縣の官衙を見る我邦の古寺の如き門構へにして道に沿へる門内には罪人の刑具などを陳列し一見人をして戰慄せしむ、聞らく知縣は我國の縣知事に似たれども其權力遙に大にして司法、行政、立法等の諸權を兼有し賄賂公行し數年間奉職せるものは巨萬の富を致すといふ門を入り進めば門内に飲食店あり、靴直しあり、猶進めば受付然たる支那人十餘名ありてきよろ／＼と予等を見る、同伴の印度人に此所は支那政廳なりと説明するも彼れ信する能はず、夫れより歸途につき一茶館に上り予等及び案内の同文書院學生と數名「マール」支那雲南にはマール

ブルを多く産し廉價なりといふの圓卓を圍みて緑茶を啜り支那菓子を食べ歸りに臨みて予は便所を求む教ゆるに従ひて行き見れば不思議にも二階にて茶を煮んが爲めに沸かす水壺及び湯釜に密接して石油箱の如き方形の箱の中に用を便せしむ本邦人の想像だにする能はざる所なり、

次に茶館の最も大なる青蓮閣と稱する一間に誘はれて巡覽す閣は三層建にして第二第三の二層は共に百餘疊を敷くべく數百の卓を並べたる様我國學校の大講堂の如し支那人は此所にて茶を喫し或は藝妓を招きて樂を奏せしめ之れを聞て樂むといふ閣の奥まりて薄暗き所に二人つゝ横臥するに足る床あり之れ阿片を喫煙する所なり支那人は必ず横臥して大なる煙管に阿片をつめ小なる酒精燈より引火して二人交るゝ喫煙し醉ふては眠るなり、從て此室に來れば阿片の臭氣盛んなり予等は佛英の二租界を過ぎて米租界に歸り日本人の多く住居せる一街に至る此所には邦人の醫士あり、小學校あり、本願寺別院あり旅館あり、飲食店あり、書肆あり當時邦人の此地にある者一萬に達すといふ予等一二三亭と稱する一店に入り日本食をなす之れ恐くは

第一圖



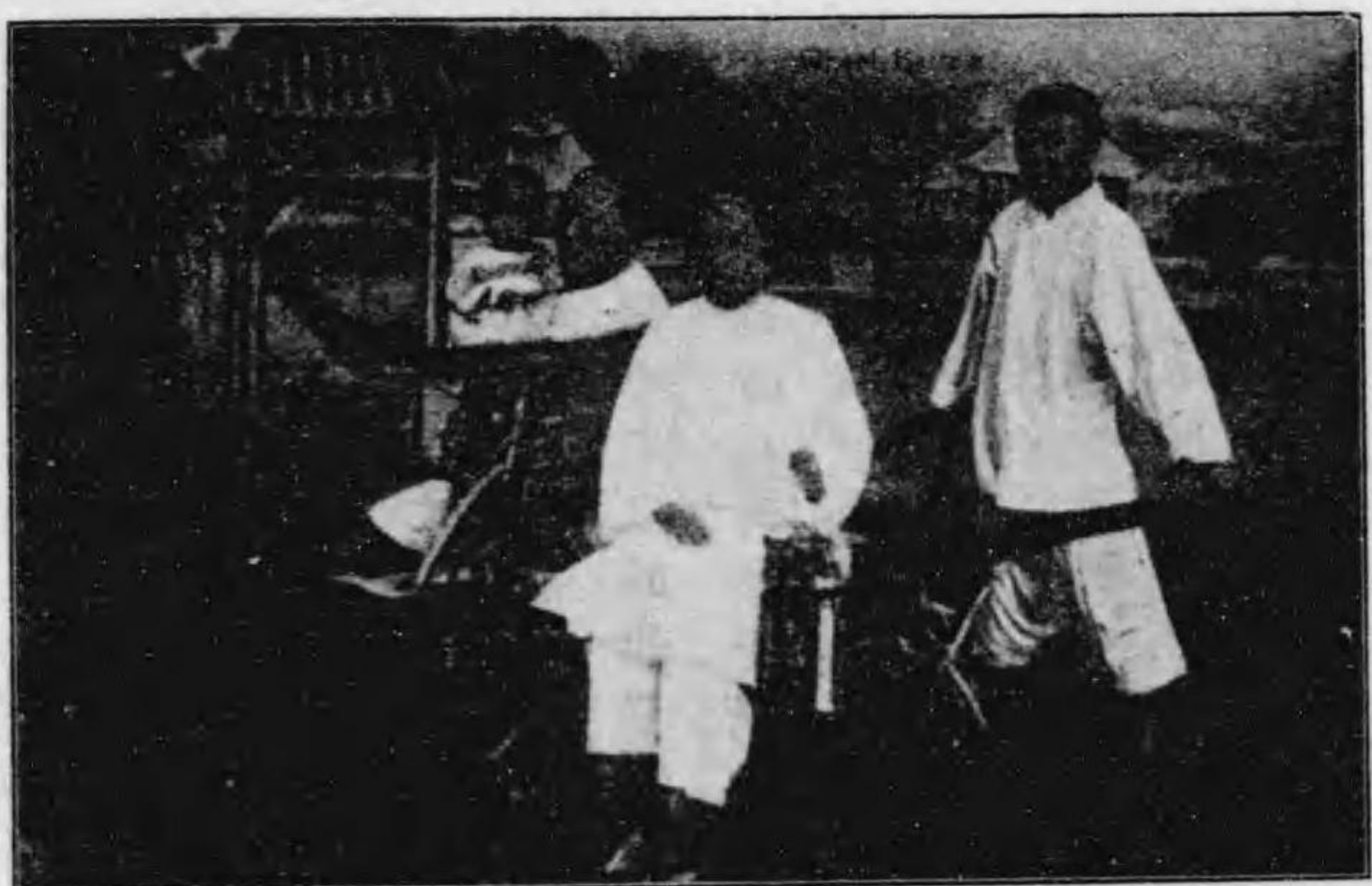
支那人の阿片を喫煙する景

予の數年間に於て最後に食する茶漬ならん次に日本堂なる書肆にて繪葉書を購ひ八時頃案内し呉れたる同文書院の學生と別れ本船に歸る憐れなるは同伴せる印度人なり彼は宗教上一切肉食せざるより予等の夕食せる間にも箸を下さず饑を忍んで傍觀し歸船したる後ボーイに乞ふて漸く麵包と冷水を得たり、十七日朝はがき數枚を認めて通信す、此港には日本郵便局ありて内地同様に我國のはがき三錢切手にて通信するを得此點に於ては未だ本國を去らざるの感あり然し此の如きは此所を最後とし、次の香港以後にては他國の郵政に従は

ざるべからず、十時頃より船醫と共に當地第一の建築物と稱せらるゝ郵船會社支店を見るべく出で行く街上支那人三四名にて骸炭コウタンを車にて運搬せるあり、支那乞食小供中には長身の大供もあり、數人走り寄りて車上の骸炭を一片つゝ盗みて逃げ去り人夫叱するも意とせず實に一奇觀なりし、支那人の盜み根性なること概ね此の如し、郵船會社支店は日本領事館及び日本郵便局と相隣り黃浦江に沿ひ煉瓦造の三層にして明治三十五年より工事を始め昨年落成せりといふ本館及び倉庫二個にて三十萬元我四十萬圓許りを費し其外裝飾品に數萬圓を費せりと云ふ數多の椅子には皆京都西陣の織物を用ひ同じく刺繡の屏風十二個ありて一個四百圓を價せりと、以てハイカラの度を知るべし。

此日終日荷物を積載するため百餘名の支那人船に上り來りウインチ引揚機の鐵鎖はガチャ／＼と響き支那人の叫び聲と相和して喧囂たり、此港にて積込める商品の重なるものは羊皮、駱駝毛、雜貨、鉛鑛等にして合計千二百噸許りなりとぞ。

圖 二 第



支那人の輪車

當地にて買物をなし日本の紙幣を拂はんとすれば一圓を八十八錢に取るのみ之れ我邦は金貨本位なるに當地は銀貨本位にして當今銀の價騰貴せるゆへ我邦貨幣の價低きなり、上海に來りて始めて見たる奇形なる車は支那人の押す一輪車なり此車は中央に縦に輪を容れ其兩側に各一個の梯子様のものあり之れに人或は重荷を載せ二本の把手に繫く綱を肩に懸け巧に梶を取りて顛覆せざらしむ、十八日午後二時本船は上海拔錨香港に向ふ、

二十一日午後三時頃我神奈川丸は香

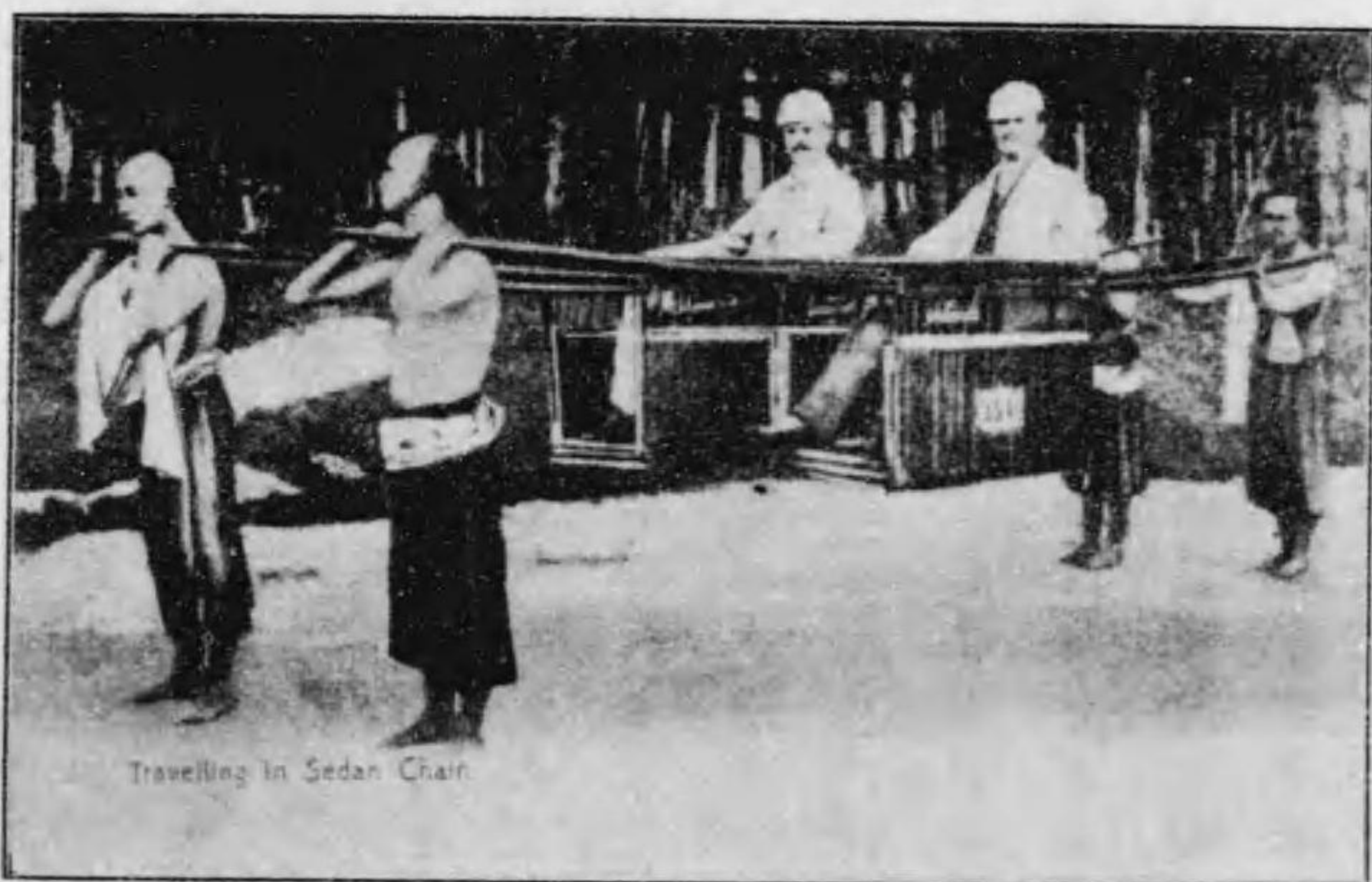
港に着す香港島は六十年前迄は一漁村に過ぎざりしを英國政府が貿易上重要なる港灣となるべきを夙に觀破し清國政府より購ひ巨額の資本を投じて山麓の狹隘なる所に道路水道等を設け山腹一体に四五層の大厦高樓を建造し終に東洋第一の市街となすに至れり故に當市街は函館港の規模一層大なるものにして山腹に四五層の洋館相連り山頂にも多くの洋館並列せり當港の反對の側には九龍島ありて其中に造船場船渠種々の製造場あり恰も門司と馬關と相對持するが如し聞く昨年颶風ありために九龍の棧橋船舶等破損せりと此日は既に晚きを以て予は上陸せず船中にありて郵書數通を認む

二十二日午前十時頃同船者數名と共に上陸して野村商店(其女將が予等と同船して當港に歸りたる旅館)に至りて休息し十一時よりケーブルカー綱にて引上ぐる列車にて登山せんとて野村の一僕に案内せしめて先づ當地の公園グイクトリヤパークに至る此公園は稍小高き山腹にあり英國政府の苦心經營せし所にして多く熱帶的の植物を栽培し百花爛熳とも稱すべく我邦の四月頃頃の感あり因に當地にては菊花正に盛りにして街路に多く此花を賣れ

る露店花屋ありたり園内には當港を開拓せし英人知事サージョン氏の立像を安置せり既にしてケーブルカーの乗場に至り待つこと暫時時に英國の一士官數十の兵卒を率ゐて進行せるを見たるに兵士皆シャツのまゝにて又劍を帶びず恰も人夫の如く我邦軍隊の如き威嚴あるなし僕曰く此等は皆月給にて傭はれ居る兵士なれば放逸限りなしと又乗場には印度人の巡查厳しく護衛し居れり此等の印度巡查は日本人に對しては極めて温順にして彼れの頭を打つも笑ひ居る位なりといふ待つと數分時にして車下り來りて予等は乗り込み此車は東京の電車の如く唯幅廣く約五尺腰掛を横に並べ一列に三人の座あり山に向て座し後にモタレあり之れ急なる勾配を登るときのためなり此登る様は京都のインクラインにて船を引き上げると全く同じ理にて山上にある電氣動力にて一條の鐵綱を巻き上げ其下端に結びある一車は引き上げられ他の一端に結びある一車は下り行くなり予等の乗れる車の急坂(坂の勾配は水平線より約三十度位なり)を上り行くとき其側にある家屋の柱等は恰も斜に立てるが如く見ゆ下瞰すれば數多の洋館庭園等一目の中

にあり絶景言ふべからず十分餘にして山上の停車場途中にも二三の停車場ありに達し茲に下車せり、之れより猶徒歩して登れば山頂に達し此所にピークホテルありて香港一体を眺望するを得れども不幸にして此時濃霧に閉ぢ込められ數歩の先きを見る能はず且つ温度低く華氏五十六度細雨を降らす、依て止むを得ず登山を中止し待つこと二十分にして綱車にて再び下山し正午頃野村旅館に歸へり同船者十數人にて日本食の午餐を食し午後二時頃より市街を散歩す、香港市街は家屋皆宏壯なる四五層の西洋造りにして一館を區劃して數個の商店となし、各店二間乃至四間の間口に過ぎず聞く之れ等の西洋館は多くは支那人の有にして英國政府は支那人に土地を貸し高價なる借地料を納めしむ、從て商人の借家せるものは一ヶ月數百金を要すといふ洋館の前方數尺の軒下は人道となり居り其奥に商品を陳列す、道路は當地の山に産する堅き石を碎きて細砂となしセメントにて堅め平坦砥の如き好路を造れり、然し少しく狭きが故に雑沓の狀上海に優れり、行通の利器としては海岸に近き所に一條の電車ありてハッピー、ヴァレーと稱する方面に行き得る由

第三圖



香港にて西洋人力椅子に運ばる

なれども予は乗らず人力車は多きも馬車は稀なり、之れ市街は多く坂路にして馬車には不便なればなり、從つて坂路を行くにはチェアと稱して籐の椅子に人を腰掛けしめ長き二本の棒(約二間)にて前後二人の支那人棒の兩端を肩にし棒はシワ／＼としなひて椅子は動搖す、此チェアは非常に多く街道の角々に多くの支那人ありて乗るを勸むる事我邦の人力車の如し上海にありし如き一輪車は見えず、

予等は五時頃本船に歸る、夜香港市街を船より眺むれば各商館の電燈は粲々と輝き山腹一体イルミネーションの美觀

を呈す、港内の船舶又橋頭に點燈し點々辰星の天に懸れる如し因に當時此港に郵船會社の船にて本船の外加賀丸、伊豫丸、日光丸あり又三井物産の持船二艘あり旭旗齋へりて皇威の此港に及ぶを見る、此夜商店の店員らしき日本人二名來りて予等と同室の英人前記せし如く馬政局に馬を連れ來りて今歸途にあるもの予等は舶來の馬丁と通稱すに何かの代金を請求せり後に至りて聞けば催促に來りしは香港の文身家野間氏の店員にして右の英人は左腕に一匹の蝶を文身せしめたるなりと(此代金六圓)野間商店には十數人の職工ありて盛んに營業し先年英國皇族コンノート殿下我邦に御來朝の際當港にて背に龍を文身せしめられしといふ、されば我國にては蠻風なりとして禁制せらるゝ文身も外國にては上下を通じて猶流行せるが如し予等と同船せる他の英人等も腕或は背に刻せる文身を自慢顔に予等に示したり、

二十三日午前七時我神奈川丸は、香港を出發し漸次南下す海上極めて靜穩なり唯温度次第に上り暑氣を感じるに至りたれば船員等は甲板上にテントを張り暑を防ぐ準備をなす、二十四日温度華氏七十九度に上り同船者多く夏

風谷の講談

服に更へ猶ほ炎熱堪え難きを訴ふ、然し予は謂らく火夫、機關士は百二十度に達する機關室にありて作業し以て本船を進行せしむ、乗客は唯涼風を逐ふて椅子を移し横臥して時を移せば受働的に目的の彼岸に達するを得、之れを思へば九十度以下の炎暑訴ふるに足らずと、尤も予は生來寒を恐るゝ代りに炎暑は比較的堪え易く一日後れて二十五日に至り始めて夏服に更衣せり、

二十五日午後八時半より本船の事務長細川氏後船員を止め専門の講談家となる細川風谷之れ(なり)の講談あり聞く同氏は幼より講談を好み唯に之れを聞くのみならず自から之れを試みて今は全く本職の講談師の音調態度あり且つ氏は文藝の嗜み淺からず嘗て新聞雜誌に筆を取り小説を物せしこともありと、日露戰爭中は病院船に乗り込み毎夜講談を試みて病傷者を慰めたりと、又郵船に乗りても航海中得意の辯舌を以て乗客の無聊を慰め居れり、人は本職以外に一藝を有すること亦必要なりと云ふ可し、今回も乗客の請を容れ此夜より天保水滸傳及び忠臣藏を各約一時間つゞ、毎夜續いて講ずる事となり、二等室前の甲板上に席を設け其前に船長、一二等客十數人(日本人のみ)椅

子に倚り、三等客船員等は毛布を敷きて座し涼風、明月の下に此慰樂を得殆ど船上にあるを忘れたり、其講談の巧なること如何にしても素人とは思へず衆皆舌を巻けり、

二十六日及び二十七日、船は頻りに南走す従て温度は益々上りて九十度に近づき衆皆カビン(船室)に居る能はず晝及び夜深更に至るまで甲板上のテントの内にありて各自香港にて求めたる籐の長椅子によりて晝は讀書談笑假睡などして暮し夜は明月の下に各得意の詩歌謠曲などを唸り八時半よりは細川事務長の講談を聴くを常とせり、

二十八日午前六時頃本船は正に五晝夜千二百餘哩の航海を終りて新嘉坡に安着す新嘉坡は人の知る如く馬來半島の南端にある一島にして赤道直下に位し英國殖民地の一なり、本船は當港に止まること二晝夜以上、来る三十日午後四時出發の筈なれば船中の炎熱に堪えず既に閉口せる予の同室者等は此港にて下船する人々と共に七時頃より準備を整へ郵船會社のランチの來るを今や晚しと待ち九時半上陸して日本人の營める旅宿某へ赴き船の碇泊

Singapore
レボガンシ

中宿屋に止宿せり、予は甚しく暑を恐れず又東京出發前先輩より寄港に上陸見物するは宜敷も陸上に宿泊するは衛生上及び經濟上不利なりと戒められしが故に此航海中常に船中に臥したり、

予は今新嘉坡港を視るべく船醫及び一等室の友人五名と共に先づジョンストン埠頭に上陸すれば昨日は獨逸皇帝ウイルヘルム二世陛下の誕生日なりし故當港に碇泊中の同國軍艦乗組員等にて催したる宴會の席たりし埠頭の跡片付中にて紅白の幕などを黒奴の取崩すを見たり、又街道には電車あり、乗合馬車あり、人力車あり、水牛二頭の曳く荷車あり、炎天の下に黒奴の裸跣にて往來するあり、其雜沓の狀上海香港にも優れり、予等は馬車二輛を賃して當地にて有名なる植物園に向はしめたり、行く／＼車中より眺むれば大なるホテルあり、舊教寺院の巍然たるあり、博物館、圖書館あり、英國政廳あり、共に廣大なる敷地の中に青々たる植物を繁茂せしめ此の熱帶地方にありても、見るかに清涼にして心地好げなり、道路は天然の赤土に多大の人工を加へ堅牢清潔なること我東京の比にあらず、其の兩側には樹木を植へ時々水を撒かしむ

第 四 圖



シ ン ガ ポ ル ー 植 物 園 入 口

又路側に細河を掘りて下水の排除に供す、聞く我臺灣の下水工事は此地のを模範となせりといふ、されば上海香港の狹隘不潔を觀來りたる予等一行は異口同音に今日までにては此地最も意に合へりといふ、唱へたり、馬車は走ること三哩許にして植物園前に至る、予等は下車し園内を徘徊す、此時炎暑甚しかりしも赤道直下としては最も堪へ易き時なりといふ、我國にては温室中にて未だ嘗て見ざる珍木奇草は揚々として綠葉を擴げ、或は美花を以て飾られ、衆皆快哉を叫ぶ、園内を一巡し踵を廻らして歸途に就かん、とせしに園丁らしき黒人予等を招きて

案内す従ひ行けば我國の温室の如き硝子園の室には蘭類其他の盆栽を陳列せり、予は植物學の智識に乏しければ唯奇なり妙なりと賞するのみにして其名稱をも記憶する能はず、唯護謨樹、珈琲樹、ヅアニラ草等は予の初めて見たる所なり、案内者に銀貨を握らしめて歸途に就き園の入口に近き一檳榔樹に二頭のカメラランの戯るゝを見たり、以て熱帯地方の風景を想像するに足らん、門前に待てる馬車にて同じ道を歸り途にラッフル Raffles 博物館を觀る主として馬來半島に産する昆蟲類殊に蝶の標本多かりし、礦物類及び同島の風俗を示す標本類多かりし、正午過埠頭に歸り一飲料店にてラムネ、ビールに渴を醫し市内を徘徊し二時半ランチにて本船に歸へる、

此地には日本醜業婦八百餘人ありといふ、此等日本人の住む町を見物するべく予の同船者にて行きし人多きも予は行かず、行きたる人の話によれば中々盛んなるものにして日本人の貸座敷軒を列ね、他に支那人、印度人、獨逸人等の貸座敷あれども日本人の數に及ばずと、又聞く英國人の醜業婦なきにあらざれども自ら耻ぢて英國人たることは決して自白せずと、我國の怪しき婦人

は上海香港はいふに及ばず此地及び次の寄港地ベナンにも少からざる數に上り至る所に恥を曝らしつゝあるなり此等日本婦人は多くは九州の天草長崎附近の産にして言語も我々には解し難きこと多しといふ我國にも此等の無教育の婦人を多く輸出する代りに教育ある有爲の青年を多く海外に送りて商工業に従事せしむること英國の如くなることこそ望ましかれ。

一月二十九日夜我神奈川丸甲板上に友人數氏と納涼す新嘉坡は晝間は炎熱甚敷も夜に至れば涼風徐に至り我國の夏夜よりも爽快なり時正に東天に上らんとせる十六夜の満月の右下部に雲影を認め怪みて熟視すれば雲にはあらで月蝕なりしなり、圖らざりき赤道直下新嘉坡の埠頭にて月蝕を見んごは、月は漸時蝕を増し左方約二分を餘すに至り九時頃より復し始む予は今や十分に涼を納れたるが故に寢に就けり、

此地に於て我船は千五百餘噸の荷物を積みたり、其主なるものは此地附近及び他の英國殖民地より産する籐、コ、アナットの粉、胡椒等にして此等の未製品はロンドンに運搬し英國は無關稅なるが故に廉價にて輸入し本國にて

精製して再び東洋其他へ輸出し以て年々莫大なる利益を占むといふ英國の富強所以なきにあらず、

一月三十日午後四時我が神奈川丸は新嘉坡を抜錨しベナンに向つて出發す予等は甲板上にありて椰子樹を以て被はれたる島嶼の點々たる、或は豆大の小島に白色の燈臺の立てる、或は白色圓形の石油大タンク數個を備へたる島等を指摘觀察す、

一月三十一日日本船は北西に向ひ一時間約十二哩の速度を以て進行す、我船の特別三等室に乗船せる老夫婦の外人あり、兩人共英語及び獨語を話す予獨語を以て會話す、其語る所によれば本籍は南米アルゼルチン共和國の人にして現に上海にありて料理店を營業せるが今回は老人病氣療養のためコロンプオまで渡航するなりと然し旅費に乏しきため所持の銀時計一個を賣りて數金を得たしとて予等に之を買はんことを求む、衆之れを憐みて三十人の同志を募り一人二十錢を集め之れを老人に與へ時計は抽籤によりて一人に與ふることゝなしたるに一英人其撰に當りたり、之れ船中の無聊を慰し同時に慈

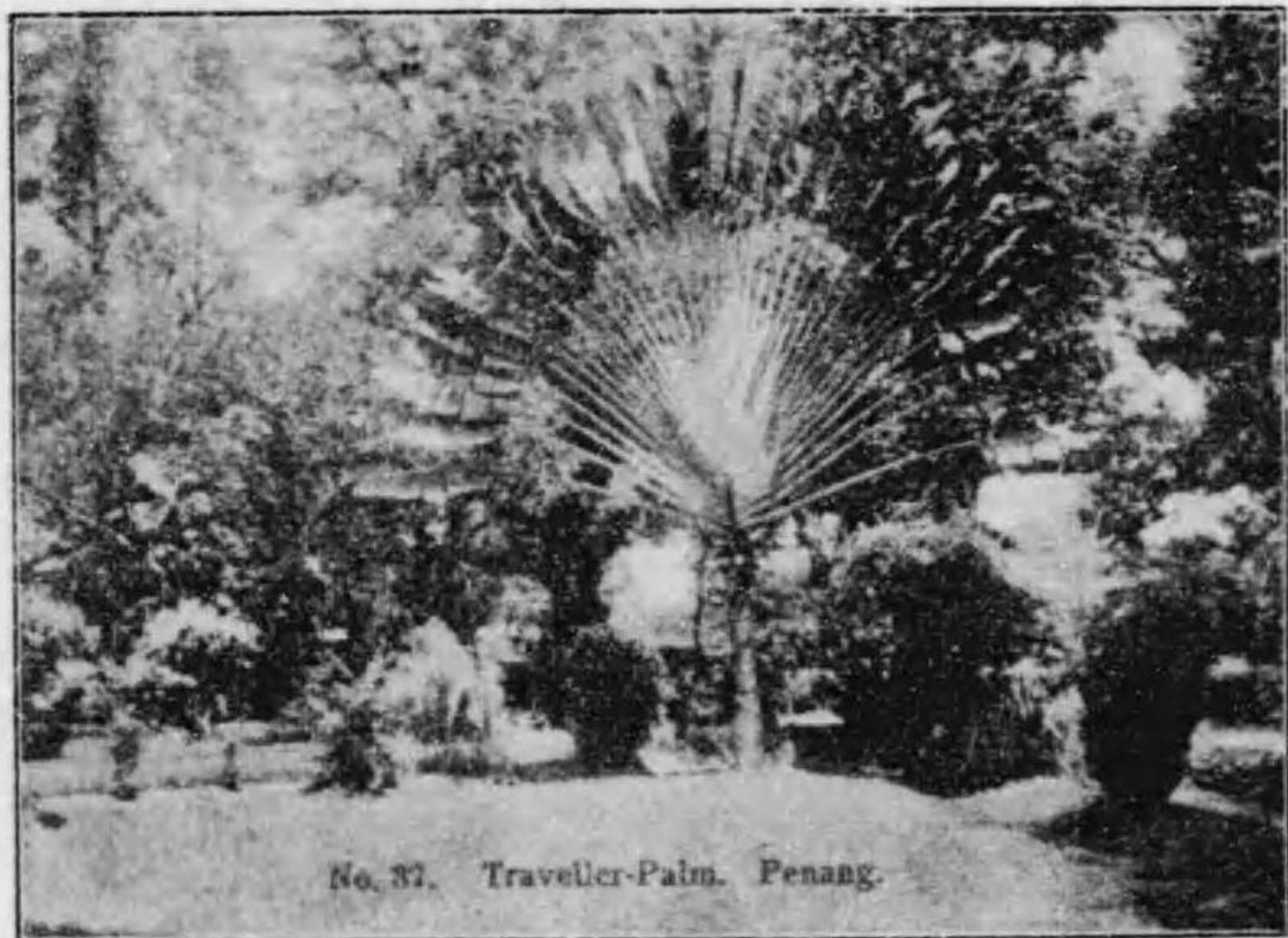
善の一端ともなれりと云ふ可し。

此日午前十一時英國コンノート殿下(先年我國天皇陛下にガーダー勳章を御持参ありし殿下の御兄弟とか承れり)御座乗の「デルヒ」號なる一汽船のシンガポールへ入港の途にあるに出逢ひ我船は三たび汽笛を鳴らして敬禮し又船尾の國旗を一時下すデルヒ號も亦英國國旗を下して答禮せり殿下には明一日新嘉坡に御着の筈なるが故に同港の埠頭には歓迎の準備をなせり此夜八時過より碇泊中休講なりし細川事務長の講談の續きありたり。

二月一日午前八時本船は彼南(土地の人はビナンと稱す)に着す此地も英國殖民地の一にして一小島に過ぎずと雖も新嘉坡と同じく多く熱帯地の産物を英國に輸出する同國の財源の一なり九時頃予は同船の友人數氏と共に上陸し馬車を僦ふて四哩半なる植物園に至る此地の氣候道路市街家屋等の状態新嘉坡と相類するも稍劣等なるが如し植物園亦彼地の其れに比して劣れり然れども山に據り自然を利用して熱帯植物を栽培したれば新に目を歡ばしたるもの少からず正午頃馬車にて歸り日本人旅館田中に至り入浴して

Penang
ンナベ

汗を流した後日本食の晝餐を喫す然し米はサイゴン米、醬油は支那産にして予



第五圖

子椰人旅の内園物植ンナベ

等の口に適せず然も不當の高價を貪り折角同情を以て立寄りたるも不快の感を以て去りたり因に此地にも日本婦人の怪しきもの數百人ありと云ふ此旅館にも數人の出入するを見たり午後三時頃より市中を徘徊して其様子を探りしに時恰も最高温度にて焼くが如き日光の下に黑人支那人の住所には一種異様の臭氣を放てり主要なる街路と雖も香港新嘉坡の如く店頭に日蔭ある人道なく人皆暑熱に苦む予は英人の一飲料店に入り一杯のレモナーデに渴を醫し散

歩いて海岸に出で船を賃して午後四時過本船に歸着す。

二月二日正午彼南出發の筈なりしも本船に積むべき荷物遽に増加せしため出發を延期し午後四時頃漸く拔錨す本船は主として西南に向ひて進行し左舷に鬱蒼たる椰子樹の森林を以て覆はれたるスマトラ島を望む。三、四、五、六の四日間は本船の西に向ひて進行するのみにして見渡す限り印度洋の水茫茫として際涯なく眼を遮るものとは一日二三回他の汽船と邂逅するのみなり、斯る時は衆皆集りて船形を評し何國の船なるかを語り合ひ其形を失ふまで見送るを常とせり、又靜穩なる海上を眺めば飛魚らしき羽翼を具へたる小魚が船の馳せ來るに驚きて群をなして水面上を飛び去る様興味あり、時に巨大なる動物の時々頭を擧げ遊び行くを見ることあり、然れども斯る海上にて最も壯麗にして愉快なるものは日の出及び日没の景色なり、夜間蒸暑きベットにありて快き夢を結ぶを得ず快々たるのとき枕を蹴りて起き出で東天を眺むれば紅を呈し須臾にして地平線上に皿の如き深紅の球の徐々に登り來る様、又退屈なる一日を漸く送り過ごしたるとき夕陽の西天に白づき紅白雜色の異様な雲を以て飾られたる壯觀は陸上にては稀に見る所

なり、予一夕太陽の下縁の地平線に接してより全體の正に没する迄の時間を袖時計にて略測したるに二分十秒を要するを見たり、此時間は即ち地球が自轉によりて太陽の直徑だけ廻轉するに要する時間なり、晝間は炎暑甚しく船室内に居ること能はず、故に衆皆甲板上に出でテントの下にて長椅子に横臥して夜間睡眠の不足を補ふあり、或は小説、會話書等を讀むあり、或は此頃始めて開きたるデツキ、ビリヤードなる遊戯をなすあり、夜に入れば晝間の炎暑に引換へて涼風徐徐に來り單衣一着にては涼に過ぐる程なり、八時過よりは益々佳境に入れる細川事務長の講談を樂み十時乃至十一時に至れば止むを得ずベットに入る、然れどもベットの蒸し暑さに堪えずして或は食堂の廣きを好みて其所に臥するあり、或はテントの下に毛布を身に巻きて寝ぬるあり、殊にシンガポールよりは出稼の印度黒人數十人歸國のためコロンボまで乗船せり、此等は甲板旅客 Deck-Passenger と稱し船室を與へられず常に甲板上にありて夜は毛布、蓆等を敷きて其儘横臥するなり、食事も材料を準備して乗込み自ら調理して食す故に乗船賃も大に廉なり、一夜予も亦

Colombo
ボンロコ

世界一週記

暑に絶えず午前一時頃醒めて甲板上を散歩せしに或は長椅子の上に眠るあり或は甲板上に殆ど赤裸々に横臥せる黑人ありて將に之に躓かんとせしことあり或はハンモックに乗りて眠るあり千種萬別の状實に異様に感せられたり。

二月七日午前七時本船はコロンボに到着す、當港はセーロン島の西岸にある要港にして英國政府は築港をなしコンクリートを以て海中に長さ數千尺の防波堤を築き其中に八十艘の大船を容るゝに足らしむ、午後二時予は同船者數名と共に上陸し馬車を賃して當地の博物館に至り觀るセーロン島土人即ちシンガリー人の風俗習慣、裝飾品、本島に産する動植礦物等を陳列す、就中巨大なる象、鯨の骨、海馬、海蛇の剝製、美麗なる蝶、其他の昆蟲等予等の嘗て其名を聞きしも未だ實物を見ざりしもの多かりし、其説明の方法至極簡明にして例へば動物の産地を示すには小地圖を添え産地だけ赤く染めたる如し、然し時間少きを以て草皇辭し去り復馬車に乗り行くこと約一時間にして大なる佛教寺院に至り馬車を下りて寺に至る途中黑人の小供數人追従し來り、且那

三〇

第六圖



ボンロコ港の景

十セント下さい」と呼び或は案内せんとて之は椰子樹なりなど喋々し五月蠅き事限なし、寺の境内に四角にして戸なく内部の壁に沿ふて机を備へたる四阿の大なる如き家あり門に School と出しあり僧侶の教授する貧民學校ならん寺は稍大なれども大に見るべきものなく四圍の廊下を巡りて見れば壁に地獄と極樂との圖を畫きたるあり、其中には釋迦の大なる臥像あり其眼珠の直徑約四寸あり其黒玉はルビーを以て造れりといふ其兩側に釋迦の立像及び坐像を安置す寺の上方一段高き所にダゴバ Dagoba と稱し大なる球形の塔あり、此等の寺院

第一章 印度洋經由航日記

三一

Kandy
I ンカ

を一覽の後馬車にて急ぎ歸途に就き五時過ぎ本船に歸る。

八日午前六時半同船者數名と共に上陸し停車場に行き七時半コロンボ發
佛教の聖地たるの故を以て有名なるカンデー Kandy 行の汽車に乗る此行一
切の費用を含みて一人一磅の約束にて案内者を備ひたり(後に至りて考ふれ
ば大に高價なる案内賃にして實費は其六七割にて足れり、此案内者は英語は
勿論日本語も少しは解し正直なりとて以前に備ひたる日本人十數名の紹介
狀を有し之れを示して信用を得、以上の條件にて約束するを常とす、然し斯く
萬事を托し已れば殿様然たるは氣樂は氣樂なるも大に不利益にして西洋人
の決してなさざる所なり) 汽車四時間の途中に車窓より最も多く見たるもの
は椰子樹、牛、黒人の三なり、稻を植へたる耕地は極めて少なく椰子多き小山か
或は牛數頭のさまよへる沼澤最も多し、又水牛の小川に沈み頭のみを出せる
もの多きを見たり、稻は粃を蒔きたる後其の儘打ちやり肥料を施すことなく
又草を除く事なく全く自然に放任することなれば我國にて見る如く良く稔
る事なし、而も一年二三回の收穫ある由にて予の見たる時刈りつゝあるあり、

第七 圖



塔るため埋を齒の迦釋I ンカ

未だ幼苗なるあり又中頃なるあり、一般
に農業は極めて幼稚の有様にあるが如
しコロンボよりカンデーに至るは時間
其他の模様にて東京より日光に至る
と相似たり唯カンデーは海面上千八百
呎以上の高所にあるが故に中途より前
後に機關車を附けて登る事及びカンデ
ー寺院は日光ほど壯麗ならざるの差あ
り予等は十一時半カンデーに着し直に
一のホテルに導かれて晝食し後馬車に
て寺院に參詣す予等はコロンボより案
内者を連れ來れるに拘らず、此地の案内
者來りて達者なる英語にて頻りに説明
す此寺院は五六百年の昔建造せるもの

にして釋迦の齒一枚を納めたるの故を以て佛教の聖地として有名なり、然れども門戸を開きて衆人に示すは一年一回にして特に多額の金玉を奉納するものには隨時之れを示すと云ふ、案内者の言に先頃ビルマの王は數萬金の寶石を納めて拜觀せりと云ふ、予等は勿論之れを觀るを得ず、唯其周圍を巡りたるのみ其壁には同じく地獄極樂の畫を見たり、又金泥を塗れる球塔ありて案内者は其下に釋迦の齒を埋めたりと云へり、次に經藏に入り見れば木葉に書したる印度語の經文數十卷を藏す、此堂には最後のカンヂー王、英國皇帝の畫像等を掲ぐ、又日本の皇帝、皇后兩陛下と書せる石版摺の肖像を掲ぐ、予何れより得たるかを問へば日本の或人より贈り越せりと云へり、

寺院を去らんとすれば我國の寺院に於けると同じく盲跛等の不具者多く附き纏ひ來りて錢を求む、門を出んとする所に佛教々會の設立せる學校あり入りて參觀す、校舍は恰も田舎の停車場に似て四壁に腰掛を取り附け生徒を三學級に分ち印度人の教員皆英語にて普通學を教ゆ、予の參觀せしときは英語、幾何學、地理等を教授せり、次に馬車にて當地の植物園に至る、途に三名の僧

侶の街上を歩行するに逢ふ、頭は圓顛裸体の上に黄色の法衣を纏ひ跣足にして日本に於て見る佛像畫と全く同様なり、予謂へらく昔時我國にて佛教の隆盛なりしとき空海其の僧侶の印度に留學すること恰も今日歐米に留學するが如く此等の留學僧侶は此地の邊をも徘徊せしことならん、其當時は瀛車の便なく徒歩して此の千八百呎の高所に登りしならんと思えば其苦行の程察せらる、空海上人の歸朝して高野山に本山を置き眞言宗の一派を開きたるが如き或は此地を模したるには非らざるかなど空想に耽りたり、

當地の植物園はシンガポール、ペナンの植物園と大差なきも種々の新奇なるものを見たり、午後二時半瀛車に乗り六時コロンボに歸り六時半本船に歸着す、

新嘉坡及び彼南に於ても幾分か見たる所なれども古倫に於て特に多く見たるは黒人の小供の七八歳より十五六歳に至るが數人或は一人にて木材二、三本を束ねて造りたる筏に乗りて新嘉坡にては漸く一二人を乗するに足る獨木舟に一人乗りて來れり、櫂を手に持ちて水を掻き瀛船の周圍に集まり來

黒人子供
の水遊び

り怪しき英語にて「テンセント」或は「フワイブセント」などいひ或は手まねにて錢を水中に投せん事を求む、旅客若し銀貨一片を投すれば忽ち海中に潜入し貨幣を口にして浮び来る、蓋し海水は比重大なるため銀貨の海底に沈降するには幾分の時間を要するが故に未だ沈み終らざる前に獲取するならん、然し其巧妙なること驚くに堪へたり、此等の裸體なる小供は筏上において上肢を以て脇腹を打ちて一種の音を發せしめ「タララボンベイ」と一同揃ふて歌ひ以て船客を甲板上に誘出す、客は無聊の折柄とて五錢或は十錢を投じて樂む、故に此等小供は時として大金を得ることありと云ふ、

古倫の寶玉商

古倫は青玉紅玉黃玉等の産地なれば此等の寶石を入れたる指輪、鎖襟止等を船に持ち來りて買ふを勸むる黑人夥し、然れども多くは皆他の船中商人の如く三四倍以上の掛直を言ふを常とし又は寶石に非ざる硝子等を持參し偽りて賣り付くるもの多し、予と同船者の一人は數金を出して「アレキサンドリア」と稱する寶石を購ひ後に信用ある商人に示したるに全く硝子なりと云へり、其の鑑定法として水滴を其上に置きたるに流れ落ち比較のため眞の寶石

の上に置きたる水滴は其上に止まりて落つる事なし、此鑑定法の正確なるや否やは予未だ知らず、此地に於ける多數の寶石商の中にて比較的信用ある一人あり、多數の我邦人の此商人は信用して購ひ得る由を記入したる紹介状を所持して予等に示せり、其中には梨本宮殿下家扶、栗野公使夫人、澁澤男爵夫人、長谷場純孝等あるを見たり、此等紹介状の中に申出直段の一割は引くことあり、依て予も一割引にて安心して寶石入指輪、襟止各若子を購へり、此商人の言によれば同一の品にて日本及び西洋にては五六乃至十割高價なりと、之れ容易に信すべからざるも寶石の産地だけに多少低價なるやも知るべからず、予は又此商人の有する寶石の各種(十種程)の小なるを標本として集め購へり、此等は皆結品にてはなく直に裝飾品として用ひ得る如く琢磨せるものなれども女學校などにて生徒に示すには恰好の標本なり、此商人はかく信用を得たるが故に我同船者よりも多數の品を買入れられたり、然るに他の數倍の掛直ある商人は五月蠅く付き纏ひ不要なりと云ふも顧みずカバンを開きて品物を陳列し強て勸む、偶々購求せんとする人あるも直段の談判に數時間を要し然

る後稀に一二品を賣買するに過ぎず、之れによっても直段を一定にし且つ正直なりとの信用を得ることの商業上大切なること明かなり。

二月九日コロンボを出發し、十一日の紀元節を印度洋中にて迎へ郵船會社の好意にて日本酒及び日本料理を得て心ばかりの祝意を表したり。

コロンボ出發後印度洋の航海七日間は氣候大に温和となり大抵正午に於て華氏八十三四度位にして夏服にて恰も好く微風ありて涼を送る外風波少もなく海面鏡の如く殆ど船の進行を覺へざるが如く衆皆幸福なる航海なりと祝し合へり此間予等は讀書、運動、談話等にて愉快に時を遷したり。

二月十六日午後六時頃船はアデンの沖を通過し外國船はアデンに寄港すれど本船はせず夜中にバベルマンデブ海峡(涙の門なる意義)を過ぎ紅海中に入れり紅海は地圖にて見れば細き帯の如く船中より兩岸を明に眺望し得る如く想像せらるれども最も幅の廣き所は二百五十哩にも達し見渡す限り水天彷彿たる海にして陸地とては見る能はず唯時に點々たる島嶼を見るのみなり次第に赤道を遠かるにも拘らず氣候は暑氣を増加す之れ兩岸の沙漠よ

Red Sea
海 紅

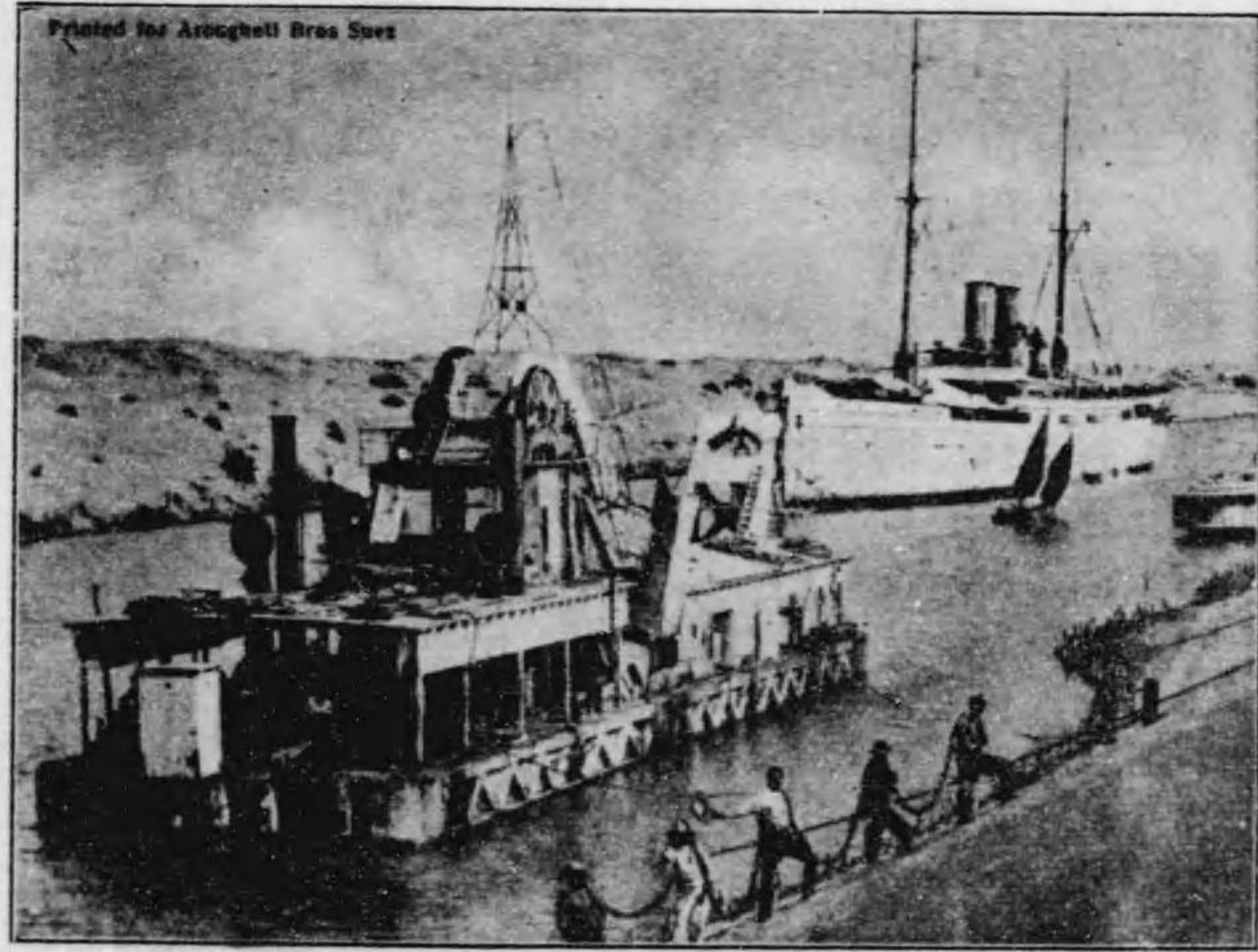
り熱風の吹き來るが爲めなり即ち印度洋にては八十三四度なりしに對し紅海にては二月に於てすら日中は八十五六度にして八九月頃には遙かに温度高しといふ。

十七、十八日の兩日船は無事紅海中を西北に進行す十九、二十日の兩日は更に進んで北緯二十四五度に達し且つ天氣陰鬱稍風ありたれば冷氣遙かに増し(七十度に降る)二十日に至りては衆皆冬服に更へたり北緯二十三度半は大陽の回歸線なれば之より以南にありては南風なりしに忽ち北風に變じたり即ち風は赤道に向て吹くに至れり。

二十一日午前六時本船は蘇士に來り停止す予は早起甲板に上りて周圍を眺望す此地は蘇士灣(紅海の北部の細くなれる所)の北端にして運河の南口なり蘇士市街は稍離れて見ゆ停船二三時間との事なれば上陸せず此地にて船のなすべき要務は皆運河中を通過する準備にして第一此間は船徐行するに より通常の舵^カにては効力弱きを以て其下に鐵板をつぎたし舵を深くする事此作業及び運河中にて他船に出逢ひたるとき本船を河側に繋ぐ等のため

Suez
ズエス

第八圖



スエズ運河(其幅をきよ見よ)左方にあり、波濤の機り

ボート一艘及び其乗組人夫三名及び運河通行中船の進路を指揮する水先案内を乗込ましむるため(此等は皆運河會社の受負にして本船は運河通行料として一回毎に同會社に二萬圓許を納むといふ、因に蘇士運河會社は世界中最大の會社にして若し我國に此會社を所有せしなれば其收入のみにて優に一國の財政を料理し得るならんと船員の一人は予に語れり)猶一は檢疫のためにして午前七時頃一人の檢疫醫來り船員を甲板上に整列せしめベスト

Suez Canal
河運スエズ

豫防のため一人毎に手にて股間を衝き痛みの有惡を檢す、予等乗客は食堂に座し醫師は入口に來り一見して宜しいとて去れり、唯形式的の檢疫なり、八時頃より黒人の商人例の如く船に入り來る、予等例の如く繪はがき及び印紙を購ふ、印紙は埃及政府の發行にてピラミッドとスフィンクス(女面獅子體物)とを畫きたるものなり、其價一枚一ペンニー(我國の約四錢)なりしゆへ繪はがきには此印紙一枚にて十分なりと信じ既に投函したる人もありしに後に至りて此印紙の實價は半ペンニーにてはがきには二枚を貼付するを要する由を聞き狡猾なる商人のために失敗したることを憤りたり、午前十時本船は拔錨して運河に入る、河の入口には東岸より半哩の防波堤を築き出して風波のために河身の埋没を防ぐ、

抑蘇士運河 Suez Canal は人の知る如く佛國人レセップ(M. de Lesseps)が十五年間苦心經營の結果一八六九年遂に成功落成したる所にして爲めに地中海と紅海との連絡を通じ東西兩洋の行通にアフリカ南端を迂廻するを避け航海日數を大に短縮し得たり、されば此運河を通行する船舶は實に多數にして一

九〇四年には四二三七艘を下らず然し上述せし如く通行料高きゆへ帆船は通行せずといふ其噸數は千三百四十萬噸に上れりといふ此噸數の六十三%は英國船舶なりといふ運河の全長は百二哩にして其間に大小數個の湖水あり河幅は所によりて多少の差あるも兩堤の幅三十三間乃至五十五間にして河底の幅即ち船の通じ得る所僅かに十八間に過ぎず故に本船の如き船幅八間のもの中途にて二艘相出逢ふときは何れか一(郵便船は止まらしめず)を停船し河側に繋ぎ以て漸く他船を通ずるを得るなり河深は三十尺にして船底より僅か一二尺深きのみなり河の兩岸所々に信號所ありて長杆を立て黒球數個を擧げて信號の用に供す河の兩岸は茫茫たる砂漠にして甚稀に椰子樹の點々たるオーシスを見るのみ土人の駱駝に荷物を負はしめ曳き行くさま我國河原乞食の如く砂原中に正立方形の土造小屋を造り駱駝羊等を飼ひ居る様婦人は頭より黒布を被れり又土人の小供數人相伴ひて河岸を叫びつゝ走り金錢を投じ與へんことを求め本船乗込水夫の腐れたる馬齡薯を投げ付くれば之れさへ争ひて拾ふ様皆奇異の觀物たり運河の兩岸は砂山のまゝなる

第九圖



エスエス運河通
行の土人俗風をみた(予は三塔角塔見ざれ)

あり人造石にて築き上げたる所もあれど之れにて土臺ゆるき砂なれば久しからずして崩れ船の進行の爲に生ずる波のため砂は漸次洗ひ流さるされば運河會社は斷へず多數の浚渫機を以て浚へ又は防砂工事を施せり運河通行中船の速度は平均五六哩に過ぎず夜に至れば船首に探海燈を點じて進行す本船は午後六時迄に六十餘哩を走りしも午後八時頃獨逸國の一郵便船のために一

Port Said
ポートサイド

世界一週記

四四

時間許停止して路を譲り後郵船會社の丹波丸其の他に路を譲りたるため二十日午前二時頃に至りてポートサイドに着す予は直に起き出で商人の來船せるものより繪はがきを買ひ知友十四名に送り出す日本商人の當港にて日本雜貨を商へるもの(當地には本邦人三人あるのみ)一人來船して埃及煙草を買はんことを求む此地の煙草は良質にして廉價なれども予等は佛國上陸の際煙草を所持するときは税關より重税を課せらるゝが故に買ふこと能はざりし却て予等は曩きに香港に於て各自購ひ熱帶通過中使用したる籐の椅子を此地商人の求めに應じて賣却したるに原價の七割を得たり蓋し香港にては籐大に廉にして此地以西にては大に貴ければなり本船は二十二日午前八時ポートサイドを出發せしゆへ予等は此地に上陸せず唯船中より市街を望見せしに最も大なる建物は蘇士運河會社にして港の出口には高き燈臺と大なる石炭會社あり此地に船の寄港するは主として石炭を積込むためなり此地の石炭は粉炭にして積込みの際黒粉全船を包み船室の窓に紙の目張りをするにあらざれば室内にまで侵入するとの事にて衆皆苦慮せしも幸に本

船は風濤に逢はず航海順當なりしより石炭の殘餘多きゆへ此港にては積込

第十圖



ボートサイドの頭單にあつる像の像

たり之より始めて地中海に出で船は西北に進行す海水は埃及ニール河流の

第一章 印度洋經由往航日記

四五

ますこの事にて皆々眉を展べたり出港の際埠頭に安置せる上記レセツプ氏の立像を見其偉業を想起し敬慕の念禁する能はざるものあり

ため黄濁せり、

予は明治五年舊曆正月十二日の出生にして太陽曆の二月二十二日に相當せり、故にスエス運河より地中海に出でたる日は正に予の第三十五回の誕生日にして予は滿三十五歳となれるなり、我國古來人生五十といへど今後は人生七十と訂正するも猶ほ既に半ば経過し去りたるなり、斯く思へば心細き次第なるも予は既往に於て大なる失敗なく時に應じて予のベストを盡し、殊に今回官命を以て洋行するを得、始めて廣き世界を見んとする其航海中に誕生の祝日に逢ひしは益々祝すべきなりと獨り喜びたれど船中にては何事も意の如くならず唯予一人心中にて祝して止みたり。

二十二日地中海に出で、より波高く廿三日朝船の動搖殊に甚しく船酔にて食卓に出づる能はざるものあり、予も稍心地悪かりしも食卓を欠席するに至らず、温度は低く六十五度なり、二十四日予は頭痛のため不快を感じ終日ベッドにあり、二十五日予の頭痛全快せり、此日午後十時頃本船はイタリーとシ、リー島との間なるメシナ海峽を過ぐイタリー大陸の方にも燈臺及び海岸

船中の誕生日

地中海の航海

村落の燈火を見たれどもシ、リー島のメシナ市街の燈火數百海岸に整列したるが海水に映し實に美觀なりし、此夜若し晴天なりせばエトナ火山及びストロンボリ島(メシナ海峽を過ぎたる後に見ゆべきなり)の活火山の壯觀を見るを得べかりしも曇天のため見へず、二十六日海稍荒れ衆皆不快を感じたり、二十七日早朝本船はコルシカ島とサルデニア島との間なるボニファシオ海峽を過ぐ殊にコルシカ島に接近して東北に進行せしゆへ同島の雪を頂ける高山鋸齒の如く凸凹ある山海岸の人家等手に取る如く見ゆ、同島は有名なるナポレオンの産地にして海峽の入り口に記念像ありと聞けり、此日は昨日の風波に引更へ極めて靜穩にして海面鏡の如し、本船は明二十八日午後マルセーユ港に着する豫定なりしも航海の都合良好なりし爲め通常の速度を以て進行すれば二十七日午後十二時頃には到着するを得るに至れり、然れども豫定の日取に違ふは不可なるゆへ速度を殆ど半減し進行を感せざる程となせり、而して明早朝マルセーユ到着、予等は上陸の筈なれば庫中に預け置きたる大カバンを出さしめ、荷物の片付荷造等をなし船中俄かに活氣を呈せり、此

Marseilles
ユルセルマ

日夕食の時我二等室日本人の食卓に於てシャンパン酒を傾け明日上陸する四人、ロンドンまで船に止まる大坂商人一人、船員一人互に別れを告げたり、二月二十八日午前七時我神奈川丸はマルセーユに着す、船は棧橋に横付けとなり、検疫は終り旅館の客引をなせる日本人杉山某及び旅客の荷物運搬等一切の世話をなすクック商會のインタープラター(通譯來れり)予等上陸者は身仕度及び荷物の整理に忙はし、初め予等は今夜十一時半發の汽車にて當地出發の豫定なりしも正午發の列車は乗更へなくして瑞西へ行くを得、最も都合宜しとクック商會社員の言に従ひ草皇神奈川丸を辭し去り埠頭にて税關の検査も事なく濟み、荷物、切符購買等は一切クックに托し予等は馬車に乗せられてマルセーユの不潔なる市街を通過しホテル、ゼネーブに至り十一時頃食事を濟ませホテルの馬車にて停車場に至り同行四人、獨逸ミュンヘン行の醫士二人、瑞西行の予と眞島氏にて小なる二等一室を占領し十二時三分發にて進行す、午後七時リオン市に着し二三分の停車時間にて下車して停車場内の飲食店にて食事すべきを案内不知のため食事するを得ず(我國停車場の如

Lyons
ンオリGeneva
バ子セ

く車内へ辨當を賣りに來らず)我々四人共に大に餓を感じたるも止むを得ず堪へたり、猶一の失敗は此列車は瑞西國ゼネバに着し、茲にて止まりたり、依て止むを得ず下車す、時に午後十二時過ぎなり、幸に一旅館の客引居合せたれば其馬車にて案内せられ既に眠れる僕を起し僅かにバンとラムチを得て餓を醫し寢に就きしは午前二時なりき。

三月一日午前八時、旅館にて食事を終り、十時半發の汽車に乗る筈なれば市内を見物して後停車場に行かんとせしに旅館のもの共來りて時已に來れりとして予等を促がす、怪みて時計を示せば其は佛國の時間にて此地の時は一時間進めりといふ、即ち急ぎ馬車にて停車場に至れば此列車は予の目的地たるベルンに行かずとの事にて他の三人の出發を見送りたる後予は獨り再びゼネバ市中を見物するべく停車場を出でゼネバ湖の佳景を賞し又當地大學のある所に至る、時に數多の學生大學より出で去り其中に女學生多きには驚きたり、當地は専ら佛語の行はるゝ地にして談話不自由なれば大學内に入りて參觀することはなさず、正午過ぎ再び停車場に至り午後一時發の列車に乗

Bern
ンルベ

世界一週記

五〇

りベルンに向ふ汽車はゼネバ湖を繞ぐり漸次高地に上りルザン市の邊りに至りては下に急坂なる葡萄島を控へ其下に湖水あり、湖水を隔て、モンブラン等の雪を戴ける高山は雲際に出沒し、其好景言ふべからず、午後四時半ベルン市に着し停車場近くの旅館に投宿す、長途の疲勞は急に襲ひ來り、且つ唯一人にて徒然なるまゝ八時頃既に寢に就けり。

三月二日豫て目的どなし來れるベルン大學に至りコスタネツキ教授に面會し當教室にて同教授と共に研究に従事したき希望を述べたるに生憎來學期(四月中旬より始まる)は實驗室悉く塞がり空席なしとて氣の毒がられしより止むを得ず旅館に歸り急に旅装を整へ午後一時四十分發の列車にてチューリックヒに向ひ四時同市に着し一年前より當地に留學せる友人片山氏及び先着せる眞島氏に出迎へられ二氏と同宿する事となれり、爾來當地ポリテクニクム(我國工科大学に相應す)のウィルステッター教授に數回面談し來學期より同教授の實驗室にて一ケ年許研究に従事する事に決定したり。

第二章 瑞西國チューリックヒ市滞在

第一、獨逸語研究及び外國生活

明治四十年三月二日未だ餘寒烈しき頃山紫水明の勝地として世界に隠れもなき瑞西國チューリックヒ市に着いた、予は此地に一個年間滞在し世界に有名なポリテクニクム即ち工藝學校に入學して化學研究の方法を學ばんと志したのである、當市には大學もあれど之はチューリックヒ州の州立にして工藝學校は瑞西國聯邦立なれば大學よりも却て規模が大きい、最も大學には工科はなくポリテクニクムは即ち我國の工科大学の如く各種の應用學科を學ぶ所である、予の入學したのは應用化學部であるけれど其中に工業化學部と分析化學部の二分科があり分析化學部の教授は純粹の學者で然も古來歐洲に於ける有數の學者を聘して居る、例へばビクトル、マイヤーの如きハンチの如き大化學者も嘗ては此校の教授であつた、現今では物理化學にはローレンツ、無機及び有機化學にはウィルステッター、分析化學にはトレッドウェルが居り普通學

Polytechnikum
校學藝工

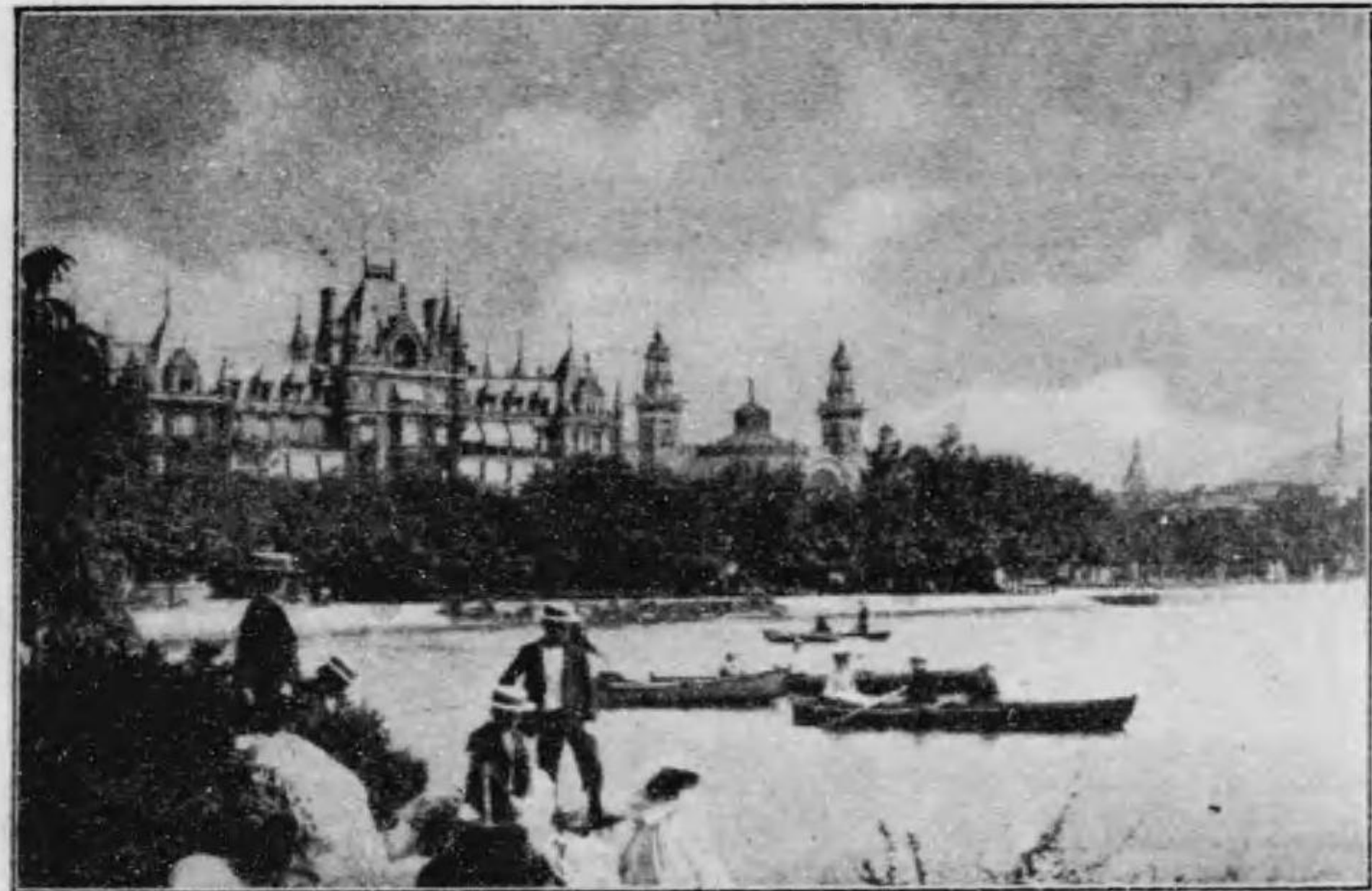
Zürich
ヒツリヒエチ

生の外卒業生にして此校に留まり此等の教授に就てドクトル研究をするものが多い殊にウイルステッター教授の門下には二十餘名の研究學生集まりて盛んに研究をして居る、同教授自らも多くの講義時間の餘暇を以てクロロフィル(葉綠素)の研究に従事せられて居る、此校の化學實驗室は餘程以前に出來たものであるけれど新設大學の模範とするほど良く出來て居る、依て予等が實驗した室の模様を巻頭の口繪に出す事とした。

此學校の學年始めは四月中旬であるから入學までには猶三十餘日を待たねばならぬ、此の間單に自然の風光を樂まんも甲斐なき事なれば専ら獨逸語を研究する事にした、是れより毎日獨逸語を教授する女教師の自宅に通學する事になり教師の選定せる會話書 (Oho, German Conversation Grammar) に就いて指示せられたる分量丈け暗誦して出席し教師の質問に應じて答辯するのであるが此女教師は中々の六ヶ敷屋で予の豫習が不十分な時には臆面もなく叱責するを常とした、此の女教師と云ふのは年齒已に四十を超へ、然かも未婚の婦人である、非常に貧困で顔形すら醜惡であつたのであるら無理もない譯

獨逸語教師

第十圖



ユネリ湖に於ける遊舟及び湖畔の音樂堂(右方に見ゆる)
(兩側に高塔有る建物)

である、併し語學は獨逸語の外に佛、英、伊語にも通じて居たが其の報酬は頗る低廉で一時間五十錢位であつた、或る日、女教師は余に「日本には雪が降るか、貴下雪を知つて居るか」と質問した、余は此の興味ある問ひに微笑みながら「日本は先生御承知の通り南北に細長き國故熱帯に屬する處もあり温帯に位する部分もあり寒帯の白雪皚々たる土地も少なくないのであるから雪に就ての知識は豊富である」と答へた、すると教師は日本人の顔色の黒きは恰かも日光の爲めと思ひ居たる體にて

「否とよ、果して然らば何故貴下の顔色の斯く褐色なるか」とさも不思議さうに、さざやいた、右の如き誤解は獨り此の女教師のみならず一般の西洋人間に把持せられて居る模様である。

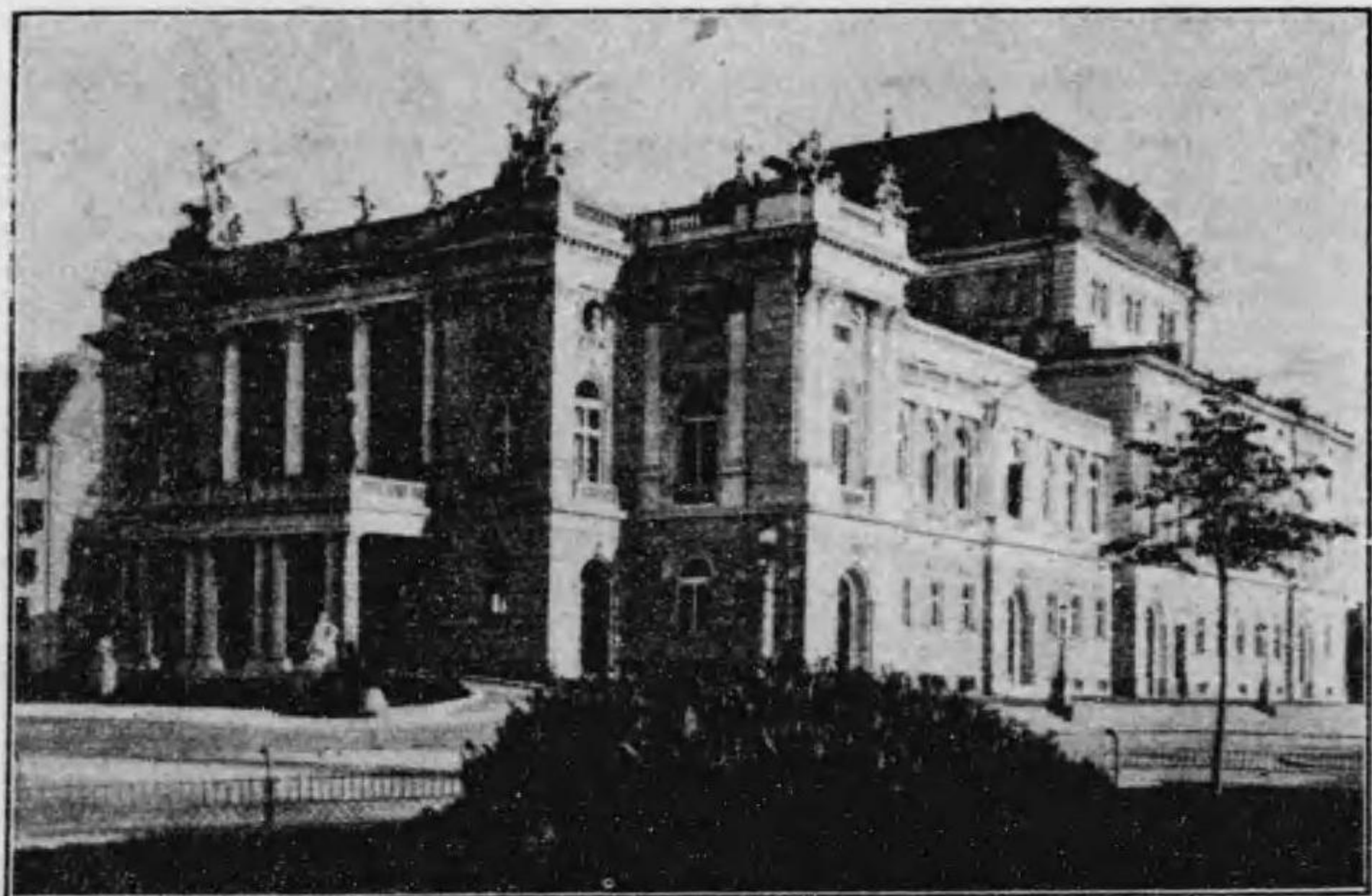
予は此の教師の外に予が日本の友人の紹介により當市の高等女學校に英語の教鞭を執れるクチヒト嬢の許にも通學したが此の人は英國出の人にして上の女教師よりも餘程人品が高尙であつて獨逸語も上手であつた、從來の關係上日本人には殊に親切に教授して呉れた、予は斯くの如くして獨逸語の研究に努力したのである。

工藝學校
に入學

四月十七日に始めて目的のポリテクニクム即ち工藝學校に入學したのであるが爾來毎日は八時から晩は六時まで實驗場に於てウィルステッター教授に研究題目を與へられ其の指導の下に種々雑多の實驗を試みたのである、一週に三時間宛同教授の講議を聴講して見たが其の内容は卑近の材料であつて別に時間を培して聴講するの價値を認めなかつたけれども語學の研究と教授の方法を観察するとの目的を以て強いて聴講した。

瑞西國の
用語

第二十圖



場劇るな大壯るせと誇の市ヒツリユチ

毎日午後六時に實驗を終れば直に退校して語學教師の宅に立ち寄り獨逸語を一時間勉強して下宿に歸るを例とした。

瑞西には其の國固有の國語はないので首府のベルン及びチューリッヒ邊に於ては主として獨逸語を使用し佛國に近きゼネバの邊にては佛語が専ら行はれ、アルプス山脈を越へた伊多利に近き地方にては伊國語が行はれて居る、又區域は狭いけれど羅馬語を語る所もあると云ふ、斯くの如き小國にして四種の國語を使つて居るのであるから議會に於て興味ある奇觀が呈せられて居る、即各選

舉區より選出せられたる議員は各々其の區に於て使ふ國語を以て滔々と政見を發表して居る。

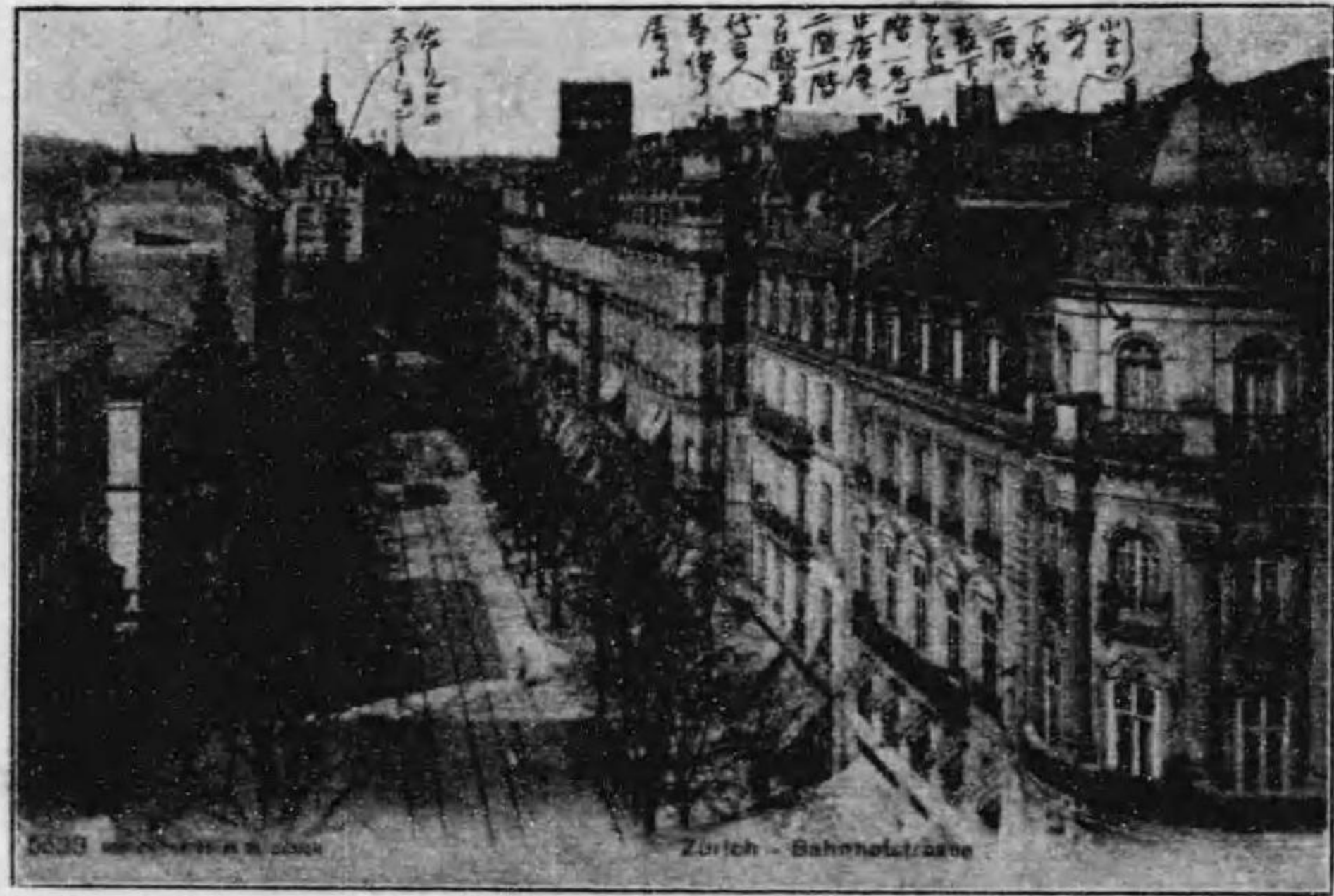
瑞西は世界各國より遊覽の客絶へざるが故に外人に接する事は非常に夥しいのである。随つて此の國人程外國語に精通せる國人はあるまいと思ふ。見よ日本人にて英、獨、佛の三國語を語り得る者の少なきを。然るに瑞西人は商店の女店員と雖も英、獨、佛、伊の四國語は自由に談ずる事が出来るのである。

チューリッヒ市に於ける予の生活状態

最初は曩に留學せる友人の下宿に同宿した。此の下宿は三階の建物であつて其の部屋に昇るには廻りはながら約八十の階段を昇らざる可からずして予の如き脚氣の氣味あるものには昇降に非常の困難を感じた。そこで其の理由の下に此の下宿を辭して同市内なる宣教師の許に下宿する事になつた。此の宣教師は貧民會堂の説教師であるから其の物質的收入は頗る少額である。従つて生活が豊かに出来ぬと云ふ點から主婦が内職に下宿業を營んで居るのである。予は此の家庭に於て先づ西洋家庭の模様を觀察せんとした。食事は

宣教師の家庭に入る

第三十圖



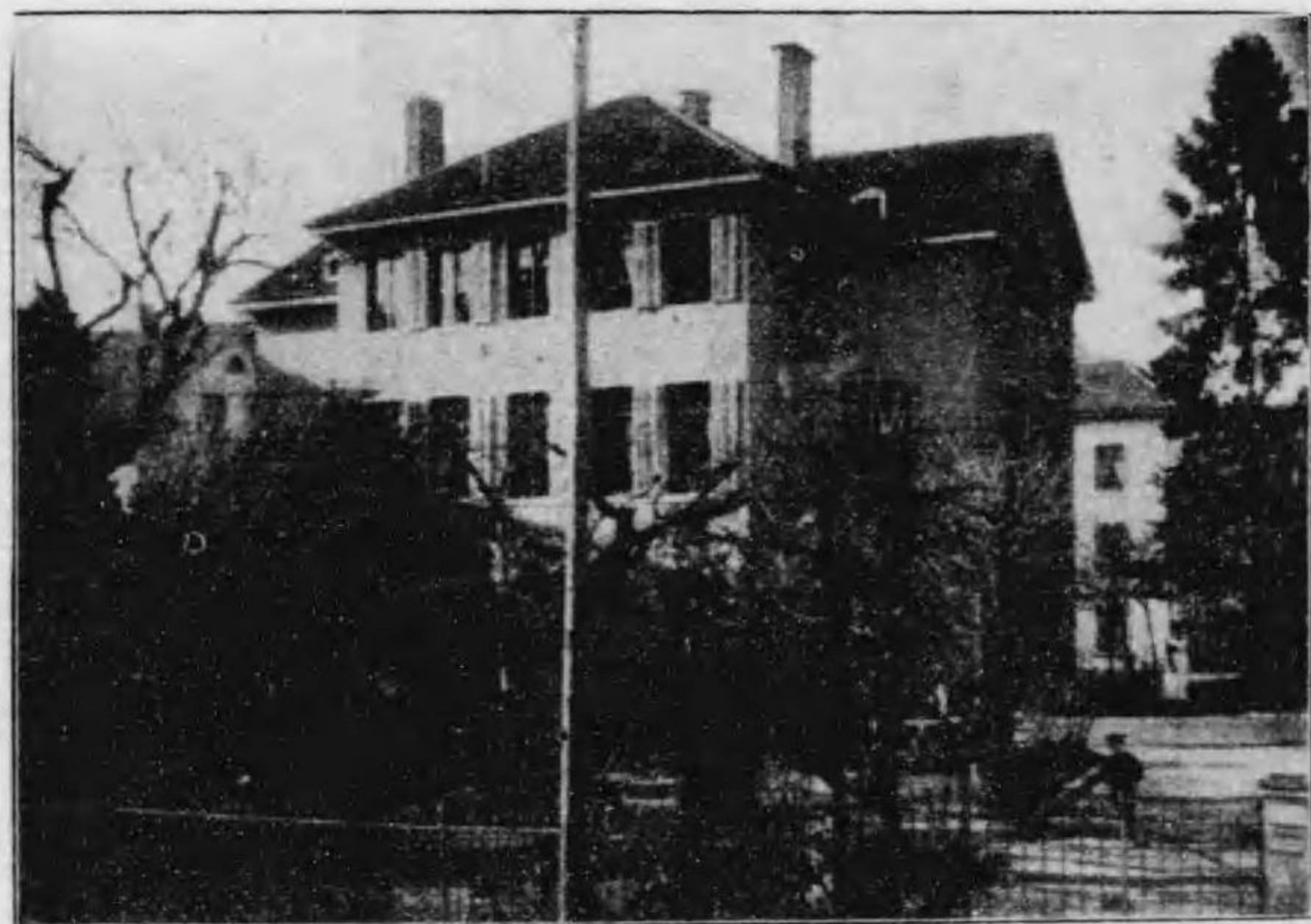
チューリッヒ市ホントツの最初の宿舎に於ける宣教師の家庭に入る

家族即ち夫婦二人と子供五人、下宿人の四人と合計十一人が一緒に同じ食卓に就いた。初めの程は言語の不通より他人の面白き談話が分らなかつたので非常に困つたが日を経る内に他人の談話を會得するのみか自分よりも發動的に談話を試みる様になり最初の寂寞と悲觀は一轉して樂觀に移つた。

日曜日には家族一同と下宿人の面々打ち揃ふて會堂に出懸けた。初めは宣教師の説教が全部理解し得なかつたので興味も湧かなかつたが一回が二回三回と度重なるまゝ

に充分會得が出来た様になつた主人が宣教師であるから下宿に於ても夜に至り時々予が室を訪づれて或は説教をなし、或は聖書を與へて讀ましめ又は獨逸語の發音を訂正する等懇篤に指導して呉れた、此人は、齡既に六十を超へた老人であるが曩に布教のため印度に數年を費した事があつたので幾分か東洋の事情に通じ、又東洋人には少なからぬ同情を表したのであるが悲しい哉頭腦が舊式で更に新しい知識がなかつた、予に基督教信仰の方法を説明するべく基督教を信するには聖書の文句通りに信せねばならぬと、予は一時基督教研究の好機會を得たれば充分に之れが研究を進めんと決せし事もありつれど宣教師の説教の予等の如き理學者の思想と融合せざる點ありて其の感想は漸次冷却した、予と同下宿に法科大學の學生が居たが彼も日曜日には必ず會堂に參拜し青年としては頗る熱心な人であつたけれど主人を評し、餘程思想が古い、基督教の信仰を勧むるに聖書の文句通りにせよとは餘程頭腦が舊式だと予と同感の模様であつた、日曜日に會堂より歸り食卓に向へば衆今日の演説を批評し其體度及び論旨の善惡を討論し、恰も演説會に行つて歸つ

第十圖



チエリヒツ市にてケーア年下宿せし宣教師の家

た様な氣持ちがしたのである。

此宣教師先生此頃書を寄せて予の歐洲視察の感想を聞きたしといひ且つ曰く、君は定めて善事と同時に惡事をも見しならん、全歐洲人は基督教信者と稱すれど、其大多數は唯有名無實である、此の如きは實に危険なことである云々と、以て歐洲の宗教界の大勢を知るべきである。

主婦は英國に生れた人であるとの事であつたが矢張り主人の如く信者であつて日曜日には必ず會堂に行き歸つて食卓に向へば主人の留守の時には自ら祈禱を擧げた、併し此の人は

品性の高潔な人ではなかつた、故に下宿人に向ても同情なく又良人とも融和せざる廉があつた様である、予が伯林に於ける下宿の主婦は基督教熱心家ではなかつたけれども此下宿の主婦に比較して著しく人格の高かきを偲ばしめた、予は此時に基督教の萬能でなく個性を陶冶するの勢力なきを認知し、愈々其の眞價を疑つた、是より先、予は温かき故山を去つて風物異なる異郷に身を寄せたる事にて感じたる無限の寂寞と幾多の煩悶とありて此れが慰藉を基督教に求めんと希ひ、母國にある信者なる友人に其の信仰の動機、經過などを問合せし事すらあつたけれども先きの疑念と基督教の理學思想と融和し難き點あることによつて遂に最初の希望は破棄せられたのである。

一日、予の師事せるウイルステッター教授を訪問した時に予が宣教師の内
に止宿して居る事及び目下基督教を研究しつゝある事を述べて先生の信仰に對する意見を徵せしに先生は「基督教よりも佛教が却つて哲理に合して居る佛教を信じては如何に」と諭された、而して先生は決して日曜日に會堂に行かなかつたのである、予は先生が基督教國の人にして斯く基督教を疎外する

伯林の下宿

第五十圖



伯林市フリュイツの街ケー年の間下宿(尖塔あ小會堂の手前の家の三階)

第二章 瑞西國チエーリツヒ市滞在

を不思議に思つて居つたのであるが、其の後先生が猶太教である事を知つたので始めてさもあるべきを會得した。獨逸では猶太人を非常に嫌忌するので決して大學の正教授には任せないのであるが瑞西は獨逸に於ける如く排斥しないから先生を工藝學教授に聘して居ることである。

予は豫定の如く此の國に一ヶ年を過ごして次ぎは現代に於ける文明の中心地なる獨逸の首府伯林に轉じたのである。

伯林に於ける予の下宿は以前から日本人が次ぎく下宿した事のあ

る家である。主婦は四十歳位の未婚者であつて老母と二人暮しである。頗る貧窮の模様ではあるが正直で眞面目で餘程日本最きの人である。夫れは先きに下宿して居た日本人は多くは海軍の將校醫師等であつて豊かに生活したので随つて金が多く手に落ちた故ではあるまいかとも思はれたが兎に角、日本娘と云はるゝまで日本人最きである。

日曜日には冬の寒さの厳しい間丈け會堂に詣でて氣候の温暖なる間は顔出しもしなかつた。蓋し冬期は自宅のストーブよりも會堂の夫れが餘程暖かであるからである。斯くの如く基督教にはあまり熱心の方ではなかつたけれども親切で正直であつたから日本人間には大なる同情を得て居つた。一ヶ年間を此の下宿に過して貿易に其名も高き英國に移つたのである。

英國に於ても例の如く貧困なる女主人の下宿屋に止宿した。身元を質せしに、素と主人は倫敦の名ある商館の行商手代であつて相當の俸給を受けて居たので生活も頗る贅澤であつたのであるが、ふと飲酒を始め非常の豪酒家となり遂に商館の方も解雇せられ収入の途は斷絶せられた。何處の大酒家も同

英國にて
の下宿

様に酒は身を破り家を倒す事は知りつゝも止むるに由なく依然續けて居たが果てはアルコールに中毒せられ家什一切を呑み盡くし、家族なる妻子は貧に泣くの悲惨なる状態を呈するに到つた。是に於て已む事を得ずして妻は此の罪深き良人を逐ひ拂つたのである。其の後主人は養育院に送られ作業して口を糊して居た。併し英國に於ては離婚問題の困難なるため離婚は出来なかつたが兎に角離婚同様の境涯にあつたのである。主婦は此の珍らしき困窮と苦闘しつゝも二人の愛兒の教育を怠らなかつたのである。予は無聊のときは此二兒を友とした。別に臨みて紀念のため三人にて寫眞を取つた。(第七章に出づ)

日曜日には家族打ち揃つて會堂に詣でた。予等下宿人の面々も亦屢々同行した。併し此の家族の人等は何時も同一の會堂に参拜したのであるけれども予等は各會堂の状況を視察せんが爲めに所々の會堂を訪れた。

予は會堂を訪るゝ毎に日本の御寺参りを連想した。日本に於て御寺参りと云へば婦人か老人か或は兒童であるが西洋の會堂参りも御同様である。新進の知識を有する大學生等の中には會堂に参拜して信仰する如き熱心なる宗

教家は稀に見る所である。故國に於ても御寺には大なる賽銭箱が備へられて
参拜者の賽銭を受くる仕組みであるが歐洲の會堂に詣づれば賽銭袋を順次
に廻はして賽銭



西國アランダール山本天主堂の内部(其の裝飾花や地間に
あに地飾の間山ふいミルデ！ナンイア國西瑞
なかや花の飾裝其)上壇の内堂の山本天主堂の
じ同く全さるたで詣に寺佛の國我き多の像偶る
(かふ云さすらあに拜崇像偶は教蘇耶か誰

て小供の間は父母と共に日曜日には大概會堂に参拜する習ひであるが成人
となれば参拜するものは頗る稀である。一般に眞の信仰者は次第に減少する

を受くる事にな
つて居る。又會堂
に依つては門口
に寺男が長柄の
網を持つて佇立
せる所もある。
西洋には今猶
小供が生れると
直に洗禮を行つ

海外に於ける生活費

傾向がほの見へて居る。

チューリッヒは山間の高地であつて食品の原料は殆ど全く外より運搬する
のであつて恰も世界遊覽の客に對する旅館の觀がある。夫れ故に生活費は一
般に高價である。チューリッヒにて予の下宿は十疊敷位の部屋であつて一隅に
寢臺が設けられて寢室兼用であるが部屋代と食料とにて一ヶ月金六拾貳圓
點燈料が壹圓貳拾錢、冬期にてストーブを焚く時には一ヶ月六圓である。其の
他入浴料二度に四拾錢、實は下宿に風呂を設けてあるのであるが日本と違つ
て矢張り代金を取るのである。西洋の風呂は非常に高價であるから貧困の人
は中々入浴は出来ないものである。以上の外に洗濯代も一ヶ月八十錢位は是非
要する故一ヶ月其の下宿屋に拂込む額は七十圓以上に達する譯である。

伯林の下宿でも矢張り十疊位の部屋に寢臺が設備せられてあつた。而して
日本式の掛物や花卉の額を以て飽く迄日本的に裝飾せられてあつたが部屋
代は一ヶ月貳拾圓五拾錢である。朝の珈琲代(獨逸人は朝はパンと珈琲だけで
濟すので朝食と云はず珈琲といふ)が一日拾貳錢五厘であるから一ヶ月三圓

七十五錢、點燈代が一ヶ月壹圓五十錢、ストーブは一回の料金拾五錢、一ヶ月四圓五十錢の割である、別に世話料として一圓五十錢を要す、晝食と夕食とは外出先きの料理屋で終へるのであるから下宿屋に支拂ふのは以上の通りである、晝食は一回大抵七十錢、夕食は五十錢位であるから一ヶ月では約三十六圓、總計七十圓位である、此下宿では豫め依頼すれば一回六、七十錢位で牛肉のすき焼及び米飯が食べられたのである、伯林の日本人俱樂部に行っても同様に食べられる。

英國にても倫敦では下宿料は餘程高價であるけれどもリーズ市に於ては頗る低廉で然かも寢室と勉強室とは別々になつて居る、寢室は二階で寢臺が設けられ勉強室は其の下であつてピアノ、其の他の裝飾品が陳列せられてあつた、下宿代の支拂は一週間拂ひであるが室代と朝食及び夕食代とを合して一週間に十一圓五十錢である、晝食は下宿にて喫しても學校の賄所にも共に五十錢宛であるから一週間參圓五拾錢になる、洗濯代は大概四十錢位であつたから矢張一ヶ月約七十圓位で支拂が出来たのである、英國では入浴料點

燈料及びストーブ料等は部屋代の内に算入してあつたのであるから餘程低廉であつた。

海外に於ける第一の樂みは故國よりの音信と新聞紙なり

日本料理も其の一なり

「天の原ふりさけ見ればかすかなる、三笠の山に出でし月かも」と仲麿は昔隣邦なる唐朝に仕へ三代の寵遇を受けて榮華を極めながらも斯く故國の空を偲んだのである、況や雲山萬里を隔て萬事異なる西歐の天地に遊ぶ予に於てをやである、殊に冬の晚鐘凍つて響く頃は無限の寂寞と懷郷の念を禁ずる事が出来なかつた、偶々故郷の音信及び故國の新聞を手にしてストーブの側なる安樂椅子に倚つて最愛の家族友人の信書を讀む時は心は遙か故山の空に馳せて無上の快感を催すのである、又日本の天長節紀元節、一月一日の三大節に在留日本人會合し日本酒と日本料理を膳に上せて舌鼓を打ちながら吉辰を祝賀する時は一種言ふ可からざる愉快を覺へたのである、伯林に於ては日本留學生が多いから日本俱樂部が設けられ日本食でも日本の新聞雜誌でも隨意に得られ、且多くの日本人と面談する事が出来る、併し英國リーズ市にては態々倫敦から日本酒、醬油、海苔、罐詰等を豫め取り寄せ置かざれば直に料理

する事が出来なかつた、最も不便なのは醤油の無い事である、倫敦から取り寄せれば四合瓶一本大概貳圓位である、併し此地に於ては不便であるだけ日本料理の香味は格別に感じた。

第二 學校參觀

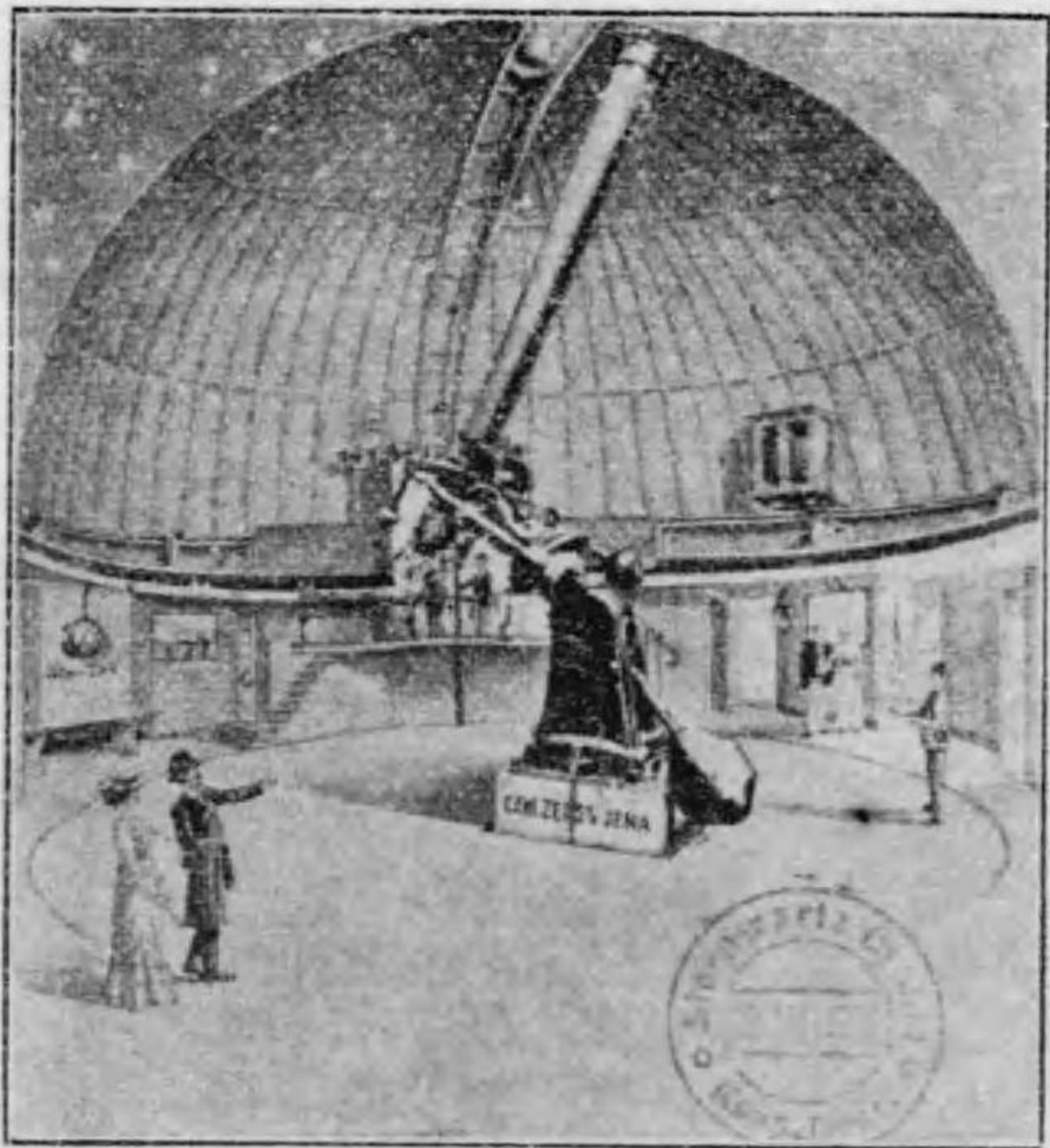
予が先づ參觀したのはチューリッヒ市立高等女學校 Höhere Töchterschule der Stadt Zürich である、此校分れて四部となり即ち師範部 Seminar-Klassen (四年)、大學豫備部 Naturandenklassen (二年)、商業部 Handelsklassen (三年)、補習部 Fortbildungsklassen (三年)にして各部の最下級に入學する資格は滿十五年以上の女子で三年課程の中等學校卒業以上の學力を有することである。
各部とも各實用的の化學鑛物を授け地質學専門のドクトル、レオ、ウエーデルリ之を擔當す、同氏の受持てる化學實習及び鑛物鑑定を參觀せしが何れも實物に就きて活智識を與へて居つた。

同校校長予を導きて商業部生徒の實習販賣室に行き、同校生徒の教科書筆紙等は皆此所にて販賣する由を告ぐ、予は同校にて用ひつゝある化學教科書

チューリッヒ市立
高等女學
校

Arendt, Chemie u. Mineralogie 及び商品學 Hassak, Leitfaden. d. Warenkunde を買取りたるに女生徒之を紙にて包み糸にて縛り通常の商店にて買ひしと同様にし

第十 七 圖



チューリッヒ市立高等女學校の天文台にて、予が化學實習に用ひし教科書を買取りたるに、女生徒之を紙にて包み糸にて縛り、通常の商店にて買ひしと同様にし、代金を受取りてはダンケ(難有)を言つた、此商品學の小教科書は主として化學的成分によりて商品进行分类説明し其挿圖の完全なる予の未だ嘗て見ざる所であつた、實に化學専門書にも見るを得ざる化學上の良圖を見た。

其次に參觀したのはチューリッヒ州立學校 Kantonsschule in

Zürich である、此校の内に中學、工業學校及び商業學校の三種の學校がある、中學に文科及び實科の別あり文科中學は獨逸語、古語、佛語、數學を主とすること

チューリッヒ州立
學校

獨逸の文科中學と等しきも物理は一年間毎週六時間半、化學は一年間毎週四時間の割合に教授し獨逸に於けるよりも多し、實科中學にてはギリシヤ語をやらず、ラテン語のみ少し教へ、物理は一年間八時間半、化學講義及び實驗を一年間六時間教授す。工業學校は四年半の修業で卒業後は同所にある瑞西聯邦立工業學校に入學することを得、此所にては物理は一年間(實は數年に跨りて教ふるも)九時間半、化學は一年間七時間半の割合に教ゆ。商業學校も四年半にして物理は一年間四時間、化學及び商品學にて一年間九時間を教授す。

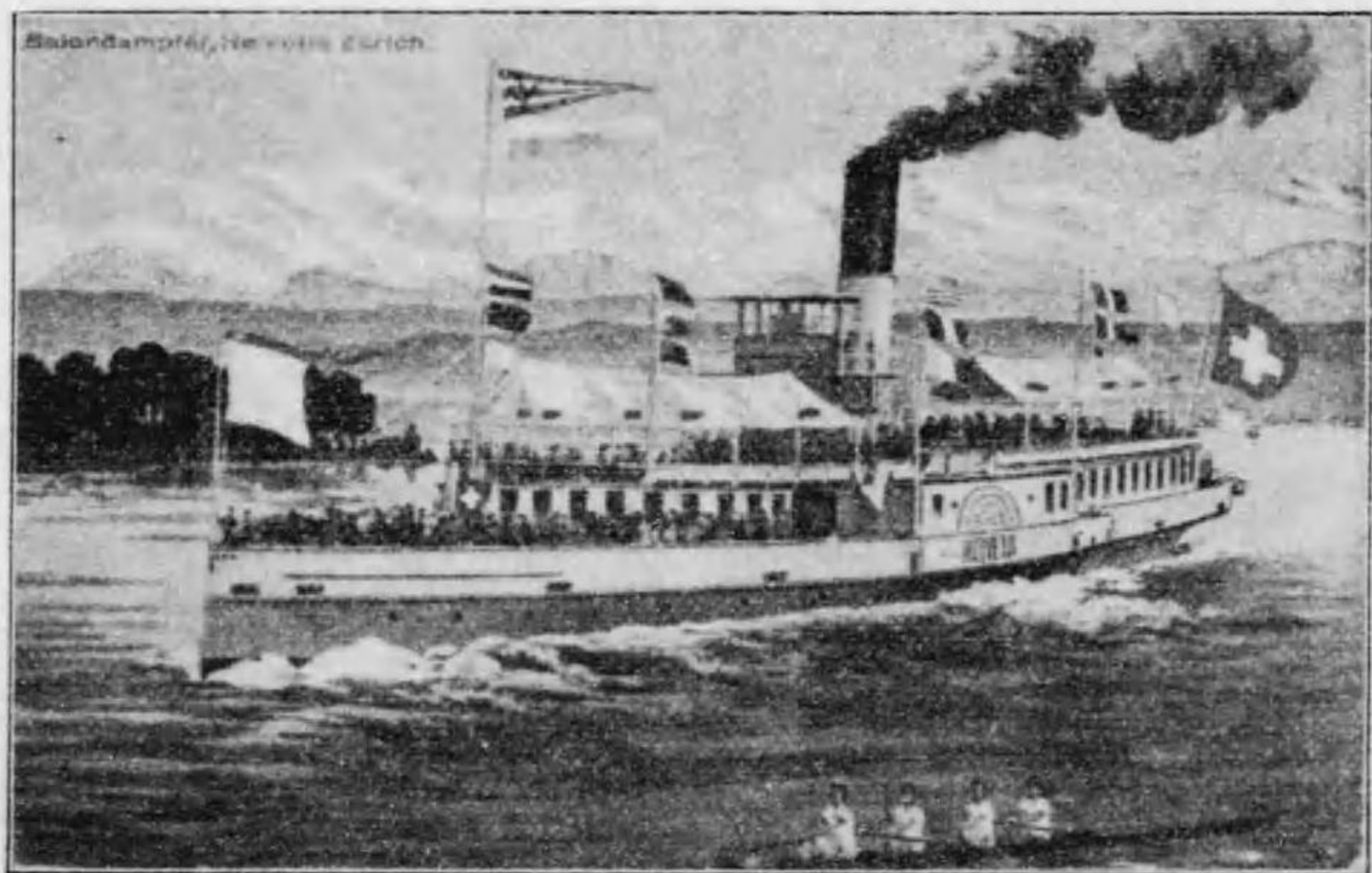
予が下宿して居た牧師の内の長男は十七八歳位であつたが上記の州立學校の中の工業學校に入學して居た、次男は十四五歳で矢張州立學校の中の文科中學に通學して居たのであるが三月に下宿の主婦が此等の學校の試験參觀を勧むるまゝに一日同行參觀した、當地の學校の試験と云ふのは教師が全級生徒に發問して其答辨を生徒の父兄に傍聽せしむるのであるから日本の學校に於ける試験とは全く其趣を異にするので恰も日本の小學校に近來流るる學藝演習會の様である、予は各學科の試験の内でも主として化學の試

験を參觀したが一人の教師が數多の父兄の參集せる中にて輪番に生徒を起立せしめ硝酸に就て種々の質問をなし之れが答辨を求むるのみであつた。

予は其の試験の終了後其の教師と談話したが教師は試験の成績は既に決定せられて居るので今日の試験は別に生徒の成績には關係ないので彼の席に座せし生徒等は落第すべき人である。階段教室の二三の席を指した、故に當地に於ける試験は教師の質問に對する生徒の答辨、或は室内に陳列せる生徒の成績品を父兄に展覽せしむる事を意味して居るのである、獨逸に於ても亦同様であつた、其後獨逸語の試験を參觀したが是れも同様で教師が教科書中の或る分量丈け句切つて生徒に朗讀せしめ生徒の父兄に傍聽せしむるのみであつた。

此の州立學校中の工業學校は其後再三參觀したが化學の教師はドクトルエグリと云ふ人である、學校は日本の中等程度の學校であるが教師は頗る學識に富み教授法も亦非常に巧妙であつた、生徒には參考書としてリッブ著化學及礦物 Dr. A. Lipp, Chemie und Mineralogie を持たせてあるけれども生徒も教

第十八圖



號アチベルへ船汽蒸小の上湖ヒツリ！エチ

場に持参せず、教師は参考書もノートも携へずして教壇に立ち盛に講義し、実験を示すのである。毎時間の前半には既授の材料に就て復習的發問をなし、次で新教材の教授に移るのである。が其の開發的質問を多くし引例の巧みなる事真に活きたる教授の典型であつた。就中最も新しく感じたのは水素の實驗の時に硝子器具の破壊して生徒に危害の及ばん事を憂ひ厚い板硝子を實驗臺の上に立て其後方に於て水素の燃焼などを試み危険を豫防した事であつた。

而して日本の中學校師範學校等に於

て助手なきを、かこつ者あるを聞けどドクトル、エグリにして助手なく全く自身にて實驗前後の準備及び後仕末をなすのである。氣の毒の感じはむらゝと胸中に湧いたのである。

或日同氏は余に向つて「君は日本人のドクトル長興氏を知れるや彼は此の學校に於て余が教育したのであるが非常に勉強家で成績も優等であつた」と語られたから、余は長興氏は目下醫學博士云々と博士の現狀を語り出でたが同氏は非常に喜悅せられたのであつた。尤も同博士は予の歸朝後病死せられたのである。

ベスタロツター像
初等中學
(ジエク
ンダール
ルシエ
レ)參觀

チューリッヒは有名な貧民教育大家ベスタロツターの生地であつて停車場附近に千古不朽の芳名と共に彼の記念像は聳立して居るのである。銅像の傍に一のジエクンダール、ジュエーレ(初等中學)がある。一日此の學校を參觀したが生徒は十二、三歳位に見ゆる男子で日本中學生の如く制服制帽はなく各自隨意の服裝である。余は第三學年の化學の講堂に這入つたが恰もよし今や鐵に就ての教授が始つて居た。前の如く参考書もノートをも携へずして口授する

教師の講義を生徒は筆記もせずして餘念もなく靜聽して居るのである。講義が終はると盛んに教師は發問して生徒の知識を試めしたが蓋し生徒は此の問答によつて印象を深からしむる模様である。

授業時間中余は生徒の後方の空席に着座して居たが觀察せしむべく廻された標本が余にも運ばれた余は觀察後直に次ぎの生徒に渡せしに受取人は「有り難う」と會釋した、余は其禮儀の正しきに感服したのである。

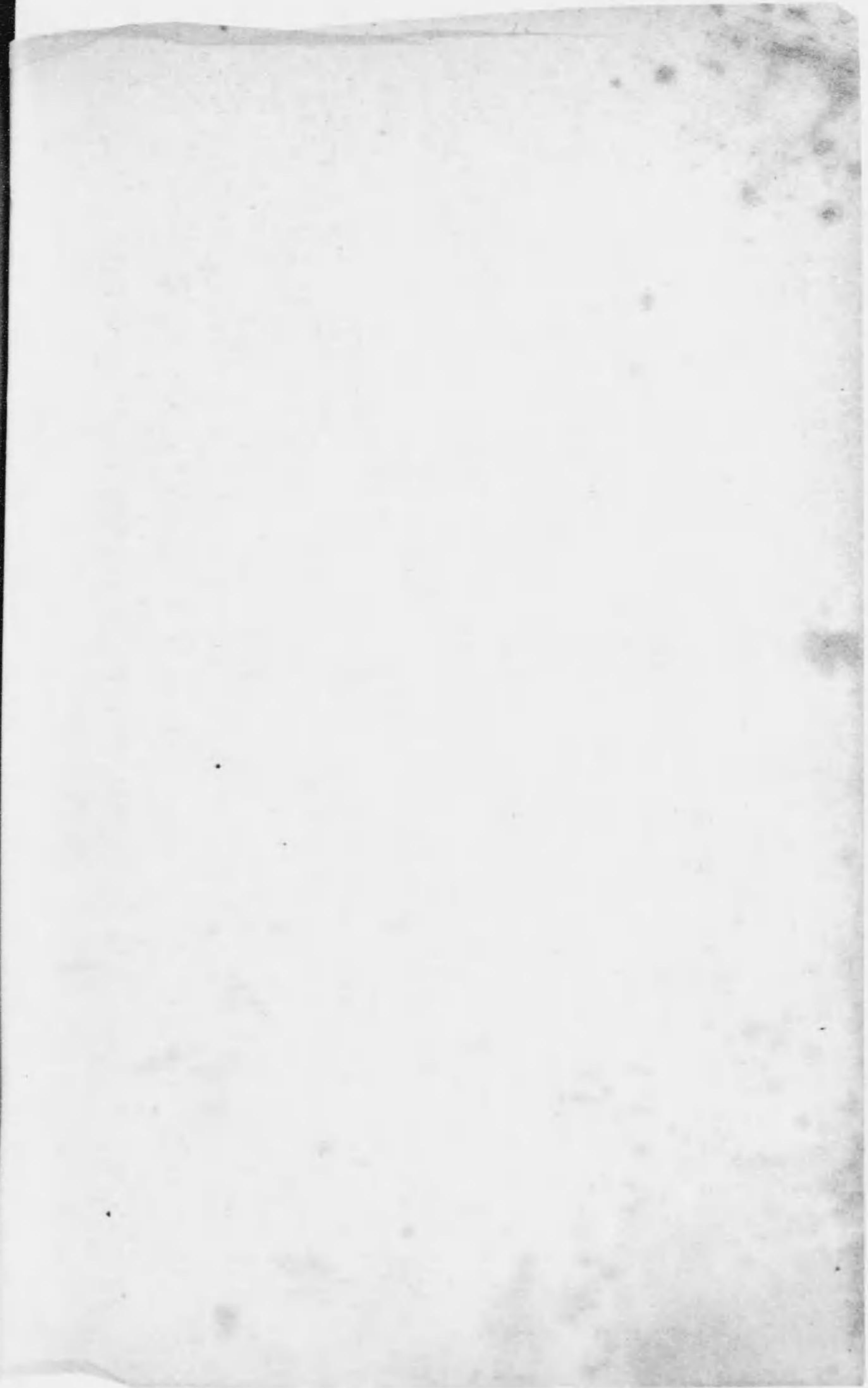
又他の學校にても生徒の傍に起立して參觀すれば生徒は自分の教科書を余に與へ教師の講義しつゝある所を示して參觀の便宜を與ふるので、其の外國人に對する親切と禮儀の正しきには流石文明國の兒童等よとそ、らうに感服したのである。

チエーリ
ツヒ州立
師範學校

水清きチエーリツヒ湖を小蒸汽船にて航すること半時間未だ湖畔の眺望盡きもやらぬに早や身は運ばれてキユスナハトにある、チエーリツヒ州立師範學校は此の地に設置せられてあるのである、キユスナハトは後方三面に翠色滴らんとする山岳を負ひ前には鏡なす湖水を控へ風光頗る麗はしき土地である。



チューリッヒ市にあるペスタロッチー記念像（略傳裏面にあり）



ヨハン、ハイナリツヒ、ペスタロツヂー Johann Heinrich Pestalozzi の畧傳

瑞四國の教育革命者たるペスタロツヂーは千七百四十六年チューリッヒ市に生れ八十一歳にしてアルツガ市にて死去せり。五歳にして既に父を失ひ牧師なる祖父に養育せられしかば其模範によりて夙に精神教育上の職業に傾き下層人民に對する温情を有したり、後ルーツーの著書「エミール」に感激せられて國民教育の革命者たらんと決心するに至れり、千七百九十八年佛國軍の來襲の後ペスタロツヂーは貧窮なる少年の多數を集め彼れの教育上の意見を實際に施して大いに成效したり、之れ彼れの慈愛憐愍の精神（殊に少年に對する）を込めたる努力の賜にして若し之れなかりせば彼れの計畫は失敗に歸したるならん、彼れば二十年間イベルドンにある學校を監理せし間に外國教師の來り學ぶもの多く從て氏の學説は全世界に普及し今日にては教育學の通説となれり、其基礎は心理學を教育に應用すること及び精神の訓練と共に手の訓練の必要なることにあり、彼れの理想は其の最も廣く世人に愛讀せられたる田舎生活の談「リエンハルトとゲルトロッド」及び如何にゲルトロッドが其小供等を教へたるか」なる著書によりて窺ふことを得べし。

チューリッヒ市停車場近くに表記の記念像が立てる外舊學校のありしイベルドンにも壯大なる立像あり、又チューリッヒ市にペスタロツヂーアナムなる常設小學校生徒成績品展覽會ありて其中にペスタロツヂー室とて此大教育家の文學上其他の貴重なる紀念品を陳列せる一室あり。

何れの國の田舎も同じく峯々にはさゝやかなる畑が開墾せられて菜種の花かと疑はるゝ黄色き花の咲き亂れて居る景色を見ては故國の朗かな四月の田圃を連想せざるを得なかつた。

左に記せるは明治四十年予が茗溪會雜誌「教育」に投稿せし詳細なる此校の參觀記である。五月十九、二十日の兩日はブフィンクスラン（聖靈降臨祭）とて耶蘇教國の大祭日なれば地方より大學等に遊學せる學生の多くは郷里に歸るが故に其前後兩日をも休業となし都合四日間の休日ありたれば少しく旅行を試みんと友人と計畫せし所ありしも三日とも降雨相續き空しく下宿に蟄居するの止むを得ざるに至れり、最後の一日即ち廿一日は朝來快晴なりしかば何れにか旅行せんと欲せしも最早一日のみにて遠く出づる能はず、幸ひ當市よりチューリッヒ湖上を小蒸汽にて半時間程なる一村落キヌスナハトにはチューリッヒ州立セミナール即ち師範學校のあるありて豫て至り觀んと思ひしところなれば午餐を終り直に湖畔に出で二時發の小蒸汽船に乗りたり、船は湖の右岸（チューリッヒ市に向ひて）に沿ひて二三の停繫場に止まり半時間

チューリッヒ湖の畔のキヌスナハト

にして、キヌナハトに達す、予は同船せし一青年に教へられ行くこと數町にしてセミナールに着す、三階建の稍古き建物にして餘り立派にあらず、予は先づ呼鈴を鳴らして案内を乞ひしに十歳許なる一少女出て來り校長に面談したき由を語りしにマッマーが宅に居るからとて三階の一室に余を案内せしゆへ從ひ行けば果して一婦人あり、予の來意を聞き時間表を見て我が夫即ち校長は只今地理の授業中なれば此少女に案内せしむべしとて室を示して少女に命じたれば予は案内せられて別の建物の一室に行き少女は戸をたゞき其父を呼び予を引渡せり、校長は年輩五十前後にて後にて聞けばドクトル某氏なり、風采菊池男爵に似たる人にて予を教場に案内して後地理の教授を續けたり、恰も英國の地理を説明せしが黒板に英國の圖を畫き山川都市、石炭層、鐵鑛等の位置を赤青黄等別々の色にて記入し行き時々生徒に質問す、蓋し生徒は各自世界地圖を有し豫め此日學ぶべき所を下見せるが如し、其教授の方法如何にも老練にして所説明瞭なりし、二十分間にて此時間を終り校長は予の希望に従ひ物理及び化學の教室に導き各教師に紹介せり、先づ物理

の教場を參觀したるに教師はドクトル某にして一生徒に前日教授せし所を質問しつゝありたり、後加速力の所にてアトゥッドの器械を出して説明せり、生徒はウィルヘルム・ド・ンレ (Dr. Wilhelm Donle) 著實驗物理學なる教科書を持ちしが一寸良さそうなる書物なりし、然し教師は教科書もノートも持たずして説明せり、其他別に著しきことなく予は半時間許にて辭し去り、次に化學教室に至り觀しに教師は五六名の生徒に鑛物の結晶形の鑑定を實習せしめ居れり、蓋し末だ化學は始めず先づ結晶形を教ふるなり、教師は予の問に答へて曰く此の二年級の生徒の四分の一づゝ順次に實習せしむるなりと、此教師は鑛物、地質、化學及びアンソロポロギイを受持ち居り、殊に地質鑛物が得意なるが如く之に關する標本を多く集め自から伊多利ヴェスヴィア火山に至りて採集せりとて熔岩などを示せり、又富士山(一般に火山の意)の成因を示すためなりとて銀の一塊を木炭上に吹管にて熱して熔かし空氣の包圍せられたるが熱せられて吹き出し銀の小突起を生せる標本を示せり、而して化學の標本にも無煙火藥の製法の工程を示す種々の標本、人造絹絲、セルロイドの種々

の製品等は好標本なりと思へり、又生徒の實習には酒精燈を用ひ唯教場にはガソリンより瓦斯を製しブレンゼン燈に點火する装置を据附け居れり、石炭ガス程強き熱は生ぜざるも酒精燈よりは強き熱を生ずと言へり、因に此校にては化學は二年生にて無機化學三時間、三年生にて四分の一年間毎週一時間有機化學を課するのみなりと言へり、然し四年生が時間外に來りて實驗せるを見たるに燐灰石中の燐酸の定量分析其他稍高尚なる實驗をなせり。

終りに再び校長室に至り談話したるに校長は頻りに我國師範學校の事を問ひ手帳に控へ却て予が彼れに問ふの暇なからしむる程なりし、校長の此校に就て語りし要領左の如し。

生徒は小學校六年、ゼクンダール、シューレ三年を終りたる十五歳乃至二十歳の男女を入學せしめ四年修業の後小學校教師となす、現今男生百四十名許、女生九十名許あり、學資は月謝を取らざる外一切自辨にて寄宿舎なく皆當市及び近村より汽車等にて通學せり、唯少數の給費生ありて此等のみ義務年限を有す、教師の年俸は四千乃至五千フラン(我千六百乃至二千圓)なり、然し物價

瑞西國師
範學校の
模様

は我國の倍以上なれば餘り好待遇にもあらず、教師は一週十五六乃至二十時間受持ち、校長自らも十時間受持てり、且つ其學識は一般に我國に於けるよりも豊富なるの感あらしめたり。

終りに參觀者名簿に記名せしめ其中にありし横山氏を知るかと問へり、即ち女子高等師範學校の横山氏にして五月十一日即ち予より十日前に同じく此校を訪はれたるなり、然し校長は同氏には面談せざりしと言へり、此校にある事二時間程にて辭し去り再び湖畔に出て小蒸汽にて宿に歸へる、時に夕陽はアルプス連山の白雪を照し、チューリッヒ湖水の細波と相映じて美觀を呈す。

此學校に於て特に著しく感じたのは唱歌及びヴッキオリン或はピアノの教授時間の多き事である、各年級の生徒は自在にヴッキオリン、ピアノの何れかを弾いたのである(第七章初同校課程參照)。

チューリッヒより汽車にて二十分間許りの處にバーデンと云ふ温泉場がある、此處に州立師範學校が設けられてある事を聞いて一日參觀した、獨逸語地

バーデン
州立師範
學校

理、化學の教授殊に化學の教授を熱心に見たが地理の教師が化學を教授して居た丈け餘り上出来ではなかつた。授業後其の教師は予に向つて「私は地理學専門でありながら學校の都合上化學の教授を擔當することになつて居るので教授は素より意の如く出来ません」と云ふた。地方の學校は何國も同様である。參觀の後温泉に一浴し心氣爽快となりたる後、瀛車にてチューリップに歸着せしは夕方なりき。

第三 夏季休業に於ける獨、奧、伊三國の巡遊

余は入學以來終日實驗室にあつて實驗に従事して居るのであるから旅行などは思ひも寄らなかつた併し夏季休業は二ヶ月もあるのだから其期を利用して觀光と學校視察をなさんと決心した。けれども觀光は何時にても出来るが學校視察は何分大學の休暇の時には他の學校も休暇であるから充分には出来ないが幸ひ中等學校は休暇が短くて大學の休暇中に始業したから少數の學校參觀は出来た。而して授業なき所にては各學校長に面會して設備、教授訓練等に關する大體の模様を知る事が出来た。

München
ンヘンユミ

繪畫

九月十日と云へば日本では最早夏期休暇も終りて始業する頃であるが歐洲の大學では未だ休暇の中頃であつて中等學校の方は追々始業すると云ふ時であつた。余は此頃漸く住み馴れしチューリップを出發してテッペリン伯の飛行船飛揚根據地として有名なるボーデン湖を渡り獨逸のバイエルン王國の境に這入つた。列車が渺茫たる牧野の間を縫ふて駛する事四時間にして晩鴉二ツ三ツあなたの森に急ぐ頃ミュンヘン市に到着した。當市に留學して居る余と同船で洋行せる山田太井二氏に迎へられて其等の人と同宿し明くるを待つて市内の觀光に出懸けた。ミュンヘン市は美術に名高き所にて繪畫に關する展覽會、博物館等數知れぬ程多くある。余は繪畫に就ては多くの趣味を持たなかつたのであるが渡歐以來多くの繪畫縱覽によつて多少の趣味を養ふ事が出来たのである。西洋人は一般に幼時より此等の展覽會、博物館等を觀察し家庭に於ては父兄が繪畫につき多くの會話をなすので暗々裡に趣味を養成せらるゝのである。

近頃我國にもミュンヘンビールなるものが賣出されて居るがミュンヘン

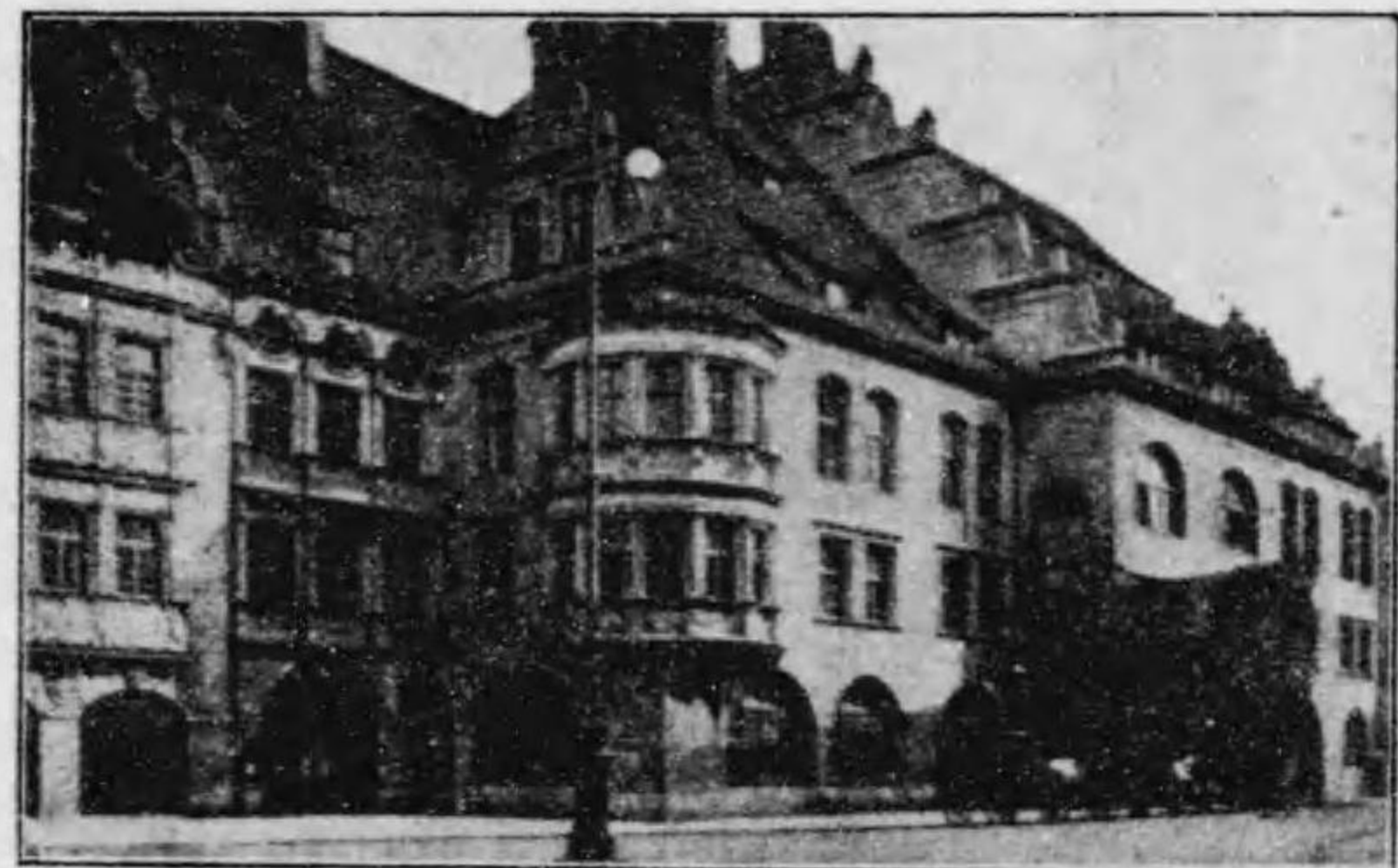
市はビール醸造の本場であつて大なる醸造會社が澤山ある、料理店やビール店は恰かも日本に於けるミルクホールの大仕掛なものの様で至る所に開設

されてある。

最も面白く見物したのはバイエルンの王室でビールを醸造して日本の居酒屋見た様に一般公衆に販賣する事である、親しき友達二人、三人或は五人づゝ其の醸造所に集つて卓子を圍み各半立或は一立位の容器にビールを買ひ來たりてさも樂しげに談話しつゝ飲んで居る、夕方になれば音樂隊が來つて場内に一層の歡興を興ふるのである、此のホーフ、プロイのピア、ホールは日本の百疊敷位はある、此の大廣間に

土方と云はず職人と云はず或は貴族と云はず貴賤貧富の別なく頗る平民的

王室ビール醸造所



（所造釀ルビ室王）スウハイロプフホ

第九十圖

に集合してビールを飲みつゝ愉快に談話して居る。

アカデミイ、デア、ウイッセルンシヤフト（理學研究所）

一日理學研究所を訪れて鑛物、地質、動植物の展覽館を參觀したが獨逸産の鑛物は勿論日本産の標本迄も數多聚集せられてある、就中著しきは日本産の硫黃及び伊豫國市川の輝安鑛の大結晶であつた。

此研究所には物理學化學の實驗室も附屬してあるが此所には世界で有名な理學の大家をして研究に従事せしめ、既に多くの重要な研究報告を世に公にして居る。

ミュンヘン大學の大發明

此の地には大學もありて化學の方には彼の有名なるバイヤー先生が居て有機化學の研究に努められて居る、先生は齡既に七十を超へながら盛んに研鑽に熱中して居る、彼のインデゴールの合成に始めて成効したのは先生である、物理の方にはX光線の發明で其の名も綽々たるレントゲン教授と電送寫眞の發明家なるコルン教授とが居る、予が參觀した時にはコルン教授の助手が寫眞を遠方に送る装置などを説明して呉れたのである。

附近なる高等工業學校實驗室をも參觀したが新築の校舎で萬般の設備が

頗る周到に出来て居た。

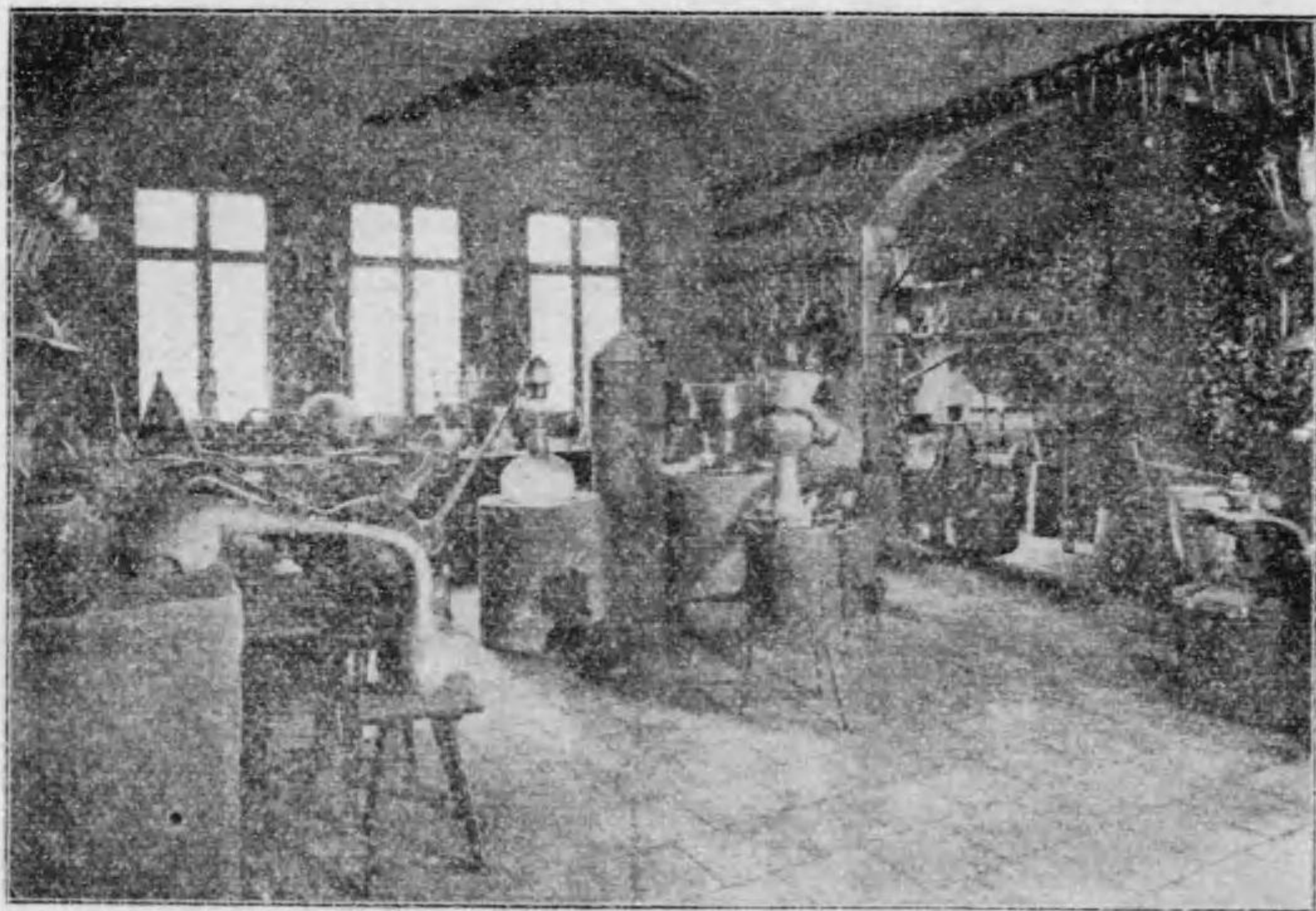
ミュンヘン大學には有名なる化學者リービッヒ先生が居られたので一時は歐洲に於ける化學研究の中心地となつて居た、今日の化學教授法なる者は全く先生の創案である、實際化學の教授に於ては昔は講義實驗等はなかつたのであるが此の先生によつて始めて此主觀教授が案出せられたので其の功績は誠に偉大な者であつた故に此の公園にリービッヒ紀念像は建設せられてあるのである。

Deutsches Museum.
館物博逸獨

ミュンヘン市に有名な獨逸博物館がある理科及び工業に關しては獨逸中に於ても最も完全なる博物館である、礦山のモデルから物理學化學の器械器具を網羅して居る。

何人にも此の館を參觀すれば參觀人自身に備付けの器械を運轉し得るのである、例へば余が參觀した時に一人の婦人が十五、六歳の男兒と其の姉かと思はれる女兒と三人同伴して液體空氣の陳列せる所に行つた、男の子は其處に掲示せる説明書によつてハンドルを廻轉し水銀を液體空氣の入れてあ

第二十圖



ミュンヘン市獨逸博物館内に造る中古金學者の實驗室(蒸溜器など)
ご皆磁器製に現今の如く多き用ひす

る器の中に降し冷却して銀の如き固體に變化せしめ而して其理由を母と姉とに説明するを見た、日本に於て斯くの如き光景を目略する事は到底不可能であるが文明國人は如何にも幸福であると轉た美望に堪へなかつた。

此場を通り過ぐれば有らゆる種類の時計が陳列せられた所もあり、機械器具の種類より耕作用具の種類或は耕作法のモデル等を陳列した所がある、近來の飛行機モデルも列べられてあつた、斯くの如き完全な博物館のあ

る事は國民に理科及び工業に關する知識を普及する上に於て實に絶大の力を有して居ると云ふ事を思ふたのである。

此の博物館は全く王公貴族富豪の金員或は物品の寄附によつて設立維持せられて居るのであつて其壯大なる事は一驚に價する位であるが今や此の建物にして狹隘を告げ増築の設計が既に出來て居た、余は其後伯林に移つてから大學生と同伴して今一回參觀して其の詳細なる觀察を遂げた。

ミュンヘンの墓地

西洋の墓地は頗る清潔に崇高に出來て居て然かも公開してあるから見物する物の一つになつて居る、貴族及び富豪等の墓地は實に立派な石を以て壘み間には基督の像や死者の像を墓石の上に安置してある。

余がミュンヘンの墓地を巡視する内に計らずもリービッヒ先生の墓前に出でたが其墓碑は頗る質素閑雅である、先生の如き千古不朽の名を竹帛に止むるの士は凡人の夫れの如く墓碑を飾るの必要なきを感じたのである。

ミュンヘンと云ふ所は天主教の盛んな地であるが葬送の前には死人に美麗なる洋服を着せて硝子張りの箱に收め而して其箱に死者の姓名、年齢等を

記して公衆の縦覽に供するのである、蓋し知己親戚に見せしめんとこの意志ならんも習俗の異なるを見て寧ろ奇異の感に打たれたのである。

死人を晒らす事につき思ひ出されるのは伯林に於て予の下宿の近くに行き倒れ人を公衆に見せる家がありしことである、行き倒れ人があれば直に其旨を揭示し之れを其の家に容れて公衆に縦覽せしめ其の何某なるかを判明せしむるのである、予も一二回物數寄にも行つて見た。

ミュンヘンに於ける學校參觀

(1) ミュンヘン市立實科中學 Königliche Realgymnasium in München

中學の第四學年より第九學年まで六學級を有し、化學及び鑛物は第八學年(生徒年齢十八九歳)に毎週二時間、第九學年に三時間あり、物理は終りの三學年に二時間づゝあつた併し實驗は全くなかつた、そこで余は實驗の利を擔當教師に説いたが教師は經費なきためと辯解して居た。

化學の教科書は Lipp, Lehrbuch der Chemie u. Mineralogie であつた。

(2) ミュンヘン、ルートボルド、クライス實科學校 Luitpold-Kreisrealschule, München.

六學年の課程で化學及び鑛物は終りの二年間三時間づゝ課し、物理は終り

の三年間で合計七時間あつた。

化學鑛物教科書は「Die」の書(同上)であつた。

(3) ウイルヘルム文科中學

文科中學では特別に化學の教授時間を設けてないので只博物科の中の鑛物を教授する際に補助的に化學の大意を教授するのみであるから勿論實驗等はないのであるが數學及び物理は、かなり多くの教授時間を設けて教授して居る。

獨逸の内でも北部の諸州に於ては文科中學にもかなり詳細に化學を教授して居るけれども南部地方は概して保守的で文科中學に於ては希臘語や羅典語等の古語を主として教授して居るので化學等には重きを置いて居ないのである。

獨逸の境を脱して奧洪國の首府なる維納に着いた、曩に東京工科大学教授鳴居武氏が此地に留學せられた時下宿したるシュルマンと云ふ人の許に止宿した、シュルマン氏の子息は維納の圖版工業學校を卒業して同校の助手を

Wien
ナンイウ

して居たが日本に來て就職せんと希望を有せるだけ日本人には到つて親切であつた、余が滞在中は余を諸所に案内して呉れた、鳴居氏に教へられて日本の假名文字を綴り得たが別後假名文にて余に一書を與へたのである、外人にして暫時の學習にて假名文の手紙を書き得るは驚くべき巧手である。

ウインナ市に四五日滞在して居る間に高等工業學校及び貴族中學校を見たが貴族中學校は恰かも休暇中で授業の參觀は出来なかつたが設備は十分に觀る事が出来た、理科の標本機械は流石貴族の學校丈けつあて非常に整頓して居た。

翌日實科中學を訪ふた、休暇中であつたが折よくも物理の教師居合はせて非常に丁寧な種々の物理機械を説明して呉れた、物理の機械器具は中學校の設備としては稀れに見る處であつて教室には電氣を引き黒板の傍には電流計やボルト計等が備へられてある、其の先生はドクトル某であつて學校の内でも古參の人であつた、化學の教師は不在であつたけれども地下室なる化學實驗室を參觀したが生徒にも實驗を課する様に設備してあつた。

此の奥洪國立實科學校 *St. Franz-Realschule* は七學年の實科學校であつて化學は上級三年間にて合計八時間外に實習が一ヶ年二時間あり、物理の時間は終りの五年間にて時間數は不詳なれど十時間以上なるが如し

化學の教科書は IV 級 *Rippel: Grundzüge der Chemie u. Mineralogie.*

V 級 *Mitteregger: Lehrbuch der Chemie. I. Theil, Anorg. Chemie.*

VI 級 *Hemmelmayr: Lehrbuch der organischen Chemie.*

維納大學にも行つて彼のキノリンのスクラウプ合成法を以て有名なるスクラウプ教授に面會したが先生は日本人とは初見と見へて非常の興味を以て余を歓迎せられた、プロフササーと記した余の名刺を見て「君は非常に若い、最早孫すら數人もある」と云はれた余が歐州滞在中は此大學に在つて學生を熱心に指導せられたが先年長逝せられたのは一面識の余には殊に遺憾に思ふ所である、此の時余は先生にスクラウプ合成法に就て語り出でしに先生は頗る謙遜されて「あれは最早今日は歴史的のものとなつた」と云はれた、先生に

ウインナ
大學にス
クラウプ
教授と語
る

導かれて實驗室を參觀したが一般の機械は餘程古くなつて居り併し電氣燃焼爐などの新しき設備もあつた。

維納に居る内に美術歴史博物館、理科博物館を見たが美術歴史博物館は巨多の美術品を陳列してあつたが頗る壯大な建物である。其の他王室の寶物藏を見た前帝が即位式に着けられたとて金銀珠玉もて目眩するばかりに飾られたる衣冠があつた。

王室附きの會堂にも行つて見たが會堂の地下室には王室の墓がある、其の墓も公衆に觀覽せしむる事になつて居る、石棺の中に死體が奉藏せられてあるが參觀すれば委しく各王の墓及事蹟等を説明して聞かするのである。

東京の遊就館に相應する武器博物館には古今の武器を陳列し且つ古來の戰爭の油繪殊に奥國の勝利を得た戦は自慢的に描寫されてあつた。

維納に一週間を過ごして次ぎはブダペスト市に向つた。

此市は匈牙利の首府であつて新式の立派な市街である、此地では日本人が非常に優待せられる其の故は自分等は蒙古人種であるから日本人と同種族

Budapest.
トスベダブ

であるこの信念に基くのであるのみならず露國を敵視して居る内に日露の役に於て日本が大勝を得て自分等の仇敵を懲らして呉れたとの意であつて非常に日本人を歓迎するのである。

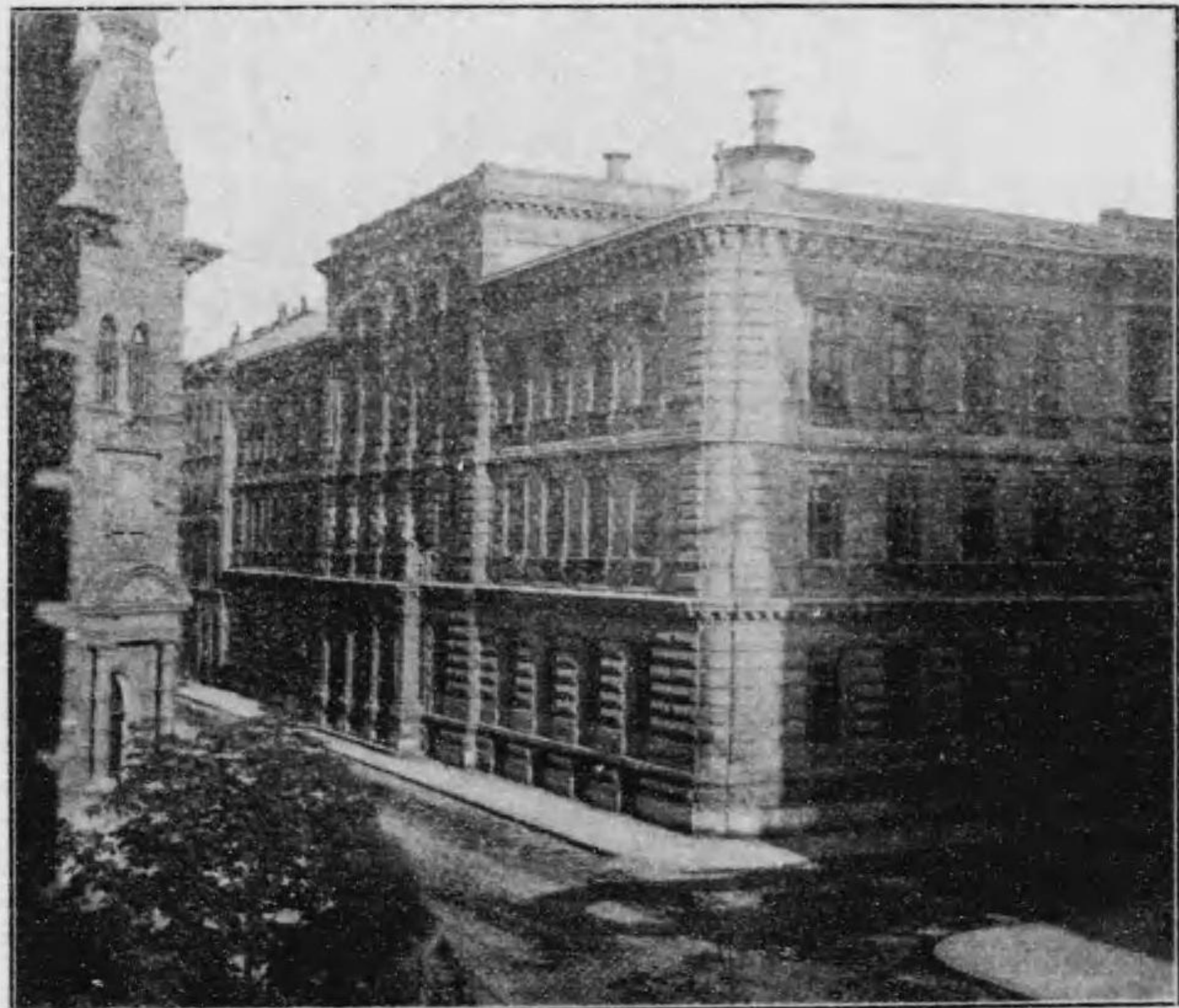
余はマルコウツァ街にある實科中學を訪ふた。すると多くの教師が先きを争ふて來たり各教室に余を案内して種々の機械標本等を觀察せしめた。生徒も非常に喜んで休憩時間には余の側に來たりて萬歳々々と歡呼するのである。圖畫の一教師は今日は晝飯として匈牙利固有の料理を呈すべければ我宿に御光來あれと余を案内した正午招きに應じて其宿に行けば此の人は未だ獨身であるが他の二人の同宿の教師と外來の二人の教師と合計五人で余を接待した。他の外國に於ても頗る歓迎せられたけれども斯くの如く親切に待遇せられたことは未曾有であつた。

其の後同校の物理や化學を參觀したけれども匈牙利語に通せなかつた爲めに實驗は了解したけれども教師の講義は不明であつた。

次に此の中學校に隣接して建てられてあつた實業學校を參觀したが白髮

ブダペスト
ト中學校
にて歓迎
せらる

圖 一 十 二 第



(所るたれらへ唱を歳萬が予)學中科實の市トスバダブ國リリガンハ

の老校長出で來たつて懇ろに余を案内して化學教室や實驗室を觀覽せしめた。此學校では三四年級に於て一週二時間づゝ簡易なる物理を課し、五六年級に一週三時間宛化學を課して、七八年級に又物理を一週五時間宛課してあつた。かく先づ簡易なる物理次に化學次に物理の順序は實に理科教授の理想的の順序である。化學は矢張り有機化學及び實驗を課して居る。教科書は其學校の教師

の編纂した教科書で可なり大なる無機有機の二冊の本であつた而して此の學校では盛んに粘土細工や石膏細工などを生徒に課してあつた校長に余は故國に於て教員養成所に奉職して居るものなる事を告げたるに校長は然らば教員養成所が此の附近にあるから參觀せられよと勧めたけれども最早餘目もなかつたから遂に參觀しなかつたが模様を聞くに其の教員養成所の生徒は大學で專攻學科の講義を聽いて終業後寄宿舎に歸り舎に於て教育に關する講義を聽く事になつて居た。

又當地の宗教中學を參觀したが圖書の教師と物理の教師が懇に機械標本などを觀せて説明の勞を惜まなかつた。特に物理の先生は幻燈器械で自國の名所古跡等の光景を寫出して觀せて呉れた。此の先生は曩に日本の京都帝國大學の村岡博士の螢に關する研究論文を匈牙利語に譯して出版したと語つて居た。

化學の教師は折悪しくも留守中で遂に逢はなかつたが同校職員の語る所に依れば餘程老人で卓越した人ではない様な話であつた。

Fiume.
メウイフ

ブタベストに於ては何地に於ても非常の歡待を受けて愉快であつたが匈牙利語に通せずして談話が充分出來なかつたのは甚だ遺憾に感じたのである。

麗はしくも仁慈に富めるブタベストの地に無限の感謝を拂ひつゝ、此地を辭して汽車にて南部地方に下り奥洪國の軍港たるフィウメ港に到着した當港は日本の横須賀にも比すべき要害の港である。實は此處より船にて伊太利に渡航すべき心算であつたのであるけれども便船の都合上豫定を變更して流車で北方を迂回してヴェニスに行く事にした。乗車迄充分の時間があつたから此の地の附近を遊覽した。

先づ小舟を馳せてアパチエに行つた。此の地は日本の江ノ島に似て風光に富める保養場である。此地にも日本品商店があつて日本の貝細工、扇子、人形などを賣つてあつたので非常に懐かしく感じた。浴場があつたから余は海水浴をなして晝食を終へフィウメに歸つた。

フィウメに一泊して汽車で伊太利のヴェニス市に行つた。當市は餘程歐州

Venezia.
スニエツ

第二十圖



(よ見なるす來往のラドンゴ)河運大の市スニエグ國イリタイ

の近頃の町とは異なつて居て道路は非常に狹隘であるが廣い川が縦横に通じて居るから之れを道路に替へゴンドラと云ふ舟で往來して居るのである、余もゴンドラに乗つて旅館に着いたが小蒸汽船に比すれば人力で漕ぐのであるから速力は非常に遅いが風雅な者である。

此の地には油繪研究の爲め留學せる寺崎氏が居たので觀光の便宜を得た、同君の案内で美術學校の繪畫陳列場を見て専門家の説明を聞いて愉快であつた、讀者の知れる如く伊太利は美術の進歩せる國であるが此のヴェニスは特に一派の油繪が發達して居ることである。

Florence.
スフレロフ

當市の河岸附近の家は川の中から礎柱を建てて建築せられてあるがヴェニス商人の名は昔の夢で現今商況は全く不振である。

ヴェニスに一夜を過ごして翌日汽車はフロレンス市に走り着いた停車場には旅館の番頭が蟻集して居る、余は伊太利語に通じないから成るべく便宜の旅館にと思つて居る中にホテル、ジャポンの番頭が来て「私は日本旅館から来た者である御出で被下い」と奨めた、日本語も通じ設備も日本式の旅館ならんと思つて奨むるまゝに隨行して見たが思ひきや日本語の通せないのみか英語も獨語も通じない、全く日本でふ流行語を名前に附けたのであつた、食事の注文には殊に困つたが幸にも伊太利語と英語の對譯字書を携へて居たから之れによつて辛じて食事を注文し命を繋いだのである。

當市では種々の博物館、大學の鑛物博物館などを見たが學校の參觀は出来なかつた、最も有名なのは繪畫の展覽會場である昔から美術の中心地で繪畫彫刻が非常に多い、種々參觀した内で世界各國の名高い畫家の肖像が掲げられてあつたけれども日本人の畫家の肖像が一枚もなかつたのは頗る心細く

感じた。

此の地では言語は不通案内者はなし非常に不自由を覺へた、偶々獨逸語に明かるき商人の道を教へて呉れた時には恰も地獄の里で佛に邂逅した様な快感と感謝の情を禁ずる事は出来なかつたのである。

フロレンヌ市に於て言語不通で少からぬ不便否な苦痛を感じたから羅馬では獨逸旅館に行つた主人から女中に到るまで獨逸語を語つたから始めて生き上つた様な感じがした。

早速日本大使館を訪ひ參觀し得べき學校其他觀覽すべき名所を示され、た先づ羅馬法王の寺院サントピエトルに詣で序でにコロシウムとて昔の宏大なる演武場を參觀したが驚くべし直徑五六尺もある大石もて疊んだ壘の直中で演武闘牛などする事になつて居る併し今は全く廢頽して居る、見物して居る内に雨がザア／＼降り出した傘を携へて居なかつたので一人此の殺氣満みたる壯大な建物の中に幽囚の人となつて降り止むを待つたが非常に物凄ごき感があつた。

Rome.
マロ

ローマ市の
學校參觀

羅馬の中等程度の學校は宗教的の學校が多く、僧侶にならんとする人が入學して居る、一日宗教學校を參觀したが六十歳以上の僧侶なる老校長が出て來つて余を案内して呉れたが高い二階の階段を昇るのが非常に苦しげに見へたので余は甚だ氣の毒に感じた、物理學化學の教室に導かれて化學の教師に面會した、此教師は獨逸に遊學した事のある人であつたから久し振りに獨逸語で説明を聞いた、宗教學校にも似合はず物理學化學は可なりな程度に教授してあつた様に思はれた。

次に女子師範學校に行つて女の書記に面會したが此の人は佛語に通じて居た余は佛語はよくは分からなかつたが併し片言交りに學校の模様を質問した校長に面會せんと思ひ上校の時間を問ふたが校長はイタリヤ語の外何語も話さぬとの事であつたから直に辭し去つた、最初廊下で生徒と會つたとき英語で校長の室を問ふた處が英語を學びつゝあつたと見へて片言英語で返答した。

次ぎは大學の參觀をなした、化學室を訪れたが助手は獨逸語で親切に案内

して呉れた、當校にはカニザロと云ふ有名な先生が居る助手も面會を欲する
なら取り次がんと云はれたけれども先生は非常の老人であつたから遠慮し
て面談しなかつた、此の人は化學の歴史上忘る可からざる人であるが惜むべ
し其後三年にして長逝せられたのである。

次ぎはネーブルスを訪れる豫定であつたのであるけれども一人旅で然も
言語不通で疲れも甚しかつたから思ひ止まつた、余は此の羅馬を辭じて歸路
に上り停車場に出た時に一つの赤毛布を演じたのである。そは切符を買はん
と思ふて一の金貨を差出したが事務員は要求する切符は渡さずして何やら
頻りに話しながら差出した金貨をつき返した併し余は全く其意を解する事
は出来なかつた傍の人に理由を聞かんとすれども出發時間の切迫せし事
て耳をも貸さず見向きもしない余は少なからず當惑した上句若しも金貨に故
障があること云ふのであるまいかと別の金貨を差出したるに事務員先生打つ
て變つて機嫌なく切符を渡して呉れたので金貨を疑ふたのである事が分か
つた後問ひ合せて見るに伊太利では金貨の贋造が非常に流行し然かも商人

ローマ停
車場にて
の困窮

イタリ
と日本と
の類似の
點

Milan.
ミラノ

は其の贋造金貨を何氣なき外國人に渡して受取る時にはよく／＼吟味して
贋造物を受取らぬ様にする狡猾手段を講じて居るとの事であつた、右の金貨
は他の所にては無事に通用したので贋造ではなかつた。

伊太利は日本の様に氣候は概して温暖であるが市街は不潔である便所の
設備が到つて少なく横町には立小便をするもの多く道路に馬糞などが澤山
轉がつて居る料理店の料理の中には蠅を煮込んである等恐らくは歐洲中最
も不潔の地であらうと思ふ、今一つ日本に似た所は商人の賣買である、大方一
品に就て二三割位の掛け直を云ふのであるから物を購ふのに非常に不安心
である。

羅馬から汽車に乗じて北部に向ひミランに下車した此處に一泊して有名
なるチオモと云ふ寺院を始めとして舊城趾及公園等を見物し序でに電車を
利用して墓地見物を試みた、ジェノアにも有名な墓地はあるが當地の墓地も亦
贅澤なものが多い、伊太利は大理石の名産地であるから石碑は巨大なる大理
石を建てられてある、日本にては墓地とし云へば直に陰濕幽靈を連想する程

であるがミランに於ては寺院も墓地も全く公園の如く快活壯大であつた。ミランは瑞西に近接して居るから獨逸語が通るので大層旅行に便利であつた。

翌日ミランを發車し坦々たるミラン平原を疾走して瑞西と伊太利の國境に達した此處に税關があつて検査を受けねば通過が出来ないので餘儀なく下車し検査を受けて無事合格はしたが茲に一つの失策は演せられたのである。

西洋人は汽車の中でも脱帽する事はないが日本人は概ね脱帽の習慣がある殊に予は帽子を厭ひ乗車するとき直に脱ぎて網棚に置くが常である所が伊太利の汽車を下るとき帽子を車内に遺忘したまゝ瑞西の汽車に乗り替へたがふと思ひ出せし時には汽車は既に出發した電話で車掌に探索せしめたけれども最早其の場になかつたのである。瑞西國に這入つて間もなくベリンツオナ市に着いた余がチューリッヒに於ける同宿の友法科大學生ストッフエル氏は當市の人にて豫て訪問すべく約束して居たから此の驛に下車した友人の

ふ 帽子を失

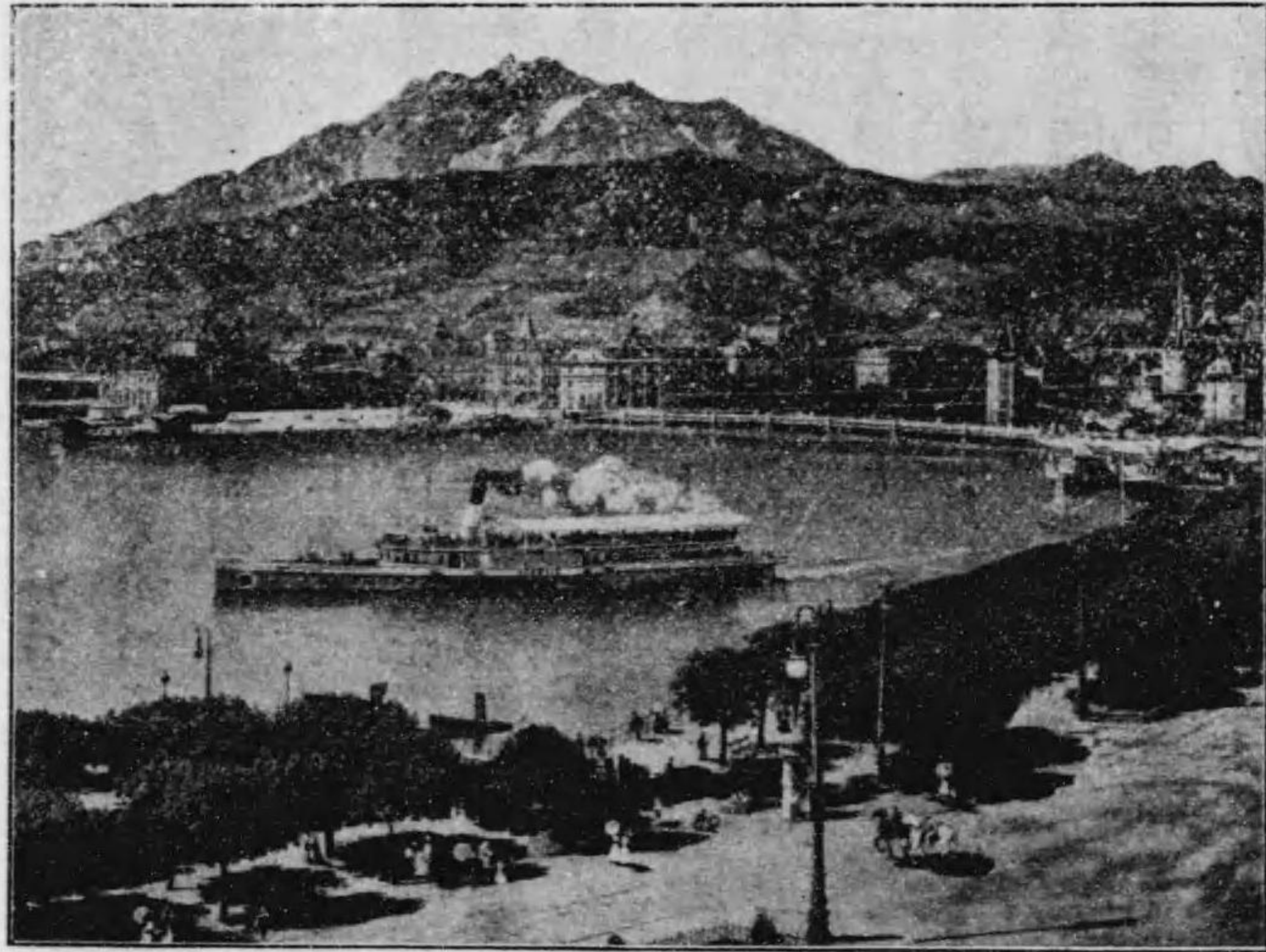
Bellinzona.
ナオツンリベ

宅は驛から二十町許り隔たつて居る、其間に帽子を賣る商店がなかつたので無帽で歩行したのであるが珍奇な人かなと云はん許りに多くの西洋人が眺めて居たので大に不體裁であつた。

ベリンツオナの町に着いて漸く帽子を購ひ友人の家を訪ふた此の人の父は富豪で銀行家で猶は代議士であるが非常に喜んで歡待した、此の附近に商業學校がある事を聞いたから友人に案内せられて參觀して見ると商品鑒定上の必要からして最新の理化學器械の設備は殆んど完全であつた、化學の分析室もあつた友人ストッフエルは此商業學校を卒業した後チューリッヒ法科大學へ入學して居るのである、此人の家に宿泊する事となり夜になると家の若かい妹二人がピアノを弾じ或は日本のチューンキナ節を歌ひ且舞ふたのであるが旅行の疲れは是れによつて慰せられたのである、一夜を面白く明かして翌日は其の邊の古城趾を見舞つたが頗る風光明媚の勝地であつた、午後友人に馬車で送られて停車場に出で再會を期して別れを告げ名にし負ふアルプス山中の世界最長と呼ぶるサンゴタルドのトンネルを通過してチューリッヒな

瑞西國に
てチューン
キナ節を
聞く

圖 三 十 二 第



(山スツラヒの米千二はるゆ登に後)市ンルエチル

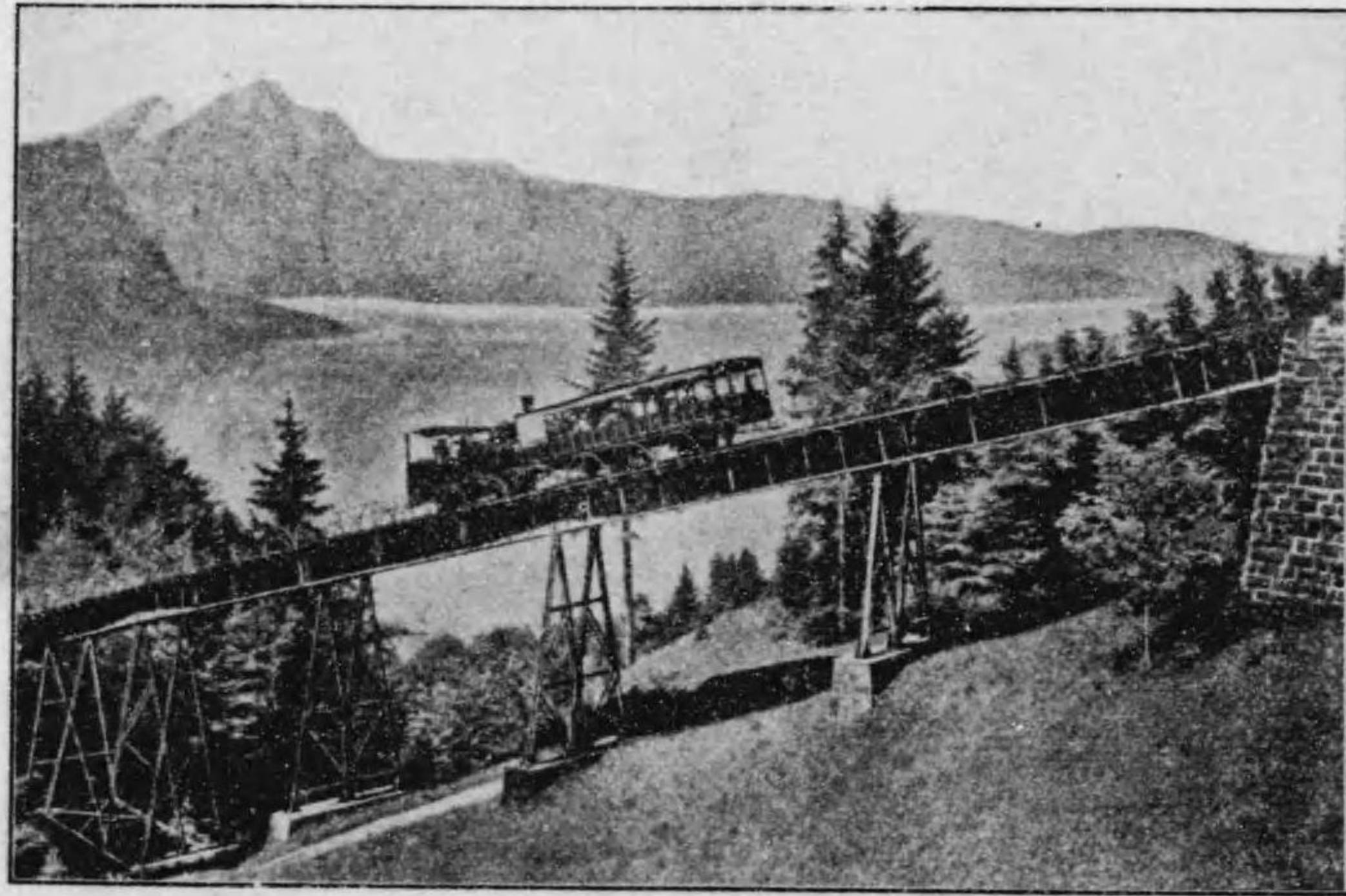
る我が宿に着いた斯くの如くして南部歐洲の遊歴に三十日を消したのである。

第四、瑞西に於ける山登り

音に名高き山紫水明の瑞西國に一年有餘を過すことなれば義理にも少しは景勝を探らさばと思ひつゝも學窓の忙しく障り多くて登山の好時期たる夏もいつしか過ぎ去りて初冬とはなりぬ、最早猶豫すべきにあらずと明治四十年十二月二十三日早起チューリッヒの

Luzern
ンルエチル

圖 四 十 二 第

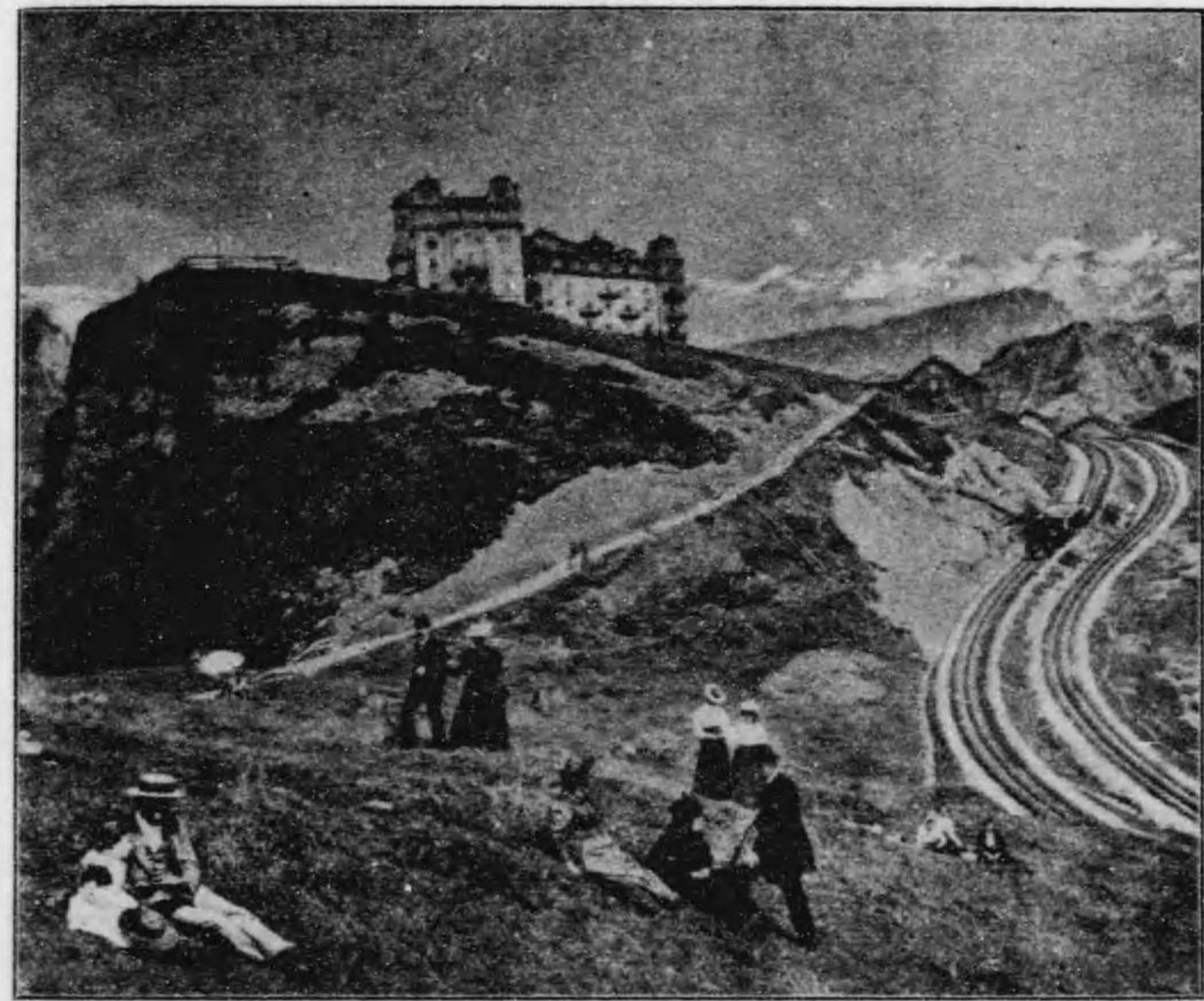


道 鐵 山 登 | ギ ツ リ

宿を出て汽車にてルチェルンに行き華麗なる市中を一覽し十一時頃小蒸氣船に乗じてルチェルン湖上を馳す、此湖は海面上千四百餘尺の高地にあり瑞西國の四州に跨るが故に獨逸語にては「フィアール」ワールドステッターゼー(四森州湖)と稱す其形は略十字形をなし、其景色の雄大多様なること及び其湖畔は實に詩聖シルレルが其傑作ウイリアム、テルの舞臺となしたることは廣く世界各國の遊客を誘引して居る、船は清澄鏡の如き湖面を破りて進む願ればルチェルン市中の寺塔は高く

Rigi
リッギ

圖 五 十 二 第



テホはるたし望遠の亭予(脈山スプリアはるゆ見く白にか途)頂山リッギ
りな地臺の方左のル

一〇六
聳へ壯大なるホテルは湖畔に旗を翻へす更に前方を眺めば左にリッギ山聳へ右にピラツス山既に雪を載き壯觀言はん方なし少時にして船はグッナウなる一小村に着し予は此所に上陸しリッギ鐵道にてリッギに登山せんとす此鐵道は千八百七十年歐洲に於ける最初の齒車式鐵道として設けられたるもの長さ四

リッギ
山頂の眺
望

哩半最大傾斜は四分の一平均速度は毎時四乃至六哩なれば一時間餘にして頂上に達す此時は既に登山時期を過ぎたれば乗客も少く途中の保養場所在地カルトバードまでは二十餘名の同乗者ありしも夫より頂上のリッギトケルムまでは新婚旅行らしき男女世界漫遊者なる佛人と予と四人のみであつた午後一時頂上に着すれば既に少しの雪は地上を被ひ寒氣稍強し新婚者は直にホテルに入り暖を取りたれど予は佛人と共に一段高き臺地海拔約六千尺に登りベデカ一案内書と對照して遙かに雪を頂けるアルプス連山さては眼下に湛へたる多くの湖水を一々指摘し其絶景を賞す側の佛人亦双眼鏡を出して頻に遠望す既にして予等兩人の間に奇怪なる會話は生まれりそは此人佛人の常として英獨語を解せず予は佛語に通せず然れども予が佛語の數語を知れると同程度に彼は英語を知れるより覺束なくも意思疏通の道を求め互に彼所は何地彼山は何と語り合ひ或は予の案内書と彼の双眼鏡と有無相通じ共に眺望に耽けりたり西北方の直下にキュスナハトの市街あり夫より程近くテル堂と稱する小堂あり之れ虐主ゲスラーがウァリアムテルに射

St. Moritz
ツツリモンサ

圖 六 十 二 第



リベす雪るけ於にツツリモ、ンサ

殺せられたりと傳説せらるゝ所にして
今尙テルを祠れるなり、恰も我國の宗五
郎神社の如し。

盡きの眺めを惜みつゝ午後四時同じ
鐵道にて下山し船にてルチュルン市に
歸り夕食を認め九時發の汽車にてチュ
ーリッヒの古巢に歸る。

明治四十年十二月二十八日午前九時
發の列車にてサン、モリッツに向ふ、汽車
はチューリッヒ湖及び他の湖水の畔を
縫ひライン河の上流に沿ふて上り、正午
頃キュールに着午食をなし次でチュシス
よりはアルブラ鐵道にて昇る、此鐵道は
僅々五十五哩半の距離なれど急勾配の

山登りなれば工事のために四年半の日子と約一千万圓の工費を要し、約四
哩の大隧道の外三十九個の小隧道を通過し山腹を廻り、て多くのループ
を書くも猶最大の勾配は百分の三半に達し、登山鐵道中最も興味あるものな
り、午後四時頂點サン、モリッツ村に着し一ホテルに投宿す、抑サンモリッツは
海拔六千尺の高地にあり、夏期には氣候温和なるが上に炭酸及びアルカリ鹽
類を多く含有せる礦泉あるが爲めに保養遊覽客夥しく、冬期には雪すべり氷
滑りに便なるが故に又多くの遊客あり、殊に英國人は態々海を渡りて來遊し
一ヶ月餘を此所に費すもの多し、予が行きし前年は澳洪國皇太子同妃兩殿下
同道にて遊ばれ、同年には獨逸國皇太子妃殿下は此所にそ棧乗を稽古せられ
たり、予も山上の風景、扱ては冬期の遊戯を見るべく且つ新年休暇を此所にて
過ごさんと欲して來遊せしも積雪數尺全く銀世界にして寒氣は酷烈、加ふる
に徒然に苦しみたれば雪滑りを少し試み或は散歩し或は男女の活潑に運動
せるを傍觀し二日間を費したるのみにて三十一日には既に同一の線路を過
ぎてチューリッヒの下宿に歸り此所にて外遊最初の年を送りたり。

第五、瑞西より獨逸に轉學の途中西部獨逸の旅

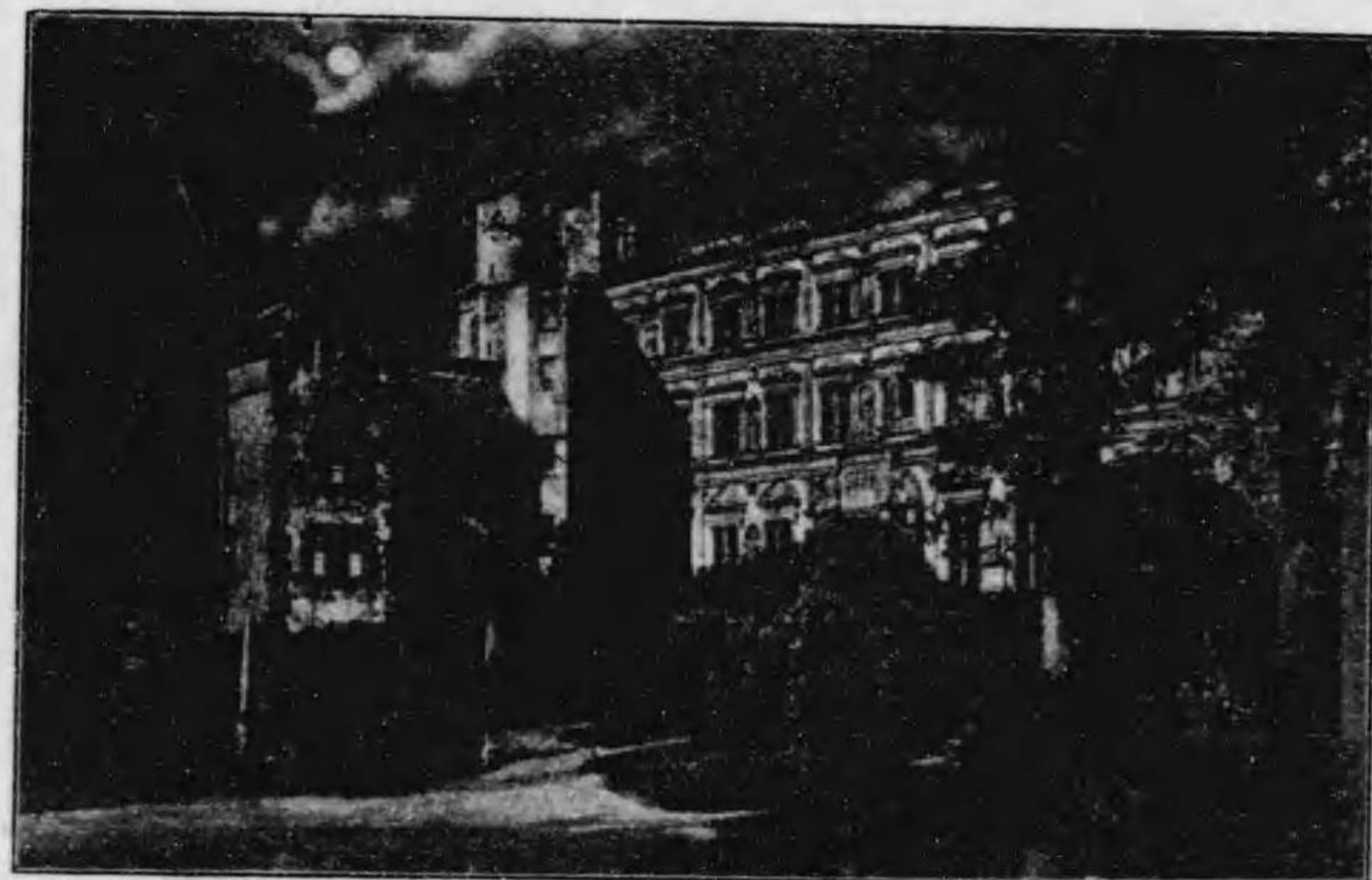
Basel
ルゼーバ

チューリッヒに一ヶ年留學の後即ち明治四十年の四月一日といふに住み慣れしチューリッヒを見捨て、瑞西の主府なるバーゼルに行き此の地に留學して居る一醫學士の下宿を訪ひ一泊する事にした。夕方までにはまだ多くの時間を餘して居たから市中の實科中學校を訪れた。試験中であつたから地理と物理の試験を參觀したが此の試験も前に述べたる如く日本の試験法とは大に異りて生徒の父兄を集めた中で教師が全生徒に輪番に既授の事項を發問しつゝあつた。

其の後博物館を見物して其の翌日此の市を去りて獨逸の境に進み恰も正午の鐘の音の響く頃ハイデルベルグに走り着いた。當地にても在留の平山醫學士、上杉法學士等の下宿を訪ひ諸氏に案内せられて日本人の定宿なる宿屋に宿を定めた。夕刻にもなると同じき友の案内にて市内の見物をなしたが僅かに人口五萬を有する小市にはあれど獨逸最古の大學の所在地なると古城趾の遺跡あるとによりて有名な市であつて日本人なども古くから留學する

Heiderbørg
ゲルベルテイハ

第 二 十 七 圖



城古ゲルベルテイハるたれさ照に月明

所である。

翌日は醫學士某氏の先導で同氏の研究して居る大學の生理化學の實驗室を參觀した。此の大學には生理化學の大家コッセル云ふ人が居る。其の故を以て日本の人も生理化學の研究に萬里を遠しとせずして來て居るのである。今も四五人の留學生があつて盛んに蛋白質の研究に努力して居た。此の時コッセル先生は本校の大學總長に任命せられ研究の傍ら事務をも執つて居つた。

次に純正化學の實驗室を視察したが有機化學の方には有名なクルチュース氏、理論化學の方にはブレヂッヒ氏が居

が余も後の忘れがたみにと一組購ふて別れた。

夜に入ると日本から染料の研究に來て居た名古屋の某氏の内に行つた、當市の附近にカツセラ染料會社といふ大なる製造所があるので此の人はフランクフルトに止宿して毎日其の製造所に研究に行くのである、此の下宿は初等中學の英語の教師の内、其主婦が内職に下宿業を營んで居るのである、余は此の主婦と親しく會談したが其の話す所によれば良人が英語の教師だから去年も英語研究のため家族同伴で市から英國に派遣せられたが今年も差遣される事になつて居るとの事であつた。

翌日は當地の實科中學を參觀した其規定左の如し、

フランクフルト實科中學

Realgymnasium in Frankfurt a/Main

九年の中學に三年の豫科即ち小學科を附屬せり、化學は最後の三年間毎週二時間即ち合計六時間の講義と最後の二年間一時間づゝの實驗をなす、尤も實驗には一級を二組となし同時に一組は化學、一組は物理の實驗をなす故各生徒は一年間化學實驗をなすのみ、物理は最後の四年間合計十一時間の講義

Leipzig
ヒツチブイラ

と化學と同様なる實習をなす(數學は合計四十二時間)

物理を化學より一ヶ年程早く始むるは何れの學校も同様なるが如し、此校の化學受持教師は動物學の専門家にて兩方を受持てり。

此の外當市には市立の理化學研究所あり、又スパイエルと云ふ一私人の設立せるスパイエルハウスといふのがある、此のハウスに於ては設立者がエーデルリッヒ教授と云ふ有名な化學者をして化學療法の研究をなさしめて居る、我國傳染病研究所技師秦佐八郎氏が研究に行きて彼の有名なる六〇六號と云ふ藥品を發明したのも此所である、此の日の午後フランクフルト市を發してライプチヒ市に向ひ夕刻恙なく着いた。

ライプチヒにも日本人が十人以上留學して居た、漢學専門の鹽谷文學士が當地大學の漢學にて有名な先生の所に研究に來て居るし、醫學士も澤山留學して居た、就中興味ある事には日本の豊川稻荷の僧侶が小僧を連れて宗教の研究に來て居た、此等十餘人の人と會合して快談をなし、序でに市内の案内を受けて參觀した。

當市は可なり大なる市で觀覽すべき所も澤山ある、五泊して大體見物し盡したが其主なるものは次の通りである。

世界に稀なる圖書博物館

先づ圖書博物館を訪ふた、此の市は有名な書籍出版業の中心地であるから書店が澤山ある、是れが此の博物館の設立せられた所以であつて古今東西の書籍が蒐集せられてあるが其の他最近の繪畫模樣、廣告用の繪、書物の表装の雛形等、苟も出版物に關する物は陳列せられてあるのである。

次ぎには日本の名譽領事モスレー氏の宅を訪問して學校參觀の紹介狀を貰ひ、同領事の子息の在學して居るトーマス、シユールと云ふ文科中學に參觀方を勧められたから鹽谷文學士と同伴して同校を參觀したが恰も獨逸語の試験中であつた、試験の方法は上來屢々記述した方法と全く同様であつた、歸途實科學校を訪ふて化學の實驗場を見たが講義室の側に實驗臺を列べて其處で生徒に實驗を練習せしむる事にしてあつた、此學校では休憩時に生徒が廊下で歩行しながら、甚だしきは授業時間中にパンを食つて居るのである、教師も廊下を歩きながら辨當を食べて居るのを見た、蓋し食事に定つた時刻が

ないからである。

ライブチツヒ近郊ミルチツツにある香油製造會社

ライブチツヒから汽車で半時間程行けばミルチツツに着く、此所には香油製造所ミンメル、コンパニーがある、非常に大なる會社で化學者も澤山居て研究に従事して居る、其の内の一人の化學者が親切に余を案内して充分參觀した、原料は種々の木材を粉末にし或は植物の花の中から香料になるものをアルコール或は水で浸出して製して居た、併し今日では斯くの如き天然物のみによらずして人工的に製造するのである、即ち天然物を分析して其の成分を定め其の成分の如く合成するのである。

西洋の建物に多く同形式にて見分け難き一例

ライブチツヒ市に滞在中最も困つたのは此處に日本人が古くから下宿し來つた下宿屋がある、前に下宿した事のある友人から此の下宿屋に日本製の絹物を送達すべく依託されて居たので持參して手渡したが、其時主婦は次の日曜日に友人二、三名と余とに對して午食を饗せんことを申出した、予は一度行つたのであるから大丈夫と思ひ下宿の番地書をも持たす唯一人にて出懸けた、併し其近邊の建物が皆同じ形式であるから一時間餘を費やして探がせ

ども見出す事は出来ない、サア招待された十二時の時刻は来た、下宿屋の方では鶴首して余の來着を待つて居る、心は矢竹にはやれども中々に見當るべくもなし、さりどて歸る譯には行かず當惑してウロ／＼せし所へ幸ひ其下宿へ午食に行く一獨逸婦人が認めて夫れと報せしゆへ一友人が迎へに來たので助かつたのである。

當地の大學には理論化學の大家オストワルド先生が居られたが今は退職せられて居る、有機化學の方にはハンチと云ふ先生が居られる、ハンチの實驗室を參觀したが丁度其の講堂を建て替へて居た、當日は生憎休日であつたので生徒の實驗の模様を視察する事は出来なかつた。

當市に五日間滞在して次はドレスデンに移つた。

ドレスデンは獨逸の中のサクソニー王國の首府である、ライプツヒヒ市は此王國の商業の中心地で當市は政治の中心地である、小市街ではあるが其の家屋の整頓して建築せられ華麗なる事は歐洲中にも少ない位である、一泊して繪畫博物館を參觀した、世界中で最も名高い古今の名畫を網羅したる博物館

Dresden
ンデスレド

第 二 十 九 圖



ドレスデン博物館に於けるラファエルの作
マドンナの一部份

である、就中有名なのはラファエルの手になれる耶蘇の母マドンナの畫像である、之れこそは世界一品で幾萬圓を以ても購ふ事は到底出来ない、此繪丈けは特別室に掲げられてある、巡覽しつゝある間に陳列してあつた有名な畫を模寫しつゝあつた一人の畫家が側に來つて頻りに日本の繪畫は線を使つて描いて居るので西歐の油繪に比すれば遙かに美術的である、

其の他數學物理博物館、鑛物地質博物館及び動物博物館等があつて何れも

參觀したが數學物理博物館にはガリレオの發明した望遠鏡或は昔の日時計等珍奇の器械類が非常に多く蒐集せられてある、動物館の方には鳥の剝製其の巢卵及雛の標本などを陳列してあり誠に美麗であつた。

學校はテクニツシエ、ホッホシユール即ち高等工業學校があつて常に數名の日本留學生の研究して居る所があるけれども時間の都合悪しく乍遺憾參觀しなかつた、此の地に一泊して後伯林に向ふて出發した。

第三章 獨逸國伯林市滞在

第一、伯林大學入學

予は未だ瑞西にありしとき伯林大學の化學教授フィッシャー先生に一書を裁し同先生と關係深き東京農科大學鈴木教授の紹介狀を添へ明治四十一年四月の新學期より先生の實驗室に入り指導を受けたき旨を送りたるに先生は早速許可する由を返書せられた、依て同年上旬伯林に到着後間もなく先生に面會し研究題目を乞ひしに當時未だ休暇中なりしかば差當り先生の近

Berlin
ンリルベ

伯林大學
の入學手
續

年の大研究なるアミノ酸、ポリペプチード及び蛋白質に關する論文集一冊を貸與せられ之を讀むべく命せられた。

春休暇も既に終りたれば伯林大學へ入學の手續きをなす即ち先づ履歷書を認めて日本大使館の證明を得、入學願書には書式の如く生年月日、生地、親の職業等を記入し入學料九圓を添へて提出し外に一學期(半年)分の實驗料六十圓(之は實驗席と最も普通なる試験薬との使用料にして特別の藥品及び器具破損料は自辨たり)と講師グロースマンの化學工業の講義毎週二時間の聽講料十圓とを大學會計課へ納付した、愈入學式の日には總長は入學生に一場の訓話をなし後一人づゝ總長の前に出で握手するのである、因に此年より伯林大學に公然女子を入學せしむる事となりたから總長の演說中に從來は女子は聽講生の名義なりしも今よりは正當の大學生となるのであるから責任が重くなりたどありしを記臆す。

フィッシャー教授の化學教室は大學の本部とは餘程離れた所にあり全く獨立の大建築にして十二年前同教授の設計によりて萬事理想的に出來て居

化學部建
築物

研究室の
模様

第三十圖



上の圖は右の大講堂左端はフイツィヤ先生の住宅中央は實驗室の
下の圖は上の圖を右より見たるもの

る、其主腦たる同教授の住宅も構内に建てられてあり、先生は廊下傳ひで住宅から實驗室に往復せられるのである。

予はフイツィヤ先生から研究題目を授けられ終日實驗に従事して居る、先生は予及び他の門下生を大抵毎日一回見巡られ實驗の結果を問ひ且後來の方針を指示せられるのである、其門下生の中にはドクトルの試験に應せんとする所謂ドクトル候補者多數を占め、外に予等の如き外國留學生あり、又獨逸人にして既にドクトルとなりたるも猶止

フイツィヤ先生の
講義の

第三十圖



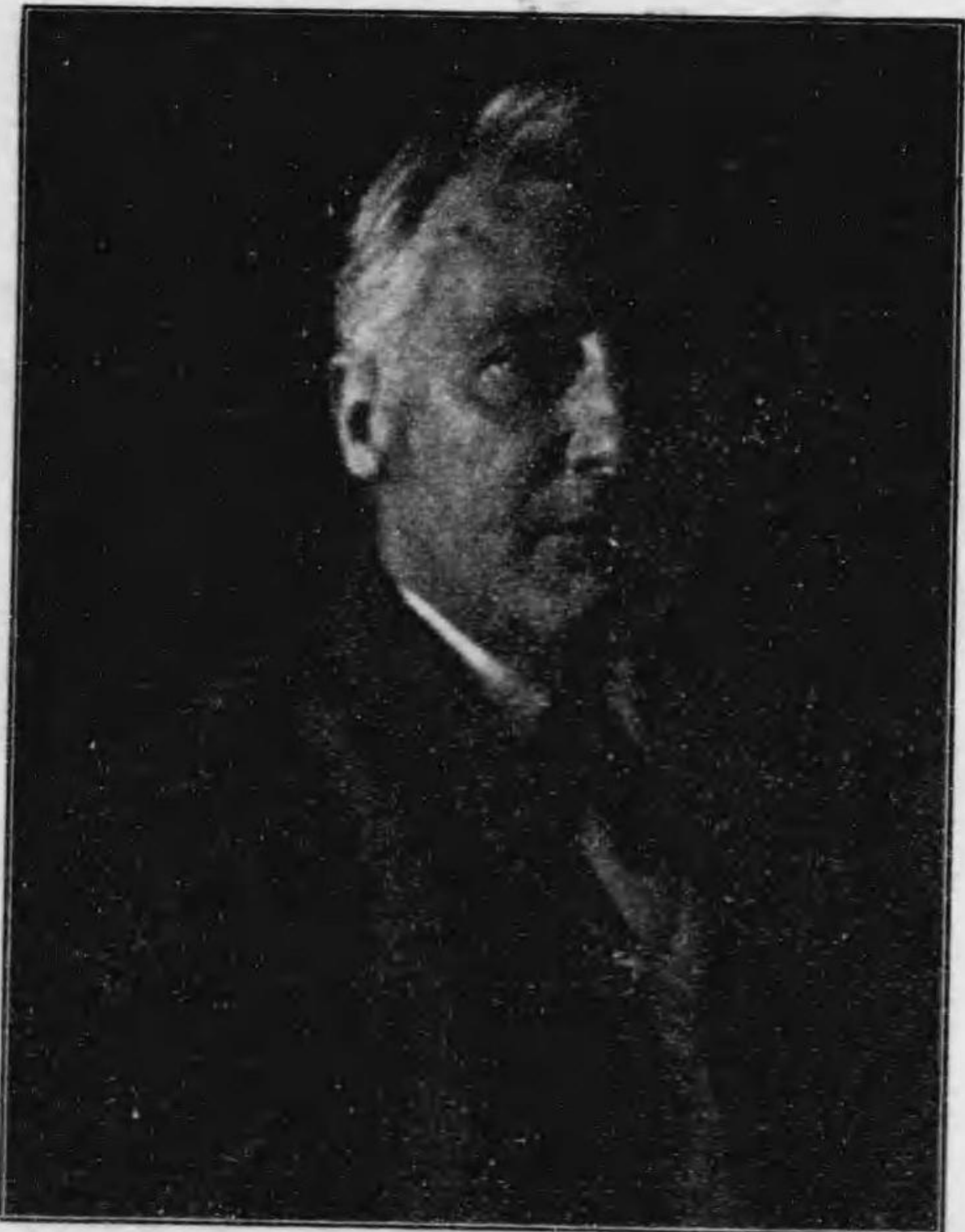
柏林大學化學研究所の教師生徒一同毎年一回遠足を圖上其の時繪くは、書葉にして小供は溜溜行ひ顕微鏡を以てその寒計を持或は文書讀むるに於ては、之を平日常實驗室に於て示すたる

まりて研究に従ふものあり、特に奇篤なるは柏林市内にて外科醫を開設せるドクトル、ラスケといふ既に五十の坂を越へたる肥大漢にして十數年來半日を同實驗室にて先生と共に有機化學の研究に費し半日を以て自己の業務を執れることなり、此の如きは全く學問を樂むもので直接自分の職業に利害の關係はないのである。

フイツィヤ先生は右の如く研究を指導する外冬學期十月より翌年三月に至るには無機化學の講義を毎週四時間せられるのである、予は二三回飛入りとして傍聴したのである、出席者は多數であるが男女の醫學生大部分なるが如く從て講義は極めて平易で大き

である、然し講義實驗は極めて多く標本も多く示し餘程面白く通俗的に講演せらる、されば其準備は中々大仕掛にして之が爲にドクトルの助手一人、熟練

第三十圖



Prof. Van't Hoff

に一人の者建創の學化理物は授教フホトンアフ
るたき開を門の學化體立て於に學化機有又てし
元ばれさ、りな人るたみ富にナリナゲリオ等
間時一週毎れらせ聘に學大林伯もるな人蘭和來
家大此くこ親席出回数亦予るらせ講を學化理物
去逝てしすらな年數に然りた得なく聽を説の
りあり餘にむ惜るらせ

迄間同様に講義する之をも三四回傍聴した、其外物理化學をフアントホフ教授が講演せられる、此の講義は特に公開にして聴講無料なれば學期の初めに

せる老助
手一人、小
使一人掛
り切つて
居る、有機
化學はガ
ブリエル
教授が夏
學期(四月
より七月

は多數の男女學生集まり聴くも次第に減少し學期末には數名となるを見て氣の毒に感じた。

又助教教授連の特別講義ありて各自己の研究せる狭き問題に就きて講義し志望者十數人乃至數人之を聴講し其聴講料が助教教授の唯一の報酬である、

第二、語學練習附英獨關係

瑞西滯在中滿一ヶ年間語學を研究したけれども猶不足を感じたから伯林に於ても之れが研究に務めた、下宿の主婦に其の事を話した處が主婦は前の下宿人なる日本海軍軍醫の語學教師なりし小學校教員(伯林市郊外の小學校教師)に相談して一週間に二回時刻は夕方來て貰ふ事にした、此の先生は年齢三十歳許の勇壯なる男であつたが非常のおシャベリであつた、余は會話が差當り必要であるので會話の練習をし或は作文の添作を乞ふた、會話練習の際には獨逸流の早や口で滔々と獨り辯じ去り余には少しも談話させないので豫期の如く効果を感じなかつた、此教師の物語の中最も余に印象を深からしめたのは獨逸と英國との關係に就ての談話である、否獨逸の國自慢である、即

獨逸語教師の獨英關係談

ち獨逸と英國との國勢の比較或は獨逸海軍が近時非常に擴張せられたので數に於て英國に劣らぬ陸軍は勿論優勢である等盛に吹聴するのである。或る時は比喩を以て獨逸の隆盛を説くのである。即ち英國は古來開店せる古店であつて其の向ふに獨逸てふ新店が出来て頗る繁昌して居る。處が古店は新店に得意の顧客を奪はるゝので新店を非常に嫉妬して之れを破壊せんと企てて居るなど憶する色もなく説明するのである。

處が此の先生の例話は實情を吐露したるものである。實際獨逸は英國を敵視して居る様である。曩の英國皇帝エドワード七世陛下をエドワードと呼び捨てにして居るのである。蓋し小學校時代から此の先生の主義を以て兒童の腦裡に印象せしむるのではないかと思はれた。余が下宿の主婦すら英國のエドワードは中々食へない男であるなどと口外するのである。要するに此の教師は毎日此の種の話の獨演するので余は飽き果てたのである。英國に於ても獨逸を嫌厭しては居るのであるが獨逸人の如く口外する事はない様である。併し獨逸では上下を通じて此の信念がある。丈け競争心に富んで奮闘的

獨人との差
異

日英同盟
に對する
獨人の態
度

精神に勝れて居る。英國に於ては中流以上の人は獨逸の勃興を視て心竅に平かならざる模様であるが中流以下の人は恰も支那人が文明と絶縁して居るにも拘はらず中華と自負して居る様に英國は世界一等國の中でも最も強國であると傲つて居るのである。獨逸は上下舉つて敵愾心強く競争場裡に勝を制せんとの意志に富んで居る。故に我々日本人に對しては日英同盟を締結しても餘り日本に利益はあるまいとか、此同盟は永續はすまいとか竊に當てこすりの辭を洩らす事がある。

余が伯林滞在中に英國のエドワード七世陛下が伯林を訪問せられた。其時余は偶不快のために實驗場を缺席した。而して翌日出席せしときドクトル某は余に向つて「君はエドワードを歓迎に行きたるなるべし。御土産を澤山貰ひたるならん」など何だが意味有り氣な嫉妬らしき言葉を以てからかつたのである。

余が語學の教師は獨逸風によつて學校職務の傍、外國人に語學の教授をなし夏季休暇には伯林の貧民子弟を引率して汽車を利用して郊外に出で公園

唱歌の稽古

を參觀せしめ或は運動遊戯を指導監督するなど奮闘的生活を續けて居た、此の貧民の子弟教育は市の事業で特別の手當があつた様である、獨逸人は總じて身體が非常に肥大で頑丈で元氣旺盛で人と語る時には口角泡を飛ばして談論するのである。余が小學校の唱歌の教授を受けたとき旨を先生に相談せしに先生はピアノを借りて準備すべしと余に命じた、余の下宿は貧しくてピアノの備へはなし甚だ當惑して居たが先生が云ふには勸工場に行つて器具のピアノを購ふて來るがよいと、そこで早速ウエルトハイムの勸工場に行つて間に合はせの低廉のものを購ふて歸つたが先生は之れによつて唱歌を彈奏して二ツ三ツ教授を受けたのであるが予は元來唱歌が出来ないので間もなく傳習中を止した。此の先生は一時間三馬の謝禮で高價ではあるし、また其の教授法にも満足せなから數ヶ月の後謝斷した。

獨逸語私塾

夏季休暇中矢張り獨逸語研究のため私塾に通學した、塾には青年男女が集つて居たが主として事務員目的の人が習字、作文の稽古に來て居る様であつた、獨逸でも事務員になるには文字や簿記、タイプライタイ等をよくせねばならぬのである、余は先生に獨逸文を讀んで貰つて之れを書取り其の誤謬を訂正して貰ひ又發音の練習をしたが l と r との發音の區別には殊の外困難を感じた。

私塾の先生は瑞西の人で英語に通じて居たから教授を受くるのに好都合であつた、先生は前の小學校の教師と違つて頗る寡言で叮嚀であつた、斯くの如くして夏季休業中語學の研究に務めた。

伯林市設
補習學校
へ通學す

其の後伯林市に於て夜間補習學校に通學した、是れは日本の留學生の餘りなきない處である、伯林市の事業で補習學校を設け、獨語、佛語、算術、簿記、速記等の學科があつて教師は市内の中等學校教師を傭聘して各自の専門學科を講義せしめたのである、伯林には此の種の學校は澤山にありて男女の何人にも志願によつて入學を許した、余は語學の研究と補習教育の狀況視察とを目的にして明治四十一年十月から半ヶ年程(夏學期と冬學期との二學期に分れて居るが余は冬學期に半ヶ年入學した)獨語と佛語との二科を選んで聽講した、其の程度は獨逸語は小學校を終へた人に教ゆるのであるから餘程高程度で

ある主として實用的の誤り易き語及び文法の教授に力を注いで居たけれども教師が餘り熱心でなかつたから久しからずして止めた。

佛語の教師は頗る熱心であつたから余も亦缺席なく勉強した。佛語は初等と高等との二級に別れて居たが余は日本に於て初歩を學んで居たから高等の部に入學して見たが會話、作文などが六ヶ敷さうであつたから初等の部に轉じて勉強した。

晝間實驗場に於て實驗に従事し午後八時頃登校すると種々雑多の職業に従事せる少年青年が先きを争ふて集つて來る。商家の丁稚などには義務的に就學せしむる模様であつた。一日遅刻せる少年に對して教師は汝は何故遅刻したか主人の仕事に依つてか、若し然らば主人に照會して見んななどと詰問しつゝあつた。其の他軍隊の下士官から、二十六七歳位の會社員、事務員或は商店の女事務員など佛語研究の篤志家が集つて來るのである。すると先生は出席簿を調製して出席を調べる。佛語の教師は一つの教科書によつて初歩から教授をなすので、會話文法書中の單語を教授すると直に其の單語を應用して會

補習學校
に於ける
佛語教授
法

話をなさしめ或は作文を綴らしめ、黑板上に生徒各自の作文を書せしめ之れが批評訂正をなすのである。又或る文章を全生徒に齊讀せしめて暗誦せしむる事は恰かも日本の小學校に於て發音教授の際齊讀せしむるのと全く同様であつた。冬の寒威凜烈の時であつたけれども缺席なく六ヶ月間勉強した。

其後伯林から英國に轉學の途中佛國巴里に九日間滯留し遊覽を試みた。宿屋に着いて見ると佛國人は不思議に外國語に暗き國民であつて自國語の外何語をも語らないのである。併し補習學校に於て佛語教授の御蔭にて全く通辯なしに市中の參觀を終へる事が出來たので余は早速補習學校の佛語の教師に感謝状を送つた。

此學校は市設であつて成るべく廣く利用せしめんとする趣意であるから其謝禮の如き殆ど零にして半年の中に僅かに二圓位を納めたのみであつた。

第三、通俗教育及教員養成

伯林市の通俗教育の爲めに設置せられたウラニヤと云ふ劇場を見た事があるが此の建物の眞中は全く普通の劇場見た様に出來て居て其の兩側には

通俗劇場
ウラニヤ

廣い廊下が通つて居る、廊下には物理器械に其の説明書を添附して陳列せられてあるが參觀人に自由に實驗せしむる様になつて居る。

而して其中央の劇場見た様な巨室では折々名士の通俗講演會が開催せられる、余が入場した時には恰も幻燈でアルプス山脈中のモンブラン峯に登つた時の寫眞を澤山映畫し之に就て登山の道途中の風景、同峯中にある高山植物などを説明し、恰も實景を視るが如き感あらしめた、又時には講習會が開かれて大學の教授や各士が十回或は五回と回数を決めて自己の専攻學科の講演をなす事もある。

伯林市の郊外に天文臺があつて一定の時期には望遠鏡で天體を觀測せしむるのである而して天文に關する講演會も時々開催せらるゝと云ふ話であつた。又伯林市で中等教員の講習が開催せられる、一日余は理科に關する講習を視察したが學科は物理學、化學、動物學であつて講師は、物理の方はドロッテン、ステッチシエン、レアールギムナジウムの教師のハーン教授である、余は曩に同氏の奉職せる學校を參觀した時に會見した事があるが頗る老練家である。

伯林市設
中等教員
講習會

講習の事
項

化學は同じレアールギムナジウムの化學の教師ベットガー教授である、當地では中學教師でも長く教職にあればプロフェッサー即ち教授の稱號を得るのである、講習員は其の附近の中等學校教師であつて午前中に教授を終へて午後汽車や電車の便によつて集合するのである。

講習事項は重に實驗である、物理の方では簡易の器械で種々の測定をなして居る例へば地球の引力の値を定めるとか磁石の磁力を試験する等である、化學の方では講義實驗の練習をなすのである、例へば硝子細工の練習をなし又水の生成の際の熱量の測定などをして居た、リュッドルフの化學原理と云ふ良書があるが之れは元來此の實科中學校に奉職せしリュッドルフ氏が編纂した書であるが同氏の死去した後其の後任者リュッブケイと云ふ人が第一回の増補をなし、其後今の教授のベットガー氏が第二回の増補訂正をなして此頃發行して居る、其本の中にある困難な實驗を練習して居た、動物の方でも實驗をして居たが主として蛙や蛇などの解剖の練習であつた。

獨逸では我が國の様に中等教員を養成する高等師範學校の設置はないの

であるから大學卒業後、檢定試験を受けて資格を得るか若しくは中等教員であつて特に講習會に出席して勉強し檢定試験に合格した人が中等學校の教員となるのである。

第四、學校參觀

他の市にては直接に學校に行きて參觀を頼みても許可されしが伯林市にては參觀人多きため手続き甚だ面倒にして先づ是れくの學校を參觀したいと同市の日本大使館に願書を出し、大使館より普國の外務省文部省へ廻り許可證は逆に廻はりて本人に達するので少くも二週間を經過せねば許可證を得られぬ、余も此の手續きを経て左の學校を參觀した。

(1) ベルリン市第十四實科學校 *14. Realschule, Berlin.*

六學年の簡易中學にして物理は終りの三年間毎週二時間授くるも化學は最後の一年間毎週二時間授くるのみ。

(2) ルイゼン高等女學校 *Luisen-Schule, Berlin.*

九學年の上に補習科の如きもの一年あり、理科は終りの六年間毎週二時間

づゝあり、其内にて物理及化學は最後の二年及び補習科にて授け、主として日常生活に關する事項を撰みて教へ、補習科にては有機化學中の家政に關する部分を授ける。

余は算術及電氣の講義を聽きしが復習、問答及び計算問題を多く課せり、時間の都合により地理の時間をも參觀せしに受持教師は老練家にして余を利用して日本の雨量は如何になどと生徒に問ひ生徒は各自の前に控へたる統計圖に就て之を求めたり、之れ日本人の標本を目前に控へ居ることなれば記憶を助くこと大なればなり。

(3) ドロテオン、ステーチッシェ實科學校 *Dorotheenstädtische*

Realelymnasium.

九學年の實科學校にして三年の豫科を附屬す、物理及び化學は終りの四年間にて合計十八時間(數學四十二時間)にして約物理三化學二の比例をなす、但し化學の中に簡易なる礦物及び地質學を含有す、化學は無機化學に止まるが如く、最後の二年間隨意科として毎週二時間の化學實習をなさしむ(名は隨意

日本人の
生きたる
標本に利
用せらる

科なれど實は正科と同じ物理にても同様隨意科として講義の進度に應じて
四年間毎週一時間の實習をなさしむ之れが爲めに簡易なる物理器械は六組
づゝ備へ居れり。

此校の化學教授ドクトル、ベットガーは老練家にして生徒に復習問答をな
すとき其答の言ひ顯はし方を嚴重に訂し生徒の不合理のことを言ふあれば
罵言愚弄至らざるなし。此校の生徒の参考書は上述せし *Rudolf-Jüpfke, Grund-
riss der Chemie, 及び Böttger, Naturlehre* なり。

(4) ヘルリン市フリードリックス、ウエルデル高等實科學校

Friedrichs-Werdersche Oberrealschule

九學年の課程にして化學及鑛物は終りの四年にて合計十一時間、物理は終
りの五年間にて合計十三時間、數學四十七時間を授く化學にては有機化學の
初歩をも授く、計算問題を與へ三ヶ月毎に論文を草せしめ又修學旅行をなす
廣き實驗室ありて隨意科として定性分析を課せりといへり、此校の前身は工
業學校なりしこの事にて當時の標本類の古物多くあるを見たり、有名なる尿

素の合成者ウエラーも當時教授たりしこの事なり。

生徒の物理實習を參觀したるが二人づゝ組合ひ稍精密なる測定をなし恰
も我國高等學校生徒のなすが如し。

(附) 普國ギムナジウム課程の變遷

1856(六年程度)一ヶ年間ごとく 1901(九年程度)全上 1901(九年)實科中學 1901(九年)高等實科學校

	1856(六年程度) 一ヶ年間ごとく	1901(九年程度) 全上	1901(九年) 實科中學	1901(九年) 高等實科學校
宗教	14	19	19	19
獨乙語	13	26	26	34
ラテン語	58	68	49	欠
ギリシヤ語	24	36	欠	欠
佛語	11	20	29	47
英語	欠	欠	18	25
歴史及地理	16	26	30	32
數學	21	34	42	47
理科	9	18	29	36

文科中學
の實科的
學校の
課程の差
異

國	6	8	16	16(外に師範(理科)10)
獨	6	4	4	6

獨乙國に於て實科的學校數の増加の傾向を示すため左表を掲ぐ

獨帝國	一八九五年	二七五	四八	八〇	二二	八〇	四九
	一九〇五年	三三四	四五	八四	四〇	二九	一四四・二一・三五一・六
普王國	一八九五年	四三四	五八	一三〇	三三	一〇九	一七一
	一九〇五年	四九〇	八一	一三〇	七三	五一	三三五・五七二・〇五三四

文科學校五七二

實科學校五七九

此外實科學校的課程を有する農學校其他の専門學校は獨乙全國に三十
四校あり、且つ獨帝國の陸軍幼年學校は悉く實科中學の課程に従ふ。

二十年前よりフランクフルト或はアルトナ式改良案なるもの用ひらる之
れ小學校三年を終へたるもの(約九歳)を入れ三年間はラテン語及びギリシャ
語を授けず、全く實科學校の課程を授け第四年即ち十二三歳となり自己の傾

獨國に於ける實科的學校増加の傾向

中等學校改良案

向を知るに至れるものより或は文科中學と實科中學とに分れ(フランクフルト式)或は實科學校と實科中學とに分る(アルトナ式)。
今アルトナ式にて數學、博物、理化學のみの時間割を舉ぐれば左の如し

數	第一學年	5	5	5	4	4	4	4	5	5	5
	第二學年	5	6	6	5	5	4	4	5	5	5
物	第一學年	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	第二學年	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
理	第一學年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	第二學年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
化	第一學年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	第二學年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

改良案に於ける理科配當

第五、ミューンヘン市へ修學旅行

伯林に居る時主なる時間はフィッシャー先生の實驗場で實驗に従事したのであるが伯林大學講師ドクトルグロスマンと云ふ人が化學工業の一斑を講義したので一週間に一回(二時間)宛聽講に行つた、大學の本部で講演するので

余等の實驗場からは随分離れて居たれども先生は時々諸種の工場を生徒引率で參觀したので余は其の工場視察を目的にして此講義に出る事にした、蓋し現今獨逸人は日本人のみには絶對的に工場參觀を許さないのである。余が入學後先生は工場參觀の名目で旅行を思ひ立つた、而して生徒中より有志者を募集してミュンヘンまで旅行する事に決したので余も其の一行に加入した、明治四十一年六月三日暑氣既に催したる頃伯林を發した、同行者は九人であつて種々の人物を含み實に雜駁なる團體である、化學者としては引率教官なるドクトル、グロースマンと余との外米國より留學せるミシガン大學助教教授コーン氏と大學生一人のみで他は司法官候補、經濟學々生等である、扱てドクトル先生の今日の服裝如何と見れば全く若年の學生姿である、平常の背廣服に彼國學生の登山の際に通常背負ふリュックザックと稱する袋を背負ひ意氣昂然である、他の學生等も皆輕裝し小なる手カバンを携へて一同停車場に集合し汽車に乗つた、汽車は勿論三等で然かも特に大學より照會して得たる往復割引切符を以て割引して貰つたのである、車は疾走すること數

第三十三圖



獨乙學學生泡立つてルを學びて視す

時間で夜十時頃獨逸の古市として名高いニュルンベルグに着し一ホテルに投宿したが折り返しビール屋に行き早速一杯のビールを乾して互に健康を祝し或は飲み或は食ひ席はいつしか景氣附いた、ドクトル先生は嘗て此の地に學んだ事があつたのであるが學生時代からのおなじみでビールの味も人知らぬ妙味を感じたらしく酔ふては大言壯語し夜の更くるのも忘れて居る、余は疲勞と催眠と一時に襲ひ來つて旅館に歸るを心中希ひ居るも見習生の悲しさ是れを忍ばねばならなかつた、日本人の習俗と異なり

第三十四圖



獨乙學生の裝服及煙管

獨逸人はビール屋に於ても自分の知己とのみ一團をなさずして一面識もなき人々と大なる集團をなして頗る平民的に長時間談話を交換しつゝ飲むのが常である。午後十二時頃までビールを酌み交はし旅宿に歸り米國の助教授と二人同じ部屋のベッドに安眠した。

明くれば早朝より市中見物のため乗合馬車に同乗し出發前には紀念のためとて一同車上にて撮影をなした。先づ馭者は有名なる古城に導ひた。此の城は小高い丘上に築かれて市中を瞰下すべき展望に富んで居る昔罪人を拷問に掛けた種々の器械及び拷問の繪畫などが掲

München
ンヘンユミ

ミュンヘン
は美術
の市なり

げられてある。一見悲惨の念を禁ずる事は出来ないのである。

次に博物館を參觀し夕方汽車に乗つてミュンヘンに向ひ夜十一時頃ホテルに投じた。例によつて今夜も亦ビール屋で夕食し深更に至つて初めてベッドに就いた。

ミュンヘンは此旅行の目的地で四日間滞在したけれども一のビール醸造會社を覽たるのみにて他は嘗て余が參觀したる獨逸博物館美術館の觀覽及び公園の散歩郊外への遠足位で多くは自由行動を取つたのである。

偶當市にバイエルン王國(ミュンヘン市のある國)の博覽會が開催せられて居たが家具裝飾品教育品等の陳列品が澤山であつたが就中感心したのは小學生徒の物理筆記帳に書いたポンプ、蒸氣機械等の簡易物理器械の圖書の巧妙なる事であつた。當市は元來美術の發達せる所であるから其の影響にてもあらんか兒童の美術技能に長せる事に一驚を契したのである。其の他小學校に於ける高學年で行はしむる物理及び化學の實驗室の實際の模様及實驗機器具材料等が一室に陳列せられてあつて實驗の順序、方法、生成物等を實物を

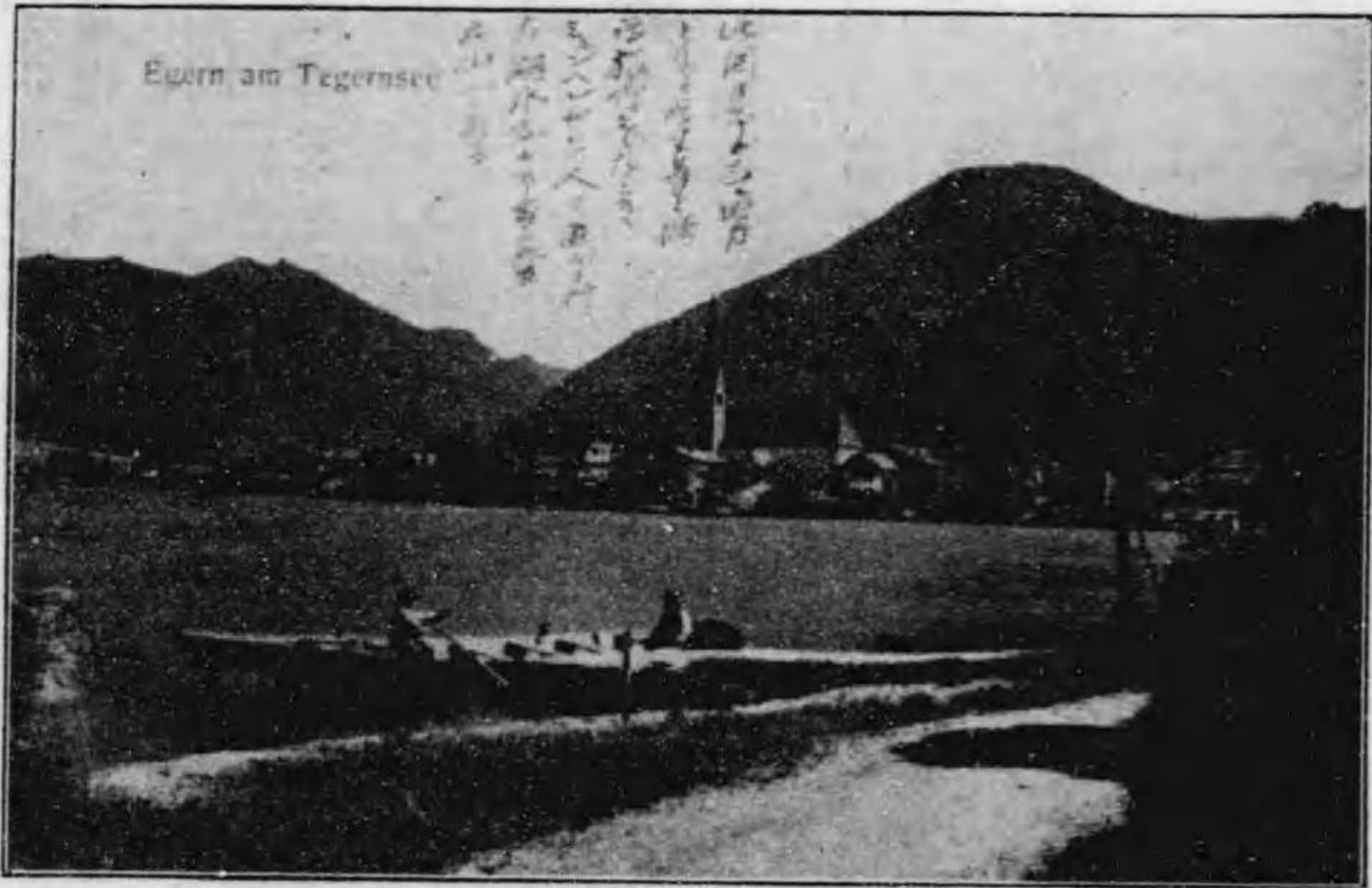
小學校に於ける理科實驗

以て説明的に陳列せられてあつた。

當市の小學校では五、六、七學年で庶物教授の十九の材料の内七つ丈は化學の材料を取り扱ふ事になつて居る、八學年になると毎週二時間宛化學の實驗をなさしむるので其の實驗費の見積りは設備費が二十人の生徒に向つて天秤分銅、電氣分解装置各々五組で價格百七十圓其他小器具が十人分で百七十圓合計三百四十圓の割である而して各生徒の割前金高は拾七圓である。物理も各週二時間宛一ケ年實驗せしむる様になつて居た、斯くの如く小學校に於ても物理學化學の講義と共に實驗をなさしむるのである歐州の物質的文明の發達故あるを想見するに足るであらう。

ミュンヘン滞在中余は同行中の司法官試補及び大學生一名と共に郊外遠足を試み約七百米の山に登つた、余は嘗て中學生徒時代に脚氣を病みし以來今猶脚弱く登山には最も不適當である、此の時も途中で非常に苦しくなつたので同行の二人に余は此所に休み居る故登山し來れと云ひしも強て同行を勧められ所謂牛に引かれて善光寺詣りのそれにはあらで獨逸人に引かれて

第三十五圖



ミュンヘン市郊外テゲル湖及び予び登りし山

山登りをなしたが過度の運動は遂に宿痾の痔疾を再發し在外中時々苦んだ之れを治するため歸朝後二週間を病院に過すの止むなきに到つた次第である、此の登山は余に取つては好紀念ではなかつたけれども獨逸人の登山遠足を好める事、従つて身體の頑丈なる事及び日本人の弱點の此の點にある事等を知り得たのである。

かくて此の修學旅行は遊覽七分工場視察三分ともいふべき結果なりしも、間接に得たる利益は決して少なくないものである。

ミュンヘンに於て修學旅行は解散した

Jena
ナエ

獨逸化學
者會合

余は引率者ドクトル、グロースマンと米國の友人と三人、歸途エナ市に立ち寄り當市にて開催せる獨逸化學者會合(主として工業化學者が組織して居る會)に列席した。此の會では演說、宴會及工場參觀等の事業が成されるので予は獨逸に滞在せる化學者の資格にて入會し、斯る會合の模様を實見せんとした。

其の時馬獅子アニリン曹達會社技師のシェーンヘルン *Schönherrn* と云ふ化學者が空氣中に電氣の火花を散らして硝酸を作り即ち空氣中の窒素を利用して硝酸及び肥料を製造する方法を成功したので是れに就ての演說及び實驗があつたが本會は其の功を賞して賞牌を授與した。

其の他エナ市長の歡迎演說及びエングラ教授の石油の成因に就ての演說等があり夜は會員の宴會があつた要するに本會の目的は一は化學の進歩發達を計り一は化學者の懇親を計らんがためである。

エナ市には有名なる光學器械の製造所があり又エナ硝子の本家なるシュット及ゲン *Schott u. Gen* 硝子製造所がある。エナから少し離れたカーラの陶器製造所をも見たが此等の製造所では余は會員の一人であるから視察は許し

エナ硝子
の製造元

第三十六圖



像並のミルレルシとテリゲるあに市レマイロ

たが併し余の舉動に就ては頗る嚴密な注意をして居た。ツァイス光學器械陳列場では監視人がイヤに余を注意して居たので非常に不愉快に思ひベルリンに歸つてから其の理由を質して見たが曩に日本の瓦斯會社の技師某工學士が丁度予の行た前に此處に來り硝子製造所の職工から或る製法を學ばんと思ひ其職工を旅館に招きたるに遂に秘密を盗まんとする者なりとの嫌疑を受け殆んど罪人同様の扱ひをされた事があつてそれより當市一般の工業家が日本人を疑ひ居りしたため余に對しても禮を缺きし事と合點せられたり。

Weimar
ルイマツ

ゲーテ博
物館

Rügen
ンゲイリ

エナ市から歸途ワイマールと云ふ小市に立ち寄つて獨逸の詩聖シルレル、ゲーテの遺物を見た、此の二大詩聖の住つた住家に其の寢具及び其の他の遺物が保管せられてある、ゲーテの遺物の一切を陳列した所を見たがゲーテが詩人としての外に醫學を研究して居た事、物理及び博物の諸學にも精通して居た事は生理の標本、物理博物の器械標本の遺物によつて知る事が出来た。ゲーテの時代に始めて英國に出来た汽車の模型を英國の友人からゲーテに贈つて來た、其の模型が今だに残つて居る、又ゲーテの父母兄弟などの肖像を油繪にしてゲーテ館に掲げられてあつた。

是れがドクトル、グロースマン氏と共になせし短期修學旅行の概略である。
第六、北部獨逸、瑞典及び丁抹の旅行

明治四十一年八月獨逸國伯林に留學中夏期休暇を利用して此旅行を企てたのである、八月十八日に伯林を出發し汽車に客たる事四時間にして獨逸の北端なるグライフスワルド市に着いた、當市は餘り大ならざる市街であるが有名なる大學がある、此處から小蒸汽船に便乗してリューゲンと云ふ島の東海

第三十七圖



リューゲンのビーチに休息する小屋の並ぶ列の状

岸なるピンツと云ふ海水浴場に着いた、此處には余が友人なる獨逸人のドクトル某が前日から遊んで居て瀕りに余に來遊を促がした之れが余の此の旅行をした所以である、此の地で獨逸海水浴場の状況を視察し旁々二三日保養する事にした。

其の日の夕方當地に來着したのであるが夏の事とて浴客非常に多く従つて旅館は大方満員である、せんすべもなければ友人の旅館の附近なる小さき別荘に投宿した、翌日は早朝起床して海岸を散歩したが久方振りに海波洋々たる景色を眺望し海國生れの余には無限の快

を感じたのである。

浴場は日本のそれと同様で白砂一面に敷かれ遠淺さになつて居るから海水が非常に清澄で又游泳には適當である。北部獨逸であるから日本の八月の様に暑さを感じなかつた。随つて實際海水に浴するものはなかつた。皆簾で造つた編物もて周圍を張り廻はせる小屋を海岸の砂上に建て其中に入りて休憩して涼を納れ或は讀書して居る。其の附近には浴客相手の料理店、見せ物、珈琲店等が設けられて非常に殷賑を極めて居る。

友人ドクトル某は其の弟と知己の婦人數人と婦人監督として隨伴せる老婆と同行して居た。余は彼等の附近に宿して居たから案内に應じて彼等を訪ひ郊外に散歩し海濱に遊び或は旅宿に於て快談を催すなど全く彼等と行動を一にした。余が斯くの如く彼等に接して居る間に觀察したる歐人男女交際の狀況は次ぎの如くである。ドクトルが同行せる婦人中に目立ちて若き一人の婦人があつた。此の人には監督として其伯母なる老婆が附隨して居る。此の青春の令嬢は無邪氣で所謂オテンパであつたがドクトルは此の婦人に接近

歐洲男女
交際の
一斑

して強いて其の歡心を求めんと努力した。弟は常に彼れの側に居るも少しも意に介する所ではなかつた様である。

一夕ドクトルは其の婦人と散歩せん事を挑んだが伯母は監督權を笠に着て聽き入るべくも見えなかつた。ドクトルは強いて要求し老婆は頑として許さず果ては口論に及んで居た。併し大体婦人が否む譯ではないのであるから散歩は遂に成立して余と友人の弟と四人間中の散歩を試みた。余と其の弟とは彼等の意志疏通を妨げんも氣の毒なりと感したるまゝに或る間隔を置いて日本歌など歌ひつゝ歩を運んだが彼等は傍若無人の体にて談話に夢中である。併しながら彼等の戀ひには一つの汚點なく高潔であつた。

爾後伯母の監督の下に於て久しく交際して居たのであるが郷里なる此の婦人の兩親は彼等の交際を好まざりしにや間もなく其の婦人を他人の妻に云ひ名附けたのである。ドクトルの落膽は讀者の想像以上であつた。此の破目に陥りし原因は恐らくはドクトルが猶太人であつたからであらう。彼の年少婦人は海濱に遊ぶ毎に砂の中に大なる穴を穿ちて其の中に坐し周圍から

砂をかけて砂中に埋まり或は砂を散亂して他人を妨ぐる等の悪戯をなして遊んだのである。

或る日余は此地の湯屋に行つたが一人の番頭が居た番頭は嘗て水兵として軍艦で日本に來た事があるので余を見て何となく懐かしく感じた模様であつた余の傍に來て日本の風呂は非常に熱いから熱くして上げんなどいと懇ろに待遇せし上種々日本の話を語り出でたが余も亦日本人に邂逅したかの如き快感を催した之がために去るとき常よりも多くの酒代を與へて彼れが親切に酬ひたのである。

此地滞在中或は海岸に遊び或は小説に寂寞を忘れ或は郊外散歩に風光を賞して楽しく過した。

ビンツから船で同島内なるスツーパーベンカンマーに遊んだ此處は海岸より直接に四百餘尺の斷崖絶壁屏風の如く立ち非常に奇觀を呈して居る故に觀客常に踵を斷つの暇がない其の崖上には奇岩足下に集まり寧ろ前面に突出したる臺地あり此所に登りて眺望すれば遠く海上を望み直下には石灰岩の

スツーパー
ンカンマー
の奇岩

獨逸の小
學校教員
と道連れ
となる

風雨の侵蝕作用を受け其奇形壯觀筆舌の及ぶ所ではないのである此處を見終れば獨逸瑞典の間を往復して居る郵便船に乗じて瑞典に向つた乗船する前一の料理店にて午食せし際偶然三人連の獨逸の小學校教員と知己になつた一緒に談話しつゝあつたが一般に獨逸人は好奇心に富んだ國民であるから余等の如き外國人を見るとき直に傍に來つて種々の質問をなして其の土地の事情を聞く風がある此の點に於て英國人と全く異つて居る此の獨逸人等は西部獨逸のウエストフールン地方の小學校教師であつて夏休暇を利用して旅行しリュゲンの海水浴場に遊び今恰も丁抹に渡らんとして居る處である彼等の質問の内に「日本の小學校教師も斯くの如く旅行するか」と云ふ問ひがあつた余は直に「日本の小學校教師は小旅行は常になす處であるが君等の如く大旅行をなす事は殆んどない日本は小學校教員の俸給が至つて少額であるから大旅行を試むるの餘裕はないのである」と答へた彼等は語を續けて何程なるかを發問したから余は小學校令に規定せられたる教員俸給令を物語つたとすると彼等は異口同音に其の少額に同情の意を表した獨逸の小學